が唐將の劉仁軌は我が海軍を白村江口に迎へて大に之れを擊破したので百濟は遂に全く亡びた。是れ實に我が紀元千三百二十三年である。既に日本の軍を破つて百濟を亡ぼした唐は勢に乘じて高麗を討つた。當時高麗は內亂の爲めに統一がなかたから唐の高宗は好機逸すべからずとなし李勣に命じて平壤を圍ませた。是に於てか高麗は遂に我が紀元千三百二十八年を以て亡びた。そこで新羅以外の朝鮮の地は悉く唐のものとなつた。時に新羅の文武王は其の英明の資を恃んで頻りに高麗の餘衆を使嗾して亂を起さしめ唐の領土を蠶食した。そこで平壤も新羅のものとなり唐が朝鮮を統治する爲めに置いた安東都護府は遼東に移つた。此の後唐は內憂相次いで起つたからして力を外に專らにすることが出來なかつた爲めに事實上新羅は殆んど朝鮮全土を併呑することゝなつた。

次いで高麗を亡ぼす

新羅の膨脹

前に述べたところによつて唐が其の太宗、高宗時代に於て實に空前の盛大を致したことは明かであるが太宗は又從來の諸朝と異なり外國の待遇法が旨かつた。由來漢人は外國人を蔑視し東夷西戎南蠻北狄などと稱して

太宗夷狄を優遇す

殆んど之れを禽獸視するからして爲めに外國人の歡心を害し其の統御を困難ならしめたのであるが獨り太宗は是等諸夷を視ること本部人と同一であつたからして四夷は皆且つ恐れ且つ愛した。太宗曾て太上皇を奉じて未央宮に置酒した。時に上皇は頡利可汗に命じて立つて舞はしめ又嶺南の蠻酋馮智戴に命じて詩を咏せしめた。そこで帝は笑つて云ふには胡越一家古より未だあらざるなりと。以て夷狄を待遇するの巧みであつたことの一證とするに足るではないか。

唐の諸國統御法

唐は其の太宗高宗時代に得た四方の諸國をば統御する爲めに六都護府を立てた。

第一は安東都護府で是れは平壤に本部を置いて朝鮮及滿州を支配した。

第二は安北都護府で回紇に本部を置いて北蒙古卽ち突厥の地を管轄した。

第三は單于都護府で雲中を本部として內蒙古の土地及び鐵勒諸部を管轄した。

第四は北庭都護府で庭州を本部となし天山北路卽ち西突厥の地を管轄し

た。

第五は安西都護府で西州を本部として天山南路及び中央亞細亞卽ち西域諸國を管轄した。

第六は安南都護府で交州を本部とし南海諸國卽ち安南ビルマ印度支那の方面を管轄した。

此の都護府の下に都督府と州とを置いた。そして都護府には都護を置き都督府には都督を置き州には刺史を置いて之れを治めた。中にも刺史と都督とは在來の酋長を以て之れに任じたが都護ばかりは朝廷から派遣した。當時六都護が支配して居つたところの州の數は八百五十六の多きに及んだ。

當時の歐亞の交通

斯くの如く唐代に至つて其の版圖が頗る大となつたことはやがて世界の交通を盛んならしめ中にも猶太人は商業に巧みなものであつたからして交通の便を利用して西は歐羅巴、阿弗利加より東は支那、印度に至る間の商權を握り或は紅海より印度洋を經て支那の南海に至り或は地中海より中央亞細亞天山南路を經て支那の長安に往來した。サラセン帝國の勃興するに及んで海陸の交通權は阿刺比亞人に歸した。海路に於ては錫蘭を世界商業の中心となし支那人を初めとしマレー人も波斯人も凡べてこゝに集つて貿易をなした。サラセン帝國の勃興するに及んで阿弗利加、西方亞細亞及び印度河口の諸の港灣は悉く其の版圖に歸したからして波斯人及猶太人と共に益海運を盛んにし南洋諸國を經て支那の沿岸に通商し支那人に代つて亞細亞の航海權を專有した。我が紀元千三百五十年の頃には阿刺比亞人が今日の廣東、福建、浙江などの江南沿海の諸港に來るもの頗る多く其の數萬を以て數へるほどであつた。唐は是等の諸港に提舉方舶なる官を置いて輸入品に海關稅を課し以て歲入の財源となした。然かも唐の漸く衰へサラセン帝國も亦國勢振はざるに及んで歐亞の交通は又次第に衰微した。

第四節　唐の制度

第一官制

唐の制度は大概、太宗及び高宗の時代に完成したのである

三公三師

六省五監九寺一臺

中書省

門下省

尚書省

が此の制度は我が國の大寶令の模範となつたのであるからして頗る研究の價値がある。さて唐の官吏中で一番位の高いのは三公三師である。三公と云ふのは大尉、司徒、司空を云ふし三師と云ふのは太師、太傅、太保を云ふのである。然しながら是等の官は我が國の太政大臣の如く言はゞ名義のみのもので實際政治に關係したものではない。實際政治に關係したものには六省(尚書省、中書省、門下省、秘書省、殿中省、內侍省)五監(國子監、少府監、將作監、軍機監、都護監)一臺(御史臺)九寺(大常、光祿、衛府、宗正、太僕、大理、鴻臚、司農、大府)であるが此の中でも直接に最も多く政治に關係したところのものは僅かに三省である。卽ち唐の官制中で最も重もなるものは尚書省、中書省、及び門下省の三省である。中書省と云ふのは詔勅を宣奉することが重もなる仕事で其の長官を尚書令と云ふのである。門下省は中書省の宣奉した詔勅を審査することを司るもので其の長を侍中と云ふのである。次ぎに尚書省は三省の中でも最も仕事が多いので卽ち中書省の宣奉し門下省の審査したところの詔勅を實際に天下に施すところのもので其の長官を尚書

六部

六部は大寶令の八省の依據

十道

令と云ひ其の副官に左僕射と右僕射とがある。左僕射の下には吏部と戶部と禮部の三部があるし右僕射の下には兵部、刑部、工部の三部がある。是等六部には各尚書と云ふ長官がある。吏部は官吏の選叙勳封考課などのことを司る。戶部は戶口班田のことを司る。禮部は禮儀祀祭宴饗貢擧などのことを司る。兵部は軍衛及び武選のことを司る。刑部は律令、刑法及び徒隸關禁のことを司る。又工部は百工、屯田、山澤などのことを司る。是れに由つて見ると尚書省の六部こそ我が國大寶令の謂はゆる八省の依據であるし又大寶令の八省は現今我が國中央政府の十省の依據である。

右は中央政府の官制であるが地方の官制は如何と云ふに太宗は山河の形勢に依つて貞觀の初めに中國をば十道に分つた。第一は關內道で今の陝西甘肅の幾分を含んで居る。第二は河南道で今の河南、山東の二省並びに江南の淮水以北を含んで居る。第三は河東道で今の山西省を含んで居る。第四は河北道で今の直隸、山東の一部を含んで居る。第五は山南道で今の陝西、河南、湖北、四川の一部づゝを含んで居る。第六は隴右道で今の甘肅、

四川の一部を含んで居る。第七は淮南道で今の江南江淮の間及び河南の一部を含んで居る。第八は江南道で是れは今の湖北、浙江、福建、江西、湖南、貴州、四川の一部づゝを含んで居る。第九は劍南道で今の四川省の大部分を含んで居る。第十は嶺南道で今の兩廣及び安南を含んで居る。此の道を幾多に分つて之れを州と名付け州の數は凡そ二百九十三。又州の下に縣と云ふものが置かれた。縣には令と云ふ長官を置き州には刺史と云ふ長官を置き其の上の道には巡察使を置き以て州縣を治めさせたのである。」

生徒

第二官吏登庸法　唐の世に於て官吏を登庸するところの法は生徒、貢舉、制舉の三種であつた。京師の諸の學館や州縣の諸の學校から其の卒業生を尚書省に送つて試驗を受けさすのを生徒と云ふし學館の出身でないものは先づ州縣に於て試驗を受け是れに及第したならば京師に至つて尚書省で試驗を受ける。之れを貢舉と云ふのである。此の二法の外に天下非常の大學者を待遇する爲めに天子自ら試驗することがある。之れを制舉と云ふのである。又生徒及び貢舉には秀才、進士、明經などの目があつて

貢舉

制舉

秀才進士明經

其の試驗の課目も違つて居る。秀才には方略策の五道を試みるし進士には事務の策五道と雜文二篇とを試みるし明經は經策十條と每經十帖とを試みるのである。此の外試驗官は受驗者の身、言、書、判の四者を考査するのである。即ち身は體貌豐偉なるを善しとし言は言詞辯正なるを善しとし書は楷法遒美なるを善しとし判は文理優長なるを善しとする。此の中でも唐の世を通じて最も盛んに行はれたのは進士、明經の課である。

身言書判

第三、兵制　唐の兵制は其の初めは北周の法に倣つて府兵の法を採つた。即ち唐の太宗のときには十道に六百三十四の折衝府を設け其の中で二百六十一は關內道に置いた。是れは內を重くして外を制する爲めである。そして此等の諸府は皆京師の諸衛府に隸して交る〳〵番上するのである。府には上府、中府、下府の三等があつて上府は千二百人の兵を有し中府は千人の兵を有し下府は八百人の兵を有す。此兵士を火(十人)隊(五十人)團(三百人)と云ふ風に組織しそして折衝都尉が之れを總督する。人民は年が二十になると兵となり六十になると兵役を免ずる。そして疆隊に際し

折衝府

府の組織

徵兵

て武を練習せしめ全國皆兵の主義を擧げた。然るに高宗の後に至つて府兵の制度が漸く弛廢したので玄宗のときには京師を守る衛士すら不足するに至つた。そこで宰相の張説の説に由つて天下の壯士を募集して以て諸衛に隷屬せしめた。之れを彍騎と云ふのである。其の數は大凡そ十二萬ばかりであつた。此の彍騎と云ふものが出來てから謂はゆる兵と農との差別が生じた。然し安祿山の叛するに及んで藩鎮の勢は漸く強くなり各大兵を率ゐて朝廷の命令を聞かない。そこで府兵彍騎の法は全く其の跡を絶つて仕舞つた。

彍騎

第四、田制及び稅法　均田法は南北朝の時にも行はれて居つたが然し其の法が完備したのは唐の時代である凡そ男子の年十八以上のものには田百畝(田一項は百畝であつて一畝は二百四十歩一歩は方五尺である)を給し其の中で八十畝を口分田となし二十畝を永業田となした。但し病氣のものや不具者や老人などには四十畝を給し寡婦には三十畝を給することであつた。田地の賣買は之れを禁じたけれども永業田だけは他縣に移住

均田法

したり或は貧困で葬式の出來ないものに限り賣買を許した。是等授けられた田地には租庸調と名付くる三種の課稅があつた。租は毎年百畝の田よりして粟二石を出し庸は毎年二十日づゝ朝廷の人夫となつて働き調は絹、麻布など其の鄕土に產するものを納めるのである。

租庸調

第五、法制　唐の法律も隋に學んだことが多いので刑罰をば笞、杖、徒、役、死の五種に分つことは前代と同一であつたが然し殘虐なる死刑は之れを廢し絞と斬との二つに限られた。

五刑

第六、學制　唐は京師に國子學、大學、四門學、律學、書學、算學を設いて國子監を以て之れを支配せしめた。國子學は定員三百人で三品以上の子孫より收容する。大學は定員五百人で四品以上の子孫を收容する。四門學は定員千二百人で七品八品の子孫及び庶人の俊秀なるものを收容する。律學は定員五十人書學は三十人算學も亦三十人で是等は八品以下の子孫及庶人の此の事に堪能なものを收容した。又京師には弘文館、崇文館と云ふものがあつて門下省に屬して居た。是れは共に宗室功臣の子孫の學ぶと

國子學
大學と四門學
律學と書學

ころである。其の他各府州縣にも學校を設いて諸生を教授した。

第五節　開元の政、安史の亂

唐の時代の名相を數へるときには常に之れを前にして房、杜を稱し之れを後にしては姚、宋を稱する。實に唐の玄宗の初めの方の治世卽ち開元の政が貞觀の政と比隆されるのは姚、宋二人の力である。姚崇は變通の才に富んだ人物で其の裁決は頗る明敏であつた。之れに反して宋璟は守法嚴正の人物で刑賞に私なく顏を犯して直諫する底のものであつた。斯くの如く二人は其の長所を異にして居るが然も同心戮力、玄宗を補佐した。玄宗も初めの中は勵精して政治を遣つて居つたが次第に怠慢を生じ宋璟の如き嚴正の人物を嫌ふやうになつた。然かも宋璟退いて後も韓休や張九齡などの人物があつて玄宗を鞭韃した。中にも韓休は頗る直諫の士であつたからして玄宗も之れを恐れ何かと自ら過ちがあると左右を顧みて韓休は知つて居るかどうかと心配するほどであつた。また實際其の言の終るや否や韓休の諫奏が玄宗の前に出るのが常であつた。そこで帝の左右のも

姚崇、宋璟

韓休、張九齡

のが云ふには韓休が宰相となつて陛下は瘠せられたと。帝が嘆じて云ふには朕は瘠せたけれども天下は肥えたであらうと。然しながら玄宗の怠惰心の增長するに從つて韓休等も退けられた。韓休、張九齡などが退けられて李林甫が相たるに及び愛に唐室の禍難は避く可からざるものとなつた。李林甫は柔佞狡猾、深く宦官や妃嬪の輩に結合し甘く天子の意を迎へて言路を杜絕して仕舞つた。彼れの性質は陰險で猜忌心に富んで居つたからして時人は口に蜜あり腹に劍ありと言つた。內に斯くの如き佞臣あるに當つて外は藩鎭の勢益盛んで遂に有名なる安史の亂を惹起した。初め高宗の末年以來唐の國は武韋等の內亂が續出したので外國に對する威光も大に少くなつた。そこでサラセン帝國や吐蕃や回紇などは屢邊境を侵した。由て玄宗は邊陲の諸國に十節度使を置いて是れに兵馬の大權を委ね以て四方の無事を謀つた。此の節度使こそ實に唐を亡ぼした原因となつた。そして節度使の第一着に亂をなしたものは有名なる安祿山である。安祿山は元、胡人で同鄕の史思明と仲が善くて共に驍勇を以て名高

李林甫

玄宗邊陲に十節度使を置く

安祿山の出身

かつた。諺に大姦は忠に似たりと云ふことがあるが安祿山の如きは實に其の一人で彼れは頗る無邪氣らしく然かも巧みに帝及び帝の左右に媚びたからして其の人望は隆々として揚がつた。そこで初めには平盧の節度使となり(其の鎮所は內蒙古東部の平盧にあつたので室韋靺鞨など黑龍江附近の諸部を治める)次いで又范陽の節度使を兼ねた。(范陽の節度使は今の北京に居つて奚、契丹などの諸族を制御するもの)。斯くの如くにして外には其の兵權の强大なるに加へて內には又大に祿山に味方して彼れの勢力を進めたものがある。それは有名なる楊貴妃である。初め武惠妃が卒して帝は之れを思ふて止まない。後宮の佳麗三千人の中にも之れを慰めるものが無かつた。ところが或る人が帝の子壽王の妃楊氏の頗る美なることを說いたので帝は壽王の爲めには別に娶つて楊氏を納れた。久しからずして楊貴妃は非常なる寵愛を受けることゝなつた。有名なる白樂天は此の間の消息を左の如く寫した。

楊貴妃の寵幸

漢王重色思傾國。御宇多年求不得。楊家有女初長成。養在深閨人未識。

祿山請うて楊貴妃の子となる

天生麗質難自棄。一朝選在君王側。回頭一笑百媚生。六宮粉黛無顏色。
春寒賜浴華淸池。溫泉水滑洗凝脂。侍兒扶起嬌無力。始是新承恩澤時。
雲鬢花顏金步搖。芙容帳暖度春宵。春宵苦短日高起。從此君王不早朝。
承歡侍宴無閒暇。春從春遊夜專夜。後宮佳麗三千人。三千寵愛在一身。
金屋妝成嬌侍夜。玉樓宴罷醉和春。姉妹弟兄皆列王。可憐光彩生門戶。
遂令天下父母心。不重生男重生女。驪宮高處入靑雲。仙樂風飄處處聞。
緩歌慢舞凝絲竹。盡日君王看不足。

祿山の烱眼能く權勢を得るの道を解し盛んに貴妃に諂うた。貴妃は如何にも其の無邪氣さうなのに欺かれて目もなきまでに之れを愛した。そこで祿山は乞うて貴妃の子となつた。貴妃は飽くまで彼れに欺かれて祿山の誕生日に當つては錦繡を以て大襁褓を作り祿山を包んで宮人をして綵輿に載せて之れを昇かしむるの惡を演じ帝と共に之れを見て喜んだ。是れより後、祿山は公々然として宮掖に出入し貴妃と通じたが帝は飽くまで其の無邪氣さうなのに欺かれて之れを疑はなかつた。其の後祿山は又河

東の節度使を兼ねた。（今の山西省の大原府に鎮して回紇を制御するもの）斯くの如く彼れは既に三鎮の兵力を總べることゝなつたからして次第に異志を抱いたが然かも李林甫が相たる間は未だ叛せなかつた。元來李林甫は一種の烱眼を有して居つたので祿山と語る毎に其の胸中を洞察したからして流石の祿山も彼れを恐れて居たのである。然るに李林甫死して楊貴妃の兄楊國忠が相となるや安祿山は元彼れと隙があつたからして愈其の謀叛の決心を堅くした。然かも彼れは尙玄宗帝の寵幸を思つて帝の崩じた後に叛を謀らうとしたが楊國忠が頻りに祿山の叛形既に明かなりと奏したからして遂に彼れは我が紀元千四百十五年を以て所部の兵及び奚、契丹の兵十五萬人を率ゐて叛旗を擧げた、太平無事に慣れた天下は之れが爲めに震動し河北の諸州は風を望んで皆賊に降つた。賊軍は殆ど無人の境を往くが如く遂に黃河を渡つて洛陽を陷ゐれ尙も進んで西、長安を侵した。哥舒翰は官軍を率ゐて之れを潼關（陝西省）に防いだが大敗したので帝は倉皇として蜀に出奔した。帝の御車が馬嵬驛に至つたときに糧食

祿山叛旗を擧ぐ

玄宗帝蜀に奔る

が繼かないので將士が皆饑ゑ勞れて仕舞つた。そこで此の亂の本は楊國忠と楊貴妃とにあることを怒つて先づ國忠を殺し帝に迫つて貴妃を絞め殺させた。さて長安は遂に賊の手に陷ゐり祿山は洛陽に都して大燕皇帝と稱した。玄宗の太子は帝の命によつて遂に位に靈武（甘肅省にあり）に卽いた。之れが卽ち肅宗である。肅宗は李泌を拔擢して政治は大小となく之れに委せたのみならず郭子儀、李光弼などの如き諸名將も來り會し回紇、西域の援兵も靈武に來たので唐の軍は再び振つた。さりながら河北、河南の地は既に皆賊軍に應じて官軍の爲めに働くものは平原（山東省）に顏眞卿、常山（直隸省）に顏杲卿、睢陽（河南省）に張巡があつたのみである。此の中顏眞卿は郭子儀、李光弼と共に永く唐の爲めに國難に當つたが顏杲卿と張巡とは兵を擧げて間もなく壯烈なる死を遂げた。卽ち顏杲卿は兵を擧げて僅かに數日、守備が未だ出來ないときに早くも敵に圍まれた。晝夜防いだが遂に矢盡き糧盡きて城は陷ゐり身は捕へられた。時は我が紀元千四百十六年である。顏杲卿の捕へられて洛陽に至るや祿山は之れを責めて云ふ

祿山大燕皇帝と稱す

肅宗、靈武に卽位す

顏杲卿賊に捕へらる

張巡許遠等捕へらる

には我れは曾て汝を奏して上進を謀つたのに我れに背くのは何故か？顔杲卿が罵つて云ふには汝は元營州の牧羊羯奴である。天子は汝を擢んで三道の節度使とまで爲したのに汝は其の恩を忘れてなせ叛するのであるか？我れは代々唐の臣である。だから我れは國の爲めに賊を討つのである。憾むらくは汝を斬らずして死なねばならぬとは。然し事爰に至つては致し方がない。臊羯狗よ早く我れを殺せと。祿山は大に怒つて之を焙した。有名なる文天祥の正氣の歌に顔常山の舌と云ふのは之れを指したのである。又正氣の歌に張睢陽の齒と云ふのはそれは張巡の壯烈な死を遂げたことを云ふのである。張巡は許遠と共に睢陽を守つたが賊の大將尹子奇の爲めに圍まれて兵糧が盡きて馬を食ひ鼠を食ひ雀を食ひ遂には奴を殺して之れを食ふに至つた。然かも城遂に陷ゐつて二人は共に捕へられた。尹子奇は之れに問うて云ふには聞くところに由ると君は戰ふ毎に目眦裂け齒が碎けたと云ふことであるが事實如何と。巡が云ふには我が志は逆賊を呑んで居る。唯力が足らないのみであると。尹子奇は刀

賊の内訌

を以て刳つて見たところが齒は僅かに三四枚しか殘つて居なかつた。されど賊軍が山東江淮の地を略することが出來なかつたのは實に是等壯烈の士があつた爲めである。是れより後官軍と賊軍とは屢戰つて互に勝敗があつたが賊軍の方には内亂が續出した。即ち祿山が小子を愛したので長子の安慶緒が之れを怨んで祿山を殺した。間もなく史思明も亦安慶緒を殺して自ら燕帝と稱したが彼れも亦其の長子の史朝義の爲めに殺された。斯くの如く内亂續出するに乘じ官軍は遂に長安を復し肅宗及び玄宗は都に歸つたからして諸將を遣はして河の南北を討平させた。肅宗崩じて代宗の代に至り回紇の援兵を乞うて史朝義の軍を破り遂に洛陽を復した。史朝義は其の下の殺すところとなつて爰に安史の大亂は我が紀元千四百二十三年を以て其の終りを告げた。

安史の亂平定す

唐が安史の亂を平定するに付いては屢回紇の助けを借つたので之れがため亂の平いだ後外患に苦しむの止むを得ざるに至つた。回紇は玄宗の末年に斐羅（ペイラ）なるものが可汗となつて恐く突厥の餘衆を下し幕營を鬱督軍山

回紇の勢力範圍

に建て、其の勢ひ頗る盛んに其の勢力範圍は西は阿爾泰山の麓より東は黑龍江沿岸に及んだ。斐羅が死んで其の子は肅宗のときに屢唐の內亂を鎭定するの功があつたからして肅宗は皇女を以て之れに妻はし厚く歲幣を贈つた。回紇は是れより尊大を構へて唐を輕んじた。代宗の初めに至つて唐の臣の僕固懷恩なるものが反を謀つて回紇、吐蕃の兵を誘つて唐を侵した。代宗は郭子儀を遣はして涇陽(陝西省にあり)に屯せしめた。ところが懷恩は途で死んだのみならず回紇、吐蕃の二國は各長たらんことを求めて決しなかつた。依つて郭子儀は人を回紇に遣はして吐蕃を挾擊せうと謀つた。然るに之より先き懷恩は回紇等を欺いて郭子儀は既に死んだと言つた。是れは回紇や吐蕃が郭子儀の威名を恐れて居るからである。だから郭子儀の使が往つても回紇は信せないで云ふには郭公果して存命であるならば見たいものだと。由つて使は此の事を還報した。郭子儀は數騎を率ゐて陣營を出でゝ令公來ると傳呼せしめた。回紇の大帥は弓矢を採つて陣前に立つた。郭子儀は冑を拔ぎ槍を投げ棄てゝ敵に近付いて

回紇吐蕃唐を侵す

郭子儀、回紇共に吐蕃を討つ

往つた。敵の諸酋長は相顧みて、ヤー是れは本當の郭公であると。何れも馬を下つて羅拜した。郭子儀も馬を下り大帥の手を執つて共に語り酒を飲み盟約して歸つて來た。吐蕃は此の盟約を聞いて夜逃れたが回紇は唐兵と共に追擊して大に之れを破つた。是れより後吐蕃と回紇とは怨敵となつた。是れ實に我が紀元千四百四十年である。郭子儀は晉に唐に於て重んぜられたのみならず外夷にすら尊重されて居たことは此の一例を見ても明かで彼れは實に三十年の長日月、身を以て唐の爲めに盡した。其の死は我が紀元千四百四十一年である。郭子儀は子孫等が多く其の八子七婿皆唐の名臣である。さて吐蕃は此の事件以來回紇を怨んで居るからして回紇が唐の歲幣を貪つて漸く奢侈懦弱となるに乘じ屢回紇の地を侵したが偶々回紇の屬部に西突厥の別種の沙陀と云ふ種族があつてバルクル川の西に居り勢力頗る强いものが吐蕃に附いた。そこで吐蕃は其の兵を合せて回紇を破つたので回紇は次第に衰微した。實に我が紀元千四百五十年である。

回紇、吐蕃に破られて衰微す

吐蕃の盛衰

吐蕃は前にも述べたことのある通り高宗の時代に當つて唐と吐谷渾との連合軍を破り以て吐谷渾の地を略有し更に西突厥の餘衆を連ねて安西都護府に迫り天山南路の地は概ね其の掌中に歸した。安祿山の亂あるに及んで河西、隴西の地を悉く奪ひ遂に我が紀元千四百二十三年を以て一たび長安を陷ゐれ代宗を出奔せしむるに至つた。然し掠略半月にして郭子儀の爲めに破られて逃れ歸つた。然かも其の後唐に內亂のある毎に陝西、四川の地を侵した。後吐蕃の爪牙であつたところの沙陀の氏族及び雲南の

南詔の盛衰

南詔が共に叛して唐に通じてからして國力は漸く振はなくなつた。南詔と云ふのは雲南の六蠻族中の一番南の方に居るものゝ稱呼で玄宗のときに其の酋長に皮邏閣（ヒラコー）なるものがあつて他の五詔を屈服した。安祿山の亂後吐蕃と通じて屢四川を侵したが吐蕃が唐や回紇と年々戰爭して其の費用を南詔に請求すること甚だしくなるに及んで遂に唐と通じて吐蕃を破り大に其の領土を開いた。我が紀元千五百十九年皮邏閣六世の孫酋龍なるものが南詔王たるに及んで國號を大理と稱し盟約に背いて四川省を侵し又交趾をも侵して安南都護府を陷ゐれたが、後唐の名將高駢（コーベン）は南詔軍を破つて都護府を恢復した。當時南詔の領土は交趾より東印度の間に跨つて居つたが酋龍の死と共に其の國運は衰へた。

渤海の盛衰

當時支那の東北方面にも一强國があつた。其れは渤海と云ふので初め高麗の亡びたときに靺鞨の大祚榮なるものが則天武后の軍を破つて東牛山に居つた。そこで高麗、靺鞨の遺族は次第に之れに歸服して國勢が漸く盛んになつた。大武藝が王となるに及んで其の境土益擴張し今の平安、咸鏡道から滿州の吉林、盛京省の地を略有し我が聖武帝のとき日本にも交通した。其の子孫に至つて領土は益廣がり五京十五府六十二州を有し北は松花江より南は新羅に至り東は日本海に西は契丹に接する大國となつて唐の世を終るまでは海東に雄を稱した。

安史の亂後內地にも節度使を置く

第六節　藩鎭の跋扈と宦官の專横

前に玄宗の時に十節度使を邊要の地に置き內地を分つて十五道となし其の道毎に採訪處置使を設けたが安史の亂後には內地の各道にも節度使な

るものを從いて採訪處置使に代へ彼の史朝義の降將なども皆其の居るところに任して節度使としたから節度使の居るところの藩鎮の數は實に五十の多きに及んだ。元來節度使なるものは元武官であるからして其の邊要に置たものは主として軍事にのみ關係したのであるが內地に置かれるに及んでは是等節度使は皆數州を總べて按察使をも兼ねて居たから遂に兵政の二大權を握るに至つた。之れが爲めに藩鎮は各一個嚴然たる政府の如き觀を呈し其勢力次第に盛大となつたが肅宗の時代からは或は土地を世襲するものもあるし或は士卒に選擧せられて自ら節度使となるものもあるし或は勢力ある部將が節度使を逐うて自ら之れに代つたものもあつたが中央政府の權力が弱かつた爲めに是等のものを制裁することが出來なかつた。で、徒らに姑息の策を弄して其の歡心を得ることをのみ努めたからして藩鎮の勢は益盛んになつて遂に制することが出來なくなつた。

節度使兵政の二大權を握る

殊に幽州(直隷省にあり)成德(直隷省にあり)魏博(直隷省にあり)の三鎮は河朔三鎮と稱せられ又淄青(山東省にあり)淮西(河南省にあり)は河南の二鎮と

河朔の三鎮と河南二鎮との跋扈

稱せられ頗る强盛な藩鎮で常に中央政府を困らせたものであるが彼等は互に婚姻を通じて助け合ひ遂に貢賦を輸せざるに至つたけれども中央政府は之れを如何ともすることが出來なかつた。德宗のときに史朝儀の部將であつた成德の節度使の李寶臣が死んで其の子の惟岳は留後となつたと乞うた。彼等は他の例に據ると何時も許されるものと定つて居るからして惟岳も其の積りて居たところが案外にも朝廷が之れを許さなかつた。

そこで、魏博、盧龍の諸鎮と聯合し盧龍の節度使朱滔を盟主となした。淮西の節度使李希烈も亦之れに應じた。官軍は之れを征するために多くの軍資を要したので丞相盧杞は間架、除陌など云ふ新稅を課した。人民は重稅を怨んだ。時に涇原の兵が關東の叛を討せんとて京師を通過したが素より尊王の心なき彼等驕傲なる將士等は朝廷の待遇が薄いと稱して亂を爲し朱泚を擁して主となした。依て帝は奉天に走つた。朱泚は長安に據り大秦皇帝と自稱し國號を漢と稱した。李希烈も亦之れに倣つて自ら大楚皇帝と稱した。然るに幸にも當時唐には忠良の臣陸贄なるものがあつ

德宗、陸贄の言を用ひて僅かに亂を平ぐ

て德宗に勸めて帝をして自ら己れを罪して天下に謝し大赦令を出さしめたからして王武俊等來つて朝廷を助け朱泚は敗死し朱滔は病死し李希烈は毒殺せられて藩鎮の亂は一旦は鎮まつた。然しながら當時の唐朝の狀態は恰も我が室町の末年足利氏が群雄に對する如き關係で自力を以て群雄を制御するのではなく一方の力を借つて他方を抑へると云ふ風であつたからして之れが爲めに少しも朝廷其のものゝ權力を增すことはなかつた。然り德宗の時代には一方に盧杞の如き姦臣があつたにも拘らず陸贄を始めとし李晟、李泌の如き名臣があつて僅かに國勢を支へることが出來た。德宗より二傳して憲宗が立つた。憲宗は唐代では英武の君で內には憲宗、杜黃裳あり外には名將武元衡、裴度などがあつて能く之れを助けたからして元和の政は清明だと稱せられた。初め德宗のときからして淮西に於て吳少誠及び其の子吳元濟などが叛して朝廷は永く之れを制御することが出來なかつたが憲宗に至つて裴度を以て大將となし我が紀元千四百七十七年遂に蔡州を襲つて吳元濟を擒にした。是に於て淮西も遂に平ら

元和の政

ぎ河朔の諸鎮も皆朝命を奉ずるに至つた。然し憲宗も淮西の平定した後は其の心が漸く緩んだので宦官は機に乘じて專横を恣にし遂に之れが爲めに弑せらるゝに至つた。

宦官漸く勢を得

唐の太宗は前代の宦官の禍を深く悟つて居るからして其の卽位の時代は宦官の位置は頗る低くて別に勢力は無かつた。中宗の頃からして嬖幸が次第に多くなつて宦官の數も亦之れに從つて增加して來た。玄宗の太平公主を誅するや宦官の高力士が與つて功があつたので擢んでられて勢力ある位地に置かれた。そして玄宗の驕奢益甚だしくなるに及んで宮嬪の數は四萬に至り宦官も亦從つて其の員數を增し高位高官となるものも多かつた。中にも高力士の勢力は益强く表奏は先づ高力士に呈して然る後に奏御し小事は卽決することを許した。之れが爲めに高力士の勢力は內外に聽いた。肅宗の未だ東宮たるや帝は兄として高力士に仕へしめた。諸王公主も高力士を呼んで翁と云つた。然しながら元來高力士は性質謹愼なもので他の宦官の如く橫暴ではなかつたからして士大夫の爲めに惡

高力士

李輔國
魚朝恩

宦官兵政の權を握る

宦官天子を廢立す

甘露の變

まれることも少なかつた。肅宗の時には宦官李輔國が權を弄し代宗のときには魚朝恩禁兵を總管し其の勢力頗る強く天下の事我れに依らざるものあるかと意張るに至つた。然し後に不軌を謀つたので誅せられた。德宗の立つに至つて涇原の兵が叛したときに倉卒禁軍を召集するに暇なかつたのに懲りて其れより後は宦官をして全く禁軍を總べしめたからして其の專横至らざるところなく英主憲宗の出でてさへ遂に其の勢力を抑制することが出來なかつた。其の結果憲宗の如きは宦官の爲めに弑せられて仕舞つたことは前に述べた通りである。憲宗の後の天子は大抵皆宦官の擁立するところで有名なる文宗の如きも宦官に擁立せられたのである。が然し卽位後宦官の頗る專横なのを惡み鄭注李訓等と謀つて人をして金吾廳の柘榴に甘露が下つたと奏せしめた。當時の人物は皆甘露を以て祥瑞だとなして居つたからして宰相は百官を率ゐて之れを賀した。依つて帝は宦官仇士良を顧み諸の宦官を率ゐて往いて之れを見させた。仇士良が其の場所に至つたところが風が幕を吹いて其の後に無數の伏兵がある

朋黨の爭

小太宗

ことを知つて走つて其の場を逃れやうとした。そこで李訓等は豫ねて期したること、して兵を放つて之れを追擊したが僅かに其の十數人を殺傷したに過ぎなかつた。そこで仇士良等は神策兵に命じて李訓、鄭注を初めとし吏卒二千餘人を殺した。之れを甘露の變と稱するのである。是れより後宦官の氣燄は益盛んに朝廷のこと悉く其の手に取扱はれた。斯くの如く內に宦官の害毒を恣にするに當つて文宗及び武宗の時代には朝廷の役人間に朋黨の爭ひが起り宗閔及び牛僧孺は私怨を以て李德裕と相鬩ぎ互に陷擠を恣にした。文宗曾て嘆じて云ふには河北の賊を去ることは尙容易であるが朝廷の朋黨を去ることは實に難いと。以て彼等が如何に度し難きものであつたかを知ることが出來る。宰相悉く一致調和しても宦官の勢力に當ることが出來ないのに況んや互に黨を樹て、分裂するに至つては益宦官の勢力を增加するのみであることは勿論である。然し宣宗位に卽くに及んで內には令狐綯に任じて宦官の勢力を抑制せんと欲し外は畢誠を擧げて外寇を防ぎ以て隴西靑海の土地を恢復したから時人は帝を

稱して小太宗と號するほどであつたが然しながら藩鎮の勢や宦官の專横は其の根が深かつたからして一英主の力では到底如何ともすることが出來なかつた。

第七節　唐の滅亡

財政の困難

初め玄宗の時代に唐の民口は五千餘萬と稱して居たが安史の亂後は州縣は多く藩鎮の據るところとなつて中央政府には收入なくして支出のみ多かつたからしては國庫頗る貧弱であつた。肅宗代宗のときに當つて劉晏なるもの頗る理財の法に長じ僅かに國家の支出を辨じたが後、劉晏が退けられてから德宗は楊炎を擧げて財政の衝に當らせた。彼れは兩稅の法を行つた。其れは每戶本住者と寄留者とを問はず凡べて現住者を帳簿に記載し其の貧富に應じて一定の稅を春秋二度に納めさせるのである。其の後盧杞なるもの稅間架法と除陌錢法を施した。稅間架法とは民家の廣さを計つて其の廣さに應じて稅を課するので除陌錢法とは公私の給與買賣に關して百錢每に五錢を官に納めさせ之れを隱したものは刑罰に處する法である。是等の法は今日より見れば戶別割とか營業稅とか云ふもので少しも無理な稅ではないが然し稅法に慣れない當時の人民は頗る之れを怨んだ。斯くして唐は各種の內憂外患に加ふるに爰に又財政上の困難を來たし遂に其の滅亡を免れざるに至つた。

王仙芝及び黃巢叛す

我が紀元千五百三十四年卽ち僖宗の卽位の初め王仙芝なるもの先づ亂を山東省に起し盜賊の黃巢も亦衆を集めて之れに應じ頻りに河南、山南、江淮の間に橫行し一時官軍の破るところとなつて王仙芝は敗死したが黃巢代つて其の餘衆を總べ南の方廣西、福建の地を掠略して其の勢頗る猖獗を極めた。鎭海の節度使高駢（コーペン）は之れを討たうとして成らなかつた。そこで賊は頻りに諸州を陷ゐれ淮水を渡つて遂に洛陽を陷ゐれ進んで潼關を破つて長安に據り自ら齊帝と稱した。僖宗は獨に出奔した。實に我が紀元千五百四十年のことである。さて僖宗は成都に留つて有名なる沙陀の部長李克用に依賴した。依つて李克用は黃巢の軍と渭南に戰ひ一日三度戰つて皆勝ち遂に長安を恢復した。時に克用の年は僅かに二十八で彼れは沙

僖宗蜀に奔り李克用に依賴して亂を平ぐ

李茂貞叛して李克用に誅せらる

朱温克用と善からず

宦官廢立を行ひ朱温に誅せらる

であつたから時人は之れを獨眼龍と稱して恐れた。其の後も克用は頻りに黄巢の軍を打ち破つたので黄巢は遂に其の部下の殺すところとなり黄巢の亂は一旦平いだが天下は之れより益多事となつた。昭宗位に即くに及んで李茂貞等兵を擧げて朝廷を犯した。李克用は之れを聞いて北府の兵を發して之れを討じ功を以て秦王となり晉陽に都した。之れより先き黄巢の部將朱温は唐に降つて名を全忠と賜はり泗水の一支流なる汴に居つたが彼れは李克用と合はないので互に反目した。藩鎮の斯くの如く制し易からざるに加ふるに宦官は益其の毒を逞しくし中にも劉李述は專恣甚だしく遂に帝を廢して太子を立てた。そこで宰相の崔胤は密書を朱全忠に賜はり其の力に由つて反正を謀つた。翌年劉李述等は誅に伏して帝も位に復したからして朱全忠は爵を進めて東平王となつた。之れより宦官は崔胤を怨むこと甚だしく事に依て彼れを除かうとしたからして崔胤は又書を朱全忠に贈つて兵を率ゐて車駕を迎へさそうとした。そこで全忠は兵を擧げて大梁を發したが其の着京に先つて宦官等は帝を脅かして鳳翔に往き李茂貞に依つた。朱全忠は鳳翔を圍んだ。李茂貞は之れに敵す可からざるを察し宦官等を殺して全忠と和し帝を長安に歸した。全忠は大に宦官を誅して殆んど遺類なからしめた。是に於て唐は宦官の禍を免れたけれども然し之れよりも尚一層恐るべき敵を生じた。即ち其れは朱全忠で彼れは已れの威の上るに從つて漸く唐室を奪ふの志を抱き崔胤を殺して帝に迫つて都を洛陽に遷した。そこで李茂貞は兵を擧げて報復を名とし朱全忠を討じやうとした。朱全忠は遂に帝を弑し太子に迫つて遂に唐の天下を奪つた。是れが五代の初めの後梁の太祖である。唐は高祖から是に至る迄二十世凡そ二百九十年で亡びた。實に我が紀元千五百七十六年である。

朱温宦官を鏖殺す

朱温叛して後梁の太祖となる

朱全忠は既に唐を奪つたが然かも當時北には秦王李克用があつて晉陽に據り山西の地を總べて居るし西には蜀王王建が成都に都して四川の邊を統轄し南には吳王楊行密があつて楊州に據り江淮一帶の地に蟠據して居つたからして唐を奪つたとは云ふものゝ僅かに一部に割據するに過ぎな

かつた。

第八節　漢より唐に至る學術宗教

第一項　學術

古學の研究興る

秦の始皇が書を焚き儒を坑にしたので一時古學の研究は途絶ねたが漢興るに及んで或は山中の巖窟中より書籍を搜し出したり或は民屋の壁の中から書籍を取り出すと云ふやうな風で漸く學術が曙光を放ちかけた。武帝に至つて初めて大學を起し其の後次第に儒學が盛んになつて後漢の世には大學の諸生三萬人と稱するほどになつた。今經學と史學と文學とに分けて述べて見やう。

漢の經學は訓詁の學である

(一)經學　漢の經學は主として訓詁の學である。是れは久しく學術が絶ねて居つたので言語文章の變遷上普通人は容易に先秦の書を解することが出來なくなつたからして勢ひ之を註釋するの必要を生じたからである。そこで漢は前漢後漢を通じて一家獨得の意見を立てたものはなくて

馬融と鄭玄

凡べて訓詁のみをなしたものであるが其の訓詁學者の中で最も名高いのは馬融と鄭玄(ジョーゲン)とである。馬融は後漢の順帝桓帝の代の人で頗る博文强記を以て稱せられた。詩經、書經、易經、禮記、論語、孝經など皆精密な註解をなした。鄭玄は馬融の弟子で其の學は百家を兼ね註釋は頗る精密で實に兩漢の儒學は鄭玄に至つて大成したと云つて宜しいのである。さて漢以後唐に至るまでは經學に於ては一人の大學者を出さなかつた。

唐の經學は註疏の學である

唐の經學は註疏の學である。漢以後唐に至るまでには言語、文章が又一變したので漢儒の註解も唐の學者には漸く分かりにくくなつたので遂に漢儒の註に疏を加へて一層詳密に解釋するに至つたのである。そして唐の經學は太宗のときが最も盛んで帝は顏師古に勅して五經の謬闕を訂して天下に頒布せしめ孔穎達に勅して五經の義疏を制定せしめた。是れは唐時代に至つては百家の註疏が餘りに煩雜になつて後進の學者が取捨選擇に苦んだからして是等の大學者をして一定せしめたのである。太宗の後は唐の經學は餘り發達せなかつた。

太宗と經學

春秋と左傳

(二)史學　先秦時代のもので後世に遺した歴史は春秋と左傳とであるが春秋の如きは今日から見ると一種の歴史年表に過ないし左傳も尙歴史としては面白くない。ところが漢に至つて支那歴史の千古の模範と稱せらるゝところの史記なるものが著はされた。初め前漢の武帝は司馬談に命じて太古より漢に至るまでの歴史を編纂させたが其の業を終らずして死んだ。子の司馬遷は父の志を繼いで遂に十二本紀、十表、八書、三十世家、七十列傳を作つた。本紀の方は帝王の事蹟を書いたもので世家は諸侯の沿革を書いたものである。表は史上の事蹟を一目瞭然たらしむる爲めに作つたもので書は禮樂刑政などに關したものを述べたものである。又列傳は英雄豪傑偉人烈士の事蹟を巧みに述べたもので實に是等の體裁は司馬氏の創設である。加ふるに文章が頗る强健縱横で文學上から見ても大なる價値があるのである。後漢に至つて又一大歴史書が出來た。其れは卽ち漢書と云ふ本で班彪及び其の子の班固の作つたもので十二本紀、八表、十志、七十列傳を有する。後世史記と竝べて支那後世の大切なものとなすが

司馬遷父子史記を著はす

班固父子漢書を著はす

三國志と後漢書

然し漢書の方は史記よりも事實が精確である。漢以後唐に至るまでゞ名高い歴史書は三國志と後漢書とである。三國志は秦の陳壽の作で魏、吳、蜀の歴史を述べたもので文章は遒傑で叙事は簡明である。後漢書は後漢の光武帝から獻帝に至るまでの事蹟を編述したもので魏の文侯に仕へた范曄の著はしたものである。唐に至つては色々な歴史書が編纂されたが然し史學としては少しも進歩を認めない。唯歴史家としての識見を備へて有名なのは劉知幾で彼れは玄宗に仕へて有名なる史通と云ふ書を著はした。

史通

前漢の文學者

(三)文學　前漢の時代で有名な文學者は賈誼、司馬遷、司馬相如、董仲舒、東方朔などで賈誼は文帝に有名な治安策を奉つて名ある人である。其の他の人々は皆武帝の世に出たもので司馬遷は叙事に巧みに董仲舒は論說を善くし司馬相如は辭賦を巧みに作つた。後世賈誼、司馬遷、司馬相如を以て漢文の三絶と稱するのである。中にも司馬相如の辭賦は文學として最も價値の多いもので其の作子虛賦は屈原の離騷と竝び稱せられるものであ

東漢以後文章は浮華に流れた

る。漢學者中には司馬相如の作は質に於て遠く屈原に及ばぬと云ふものがあるが是れ多くは純粋文學と云ふものを解せないので凡べてのものを道德の一本槍で批評せうとするものから出た論に過ぎない。後漢の世に至つては班固蔡邕の輩が出たけれども到底前漢に及ばない。總じて東漢より魏晉南朝を經て隋に至る迄は文章は益浮華に流れて徒らに奇巧纖弱なものとなつた。其れは恰も我國の萬葉が出て後平安朝の文學となつては謂はゆる古今集の如き纖弱なものが出たのと相類して居る。爰に一つ注意すべきことは漢に至つて初めて五言古詩及び七言古詩の形式の生じたことである。詩經の三百篇中には五言の如きものが間々あるが然し其の正體とも稱すべきものは全く四言である。然るに漢に至つて五言の一體が創作せらるゝに及んで四言の作は漸く少くなつて仕舞つた。此の五言の古詩の創作者とも稱すべきものは蘇武と李陵との匈奴に捕へられて居るときの贈答の詩である。だから沈德潛は評して曰く蘇李の詩言情欵欵として感悟具さに存し急言竭論なくして意自ら長く神自ら遠く聞く者

五言古詩と蘇武李陵

七言古詩

六朝文

陶淵明と歸去來の辭

をして油々として善く入り其の然るを知らずして然らしむ。之れを五言の祖となすと。又七言の古詩は武帝が元封三年に柏梁臺で群臣を會して席上連句の遊をなしたのが始めである。之れより先き漢の高祖の大風與りたりの歌とか項羽の垓下の歌とか云ふ樣なものは七言であつたが然し是れは全く楚風の變體に過ぎないので未だ全く七言古詩の體裁をなすには及ばなかつた。柏梁臺の連句出づるに及んで詩界に一進歩を開き詞才あるものをして大に其力を試むるの餘地を作つた。然しながら漢詩の本色は五言で七言の詩は漢以後に至つて發達したのである。漢以後三國を經て兩晉より南北朝に渡つては文章は實に一字一句の排偶に力を盡くし一見したところでは燦爛として人の目を驚かすほど奇麗であるが然し徒らに形の末に走つて精神なく謂はゆる六朝文の誹あるに至つた。六朝とは吳、秦、宋、齊、梁、陳を指すのである。此の時代に於て後世に最も名高い詩人は晉末に出た陶淵明である。彼れが彭澤の令たるとき郡の督郵を束帶して迎接せねばならぬと言はれ我れ五斗米の爲めに腰を折つて鄉里の小人

淵明の辭職の理由の批評

に向はんやと云つて即日辭職し歸去來の辭を作つたことは漢學者流の常に口にして賞讃するところである。然し是れは頗る偏狹なことで成るほど名利に戀々とせないと云ふ方面から言へば陶淵明の如き人は實に賞すべき人であるが然し彼れ既に官吏となる以上は其の上官を迎接するに相當の禮を以てすべきことは理の常然で決して之れを以て卑屈の行ひと云ふ譯には往かない。否斯くすることこそ道德に協ふものであらう。然して五斗米の爲めに云々と言つて辭職するなどは如何にも狹量に似て居る。

漢學を學ぶものが動もすれば斯かる沒常識の行爲を眞似て自ら高しとするのは實に愚の極みである。但し文學者として淵明が此の時代の代表者であることは勿論である。

唐の純文學は古今獨歩である

支那の純文學は唐に至つて最も其盛を極めたので唐は經學や史學の點に於ては他の時代に優るとは言へないが獨り純文學に至つては古今獨歩と稱しても善いのである。されば唐時代に出た文人は其の數實に限りないが初唐に於ては王勃楊炯、盧昭鄰、駱賓王の四人を以て古來四傑と稱し最も

李白

杜甫

白居易

有名である。然しながら唐の文學が最も盛んであつたのは盛唐で此の時代には詩に於ては聖とまで稱せられた李白、杜甫を出し文に於ては韓愈、柳宗元を出して居る。此の四人は唐朝文學の代表者である。

李白は字は太白と稱するからして又李太白とも云ふのである。隴西の人で玄宗の世に拔擢せられて其の詩才を遺憾なく發揮した。彼れの作中で最も有名なのは長篇では獨道難、夢遊天姥吟、襄陽歌などで又短篇では把酒問月、登金陵鳳凰臺、山中與幽人對酌及び月下獨酌などである。

李白と同時に其の詩名を恣にしたのは杜甫で字は子美、襄陽の人で彼れの作中最も名高いのは長篇では自京赴奉先縣詠懷五百字、北征及び新婚別などで又短篇では哀江頭、春望及び私與八首などである。李白の詩は高妙飄逸を以て勝り杜甫の詩は悲壯感慨を以て名高いのである。

此の二人より少しく後に出でた唐の詩人で最も名高いのは白居易と元稹との二人である。白居易は字は樂天。彼れは禪學を以て頗る其の性情を涵養したとの事で其の詩の一特色は毫も佶屈聱牙の字句を用ひないで何

元稹

人にも容易に解し得る點にあるのである。彼れの作中最も人口に膾炙するところのものは琵琶行と長恨歌との二長篇である。元稹は樂天と信友で彼れの詩も亦平易で讀み易い。其の最も名高い作は連昌宮辭の長篇である。尙此の他で唐時代に名高い作は李嶠の汾陰行、劉庭芝の代悲白頭翁及び張若虛の春江花月歌などで何れも千古の絶唱である。

韓愈

唐の初めに於ては其の文章は尙六朝の四六駢驪文であつたが韓愈、柳宗元の出づるに及んで盛んに古文辭を唱導した。韓愈字は退之。南陽の人で代宗の時に生れた。彼れは啻に文章に於てのみならず又詩に於ても唐の大家と馳騁するに足るのである。彼れの文章中で後世に名高いのは論佛骨表原道其の他甚だ多い。然し彼れは文章に巧みな割には思想がなかつた。彼れの論佛骨表の如きは若し之れを其の思想の方面から批評したならば實に佛敎の一班をも窺ひ知らないところの兒戲に類した文章である。然し彼れの文章が殆んど支那に於て古今獨歩であることは蘇洵が左の如く評したので其の大體を窺ひ知ることが出來やう。韓子之文如長江大河。渾々流轉。魚龜蛟龍。萬怪惶惑。而抑遏蔽掩。使自露。而人望見其淵然之光蒼就之色亦自畏避不敢迫視。柳宗元は字は子厚。河東の人で彼れは人物に於ては退之に勝ること數等。唯文章に於ては幾分か韓退之に讓らざるを得ない。彼れの作中で最も名高いのは封建論である。韓退之曾て彼れの文章を評して曰く雄深雅健似司馬子長崔蔡不足多也と。

柳宗元

唐朝四大家の氣質の比較

要するに唐朝四大家中李白と柳宗元は膽液質の人で韓退之と杜甫とは神經質の人である。李白は膽液質のものゝ仙人的氣質となつたもの、柳子厚は膽液質のものゝ精神ある議論家となつたものである。又た杜甫は神經質のものゝ鬱憂的方面に走つたのである。韓退之は利己的に陷ぬつたものである。

第二項　宗　敎

佛敎漸く發達す

(一)佛敎　佛敎は漢以後漸々に發達したが然も其れが最も隆興を極めたのは魏晉南北朝を經て唐代である。其の間帝王にして深く佛敎を信じた梁の武帝、後魏の宣武帝の如きものもあるし或は印度の高僧中で遠く支

法顯

那に來つて佛教を弘めたところの佛圖澄、鳩摩羅針、及び達磨の如きものもある。之れによつて佛教は益盛大となつた。是れと同時に支那の僧侶で西域諸國を經て印度に遊び以て直接に佛教を研究したものも少くない。中にも法顯、玄奘、義淨などは其の有名なものである。法顯は後秦の姚興の命を奉じて我が紀元千〇五十九年卽ち仁德帝の末年に同志のもの四人と長安を發し葱嶺を過ぎて北印度に出で信度河を渡つて中印度に入り其れより南行して釋迦の歴史に最も關係の多いコーサラー、マカダ、などの佛跡を巡遊し周り〳〵てベンガル灣頭のタムリッチに赴き爰に留ること二年後商船に乘じて錫蘭島に赴き又た爰に留ること二年再び商船に乘じてジャバに寄航し爰に留ること五ケ月再び商船に投じて支那に向ひ海上暴風に逢うて青州に上陸し其れより長安に歸つた。其の旅行實に十二年間を費したので彼れの艱難辛苦は想見するに足る。歸來彼れは其見聞したところを集めて佛國記を作つた。其の中に記するところは實に當時の印度の狀勢を知るに最も有要である。

玄奘

玄奘は我が紀元千二百八十九年卽ち唐の太宗の世に支那より天山南路を經、其れより中央亞細亞に出でゝ印度に入り其の百餘國を遍歴して遍く佛跡を訪ひ名師の門を叩いて頗る多くの佛教經典を齎らして長安に歸つた。其の間は實に十七年に渡つた。次いで唐の高宗の世に義淨三藏も南海よりして印度に入り二十五年の間佛教を研究して支那に歸つた。斯くして前後多くの人々が印度に入つて法を求めたからして是れより支那に於ける佛教の宗派も次第に多くなり西晉より唐初に至るまで四百年の間に十三の宗派を生じた。然し其の中で獨立して寺院を有したものは律宗、三論宗、淨土宗、禪宗、天台宗、華嚴宗、法相宗、眞言宗の八宗である。律宗は其の初めは三國の末にあるが然し一宗となつたのは唐の時代で道宣などの力に由るのである。是れは戒律を主とするから律宗と云ふので孝惠帝のときに鑑眞和尙が日本に傳へたものである。

三論宗

三論宗は晉の末に起つたもので是れは經論中、中論、百論十二門論などの三論を依據とするからして斯くの如き宗名があるのである。

淨土宗

淨土宗は宋の道希淨土論を譯し曇鸞之れが註を作つて後、次第に世の中に弘まつた。

支那

義淨

宗派の獨立

律宗

三論宗

淨土宗

禪宗
天台宗
眞言宗
華嚴宗
法相宗
唐以前の道教

禪宗は達磨の唱へたところで後色々な派に分れたが宋の末に至つて臨濟曹洞の二宗が初めて日本にも這入つた。天台宗は惠文が之れを唱へて智顗が之れを弘めた。眞言宗は一名密敎とも稱し印度の僧金剛智が唐に至つて之れを傳へたので德宗の末年我が國の最澄、空海は遣唐使に隨つて支那に入り最澄は道邃より天台の奥義を極め空海は慧果に從つて密敎の蘊奥を極めた。華嚴宗は華嚴經を以て依據となすので覺賢初めて之れを譯した。法藏に至つて其の宗義益明かに則天武后は彼れに賢首戒師の號を與へた。我が國では良辨が之れを弘めた。法相宗は一名唯識宗とも云ふので唯識論を依據となす。玄奘が之れを印度から傳へて唐の高宗のとき我が國の道昭は玄奘を師として之れを學んだ。

(二)道敎　道敎は老子を祖とするのであるが然し之れが一つの宗敎となつて勢力を得たのは唐の時代である。勿論唐より以前にも道敎に類するものを見ないではなかつた。例せば後漢の時代に張陵が記籙を老君に受けたと稱して愚民を迷はし符水禁呪を行つた如き、又彼の黄巾の賊の首領張角も其の徒黨である。魏晉の際に至つては抱朴子の著者葛洪があつて神仙の術を講じ南北朝の際に至つて益盛んとなり。初めて一種の宗敎たる形をなした。後魏の太武帝の時代には寇謙之と云ふものが嵩山に隱れて道術を修め錄圖眞經六十卷を帝に獻じた。帝の名臣崔浩大に其の說を信じ寇謙之に師事し帝に勸めて天師道場を興すに至つた。そこで太武帝も大に之れを信じて一方には佛敎を壓抑した。此の太武帝の佛敎壓抑と北周の武帝及び唐の武帝の三人が佛敎を壓抑したことを稱して三武の災と云ふのである。さて道敎は斯くの如くして發達したが唐は其の姓が老子と同じいので卽ち共に李氏であるので老子を祖先とし殊に其の敎へを尊んだからして道敎の勢ひは一時非常に盛んになつた。卽ち高祖のときには老子の廟を建て高宗のときには老子に太上玄元皇帝と云ふ尊號を奉り王公以下に命じて皆老子道德敎を習はせた。されば當時苦役を免れんとするものは多く道士の仲間に這入つた。中宗のときには諸州に命じて觀一所づゝを作らせて皆大唐中興と名付けた。又方士の鄭符恩は秘書

唐は同姓の故を以て非常に老子を尊ぶ

監となり葉靜能は國子祭酒となつた。玄宗のときには五岳に神君の祀廟を設き兩京及び諸州に玄元の廟を設け且つ四民の家には必ず道德經一本づゝを藏すべきことゝし鄭白註解を作つた。のみならず崇玄館に玄學博士を置きて道學の敎授をなし或は諸州に崇玄學生を置いて貢舉に應せしめた。武宗に至つて大に佛敎を退けて道敎を勸めたからして大に又勢力を得たが然も久しからずして佛敎の勢力は恢復した。此の道敎は古來一種の仙藥なるものを作るのを以て名高い。東漢以來帝王中で仙藥を求めたものは歷史上に續々表はれて居るが然し之れを飲んで禍を買つたものは唐より甚だしいものはない。太宗のときには彼の王玄策が印度から一方士を得て共に歸つたので帝は長命藥を彼れに作らせて之れを飲んだが其れが爲めに暴疾を發し遂に崩じたのである。其の後玄宗、武宗、宣宗の如き英主も皆自ら甘んじて此の激藥を飲んだのである。以て人間が長壽を得たいと云ふ心の强いと云ふことを知るに足るではないか。

佛敎の爲めに勢力を挽はる

方士の所謂仙藥

唐初に支那に入る

(三)耶蘇敎　耶蘇敎卽ち景敎の支那に這入つたのも唐の初めである。

唐は其の初めよりして波斯國と交通したのであるが當時波斯國には既にネストリアン派の耶蘇敎が行はれて居つた。そこで其の僧の阿羅本と云ふものが唐の太宗の世に基督敎の經典を持つて長安に來た。由つて太宗は波斯寺を建てゝ阿羅本に其の經典を飜譯させた。高宗のときには阿羅本を鎭國大法主となし諸州に命じて其の寺院を置いた。玄宗も亦頻りに之れを奬勵し其の僧を招いて宮中に入れ功德を修せしむるに至つた。次いで波斯寺を改めて太秦寺と名付けた。支那に於ては羅馬のことを大秦と云つたのでそして基督敎の大本は羅馬にあるからである。其の後肅宗代宗の世に至つて有名な郭子儀の如き人物すら景敎を信じて爲めに寺を建てた程である。德宗の世に長安の太秦寺の僧の景淨等は相計つて太秦景敎流行中國碑なるものを建てた。以て可なり勢力の盛んになつたことを示すに足るであらう。然るに武宗のときに至つて道敎を奬勵するの結果、佛寺と共に景敎の寺をも廢し其の僧を還俗させたから佛敎に比すれば未だ頗る幼稚であつたところの景敎は其の勢ひ遂に全く衰へ先きに景淨

武宗のとき衰滅す

等の建てた碑も地中に埋沒して仕舞つた。其れが明の末世に至つて再び堀り返へされて初めて唐の時代に既に基督教の盛んであつたことを知つたのである。

右の外唐の時代にはさすがに其の外交が廣大であつただけ之れに伴つて色々な宗教が這入つた。例令流行したとは言へなかつたとしても支那に這入つたことは事實である。即ち先きに述べた基督教と共に西方諸國よりして祇教（ゾロアスター教）、マニ教、回教などが支那に這入つた。祇教はゾロアスター教と云ふので太古ゾラースターなるものがバクトリアに始唱したのである。

祇教

此の宗教は陰神と陽神とを立て陰神は凡べての惡の本とし陽神は凡べての善の本となし火を以て陽神を代表し之を尊ぶからして此の教のことを一名拜火教とも云ふのである。此の教は早くからして波斯の國教となつたがサラセン帝國興つて波斯及び中央亞細亞を占領するに及んで其の教徒は回教の虐待に堪へないで次第に東方に移住し葱嶺を越へて遂に唐に入つて幾分か盛んに行はれたからして朝廷も之れが爲めに祇正なる官職を置いた。又マニ教は我が紀元八百八十年頃に波斯の國に出たマニなるものゝ創始した宗教で拜火教を基として佛教や耶蘇教の趣旨をも參酌したものである。回紇人は早くからして此の教を信じて居つたからして唐の中世以後は外交上の關係からして回紇人の支那内地に移住すると同時に此の教も支那に入り處々にまた寺を建てゝ其の流行を圖つた。回教即ちマホメット教は何故に回教と云ふかと云ふと後に回紇人が之れを信仰したからである。唐の末に當つては天山南路の佛教は次第に衰へ回教の勢力は其の政治上の勢力と相並んで此の地方に行はれた。阿剌比亞人の海路よりして江南に渡來するに及んで朝廷に乞うて廣東地方に會堂を建て盛んに其の教の流行を圖つた。

マニ教

回教

第十章　五代史

唐が亡びて以來五十餘年の間は群雄四方に割據して統一されなかつた。其の間後梁の朱全忠を始めとし支那の中原を占領して居つたものは後唐、後晋、後漢、後周の五代である。此の外割據の諸將中重もなるものは左表の

十國の割據地表

通りである。

五代割據の十國略表

國名	始祖	割據地	興	亡	世數	年數
吳	楊行密	淮南	梁の開平二年自ら王となり後南唐の爲めに簒はる		四	三十七
南唐	李昪	江南		吳の禪を受けて王と稱せしが宋に攻められて亡ぶ	三	三十一
前蜀	王建	蜀		梁のときに僭號し五代唐に降る	二	十六
後蜀	孟知祥	蜀		五代唐のときに僭號し宋の爲めに亡ぼさる	二	三十三
閩	王審知	閩		梁のときに僭號し五代唐の爲めに亡ぼさる	六	三十三
吳越	錢鏐	浙東浙西		梁のとき吳越國王となり五世弘俶のとき地を宋に献ず	五	七十四
荆南	高季興	荆南		五代唐のとき王となり終に宋に降る	五	五十七
南漢	劉隱	廣州		梁のとき僭號せしが後宋に伐たれて降る	五	五十三
北漢	劉崇	晉陽		周のときに僭號せしが後宋に降る	四	二十九

契丹の盛衰

楚　馬殷　湖南　梁のときに楚王となり後に南唐に降る　六四十四

五代の時に及んで塞外諸國で最も勢力の盛んであつたものは契丹である。契丹は支那の援亂に乘じて常に其の死命を制したのであるからして五代の歴史には最も關係があるのである。契丹は東胡の一種、鮮卑の別種で南北朝の初めにシラムリン河の附近を根據地として内蒙古の東部一帶の土地を占領し安祿山の亂後には唐の勢力の衰微したのに乘じて漸く南を侵し以て其の勢力を延ばした。我が紀元千五百六十七年に有名なる耶律阿保機なるもの出で從來八部に分れて居つた契丹の諸部を統轄し盛んに支那の制度文物を參用して中央集權の制度を立て自ら皇帝と稱した。是れが即ち契丹の太祖で其の即位は我が紀元千五百七十六年である。太祖の妻、述律なるものも亦た雄傑にして權略を有し太祖が軍議を凝らすときには常に其の謀に參與して以て契丹の强大を致すに力を盡くした。太祖は既に國内を統一してからは先づ北に向つて當時黑龍江の下流に繁殖して居た女眞族を侵し又其の西北即ち黑龍江の中流沿岸を占領して居た室韋

耶律阿保機帝を稱す

太祖大いに領土を擴張す

を侵し次いで西の方回紇の地を略し又吐谷渾や黨項（タングー）の諸部を降し頻りに天山附近の諸國を征して遂に渤海國を討つた。渤海は當時國勢頗る衰へて居つたので遂に契丹の爲めに其の國都忽汗城を陷れられた。實に我が紀元千五百八十六年である。當時契丹の領土は內蒙古に及び滿州を含み西の方吐蕃、回紇、大食の諸國や東の方新羅の諸國も皆契丹の爲めに控制せられた。太祖崩じて太宗が立ち次第に支那の侵略を計つて其の南下の目的を達した。

後梁は晉の爲めに振はず

後梁の太祖朱全忠は旣に唐の王室を奪つたが強敵晉王李克用のあつたが爲めに枕を高くすることが出來なかつた。然り克用の兵も次ぎの如き理由で初めの程のやうに鋭鋒ではなかつた。其れは初め克用は李存孝を養子としたが頗る豪雄であつた。今一人の養子李存臣は之れを惡んで克用に讒したので存孝は遂に克用に叛した。克用は之れを擒にして殺した。又克用の臣に薛阿檀なるものがあつて是れ亦存孝と同じく驍勇絕倫であつたが然し存孝の叛に與したので後に自殺した。此の二人を失つた爲め

晉內訌の爲めに衰ふ

後梁、晉を討つ

に晉の兵勢は稍弱くなつたからして梁の太祖は曾て失つた潞州を恢復せんと欲し頻りに兵を出して晉陽を圍んだ。此の役や克用は殆んど城を棄てゝ奔らうとするほどであつたが梁の兵が疫病の爲めに歸つたので僅かに免れた。斯くして克用は前日の如く梁と匹敵することが出來ないので大いに心配して居つたが其の子の李存勗未だ幼年ながらも父の憂色を見て進み說いて云ふには朱は狂暴を極め神人共に怒つて居る。之れに反して我が家は代々忠貞を致して居る。だから大人は氣長に遊養時晦し以て彼れの衰頽を待たれたが宜からう。輕々しく意氣沮喪して臣民を失望さす如きは不得策の甚だしきものであると。克用は大に喜んで臨終に之れを後嗣として群臣に云ふには此の子志氣遠大必ず能く我が事を成さんと。

晉の李存勗立つ

時に存勗の年は十七歲であつた。當時梁兵は晉の潞州を圍んで居たが城將は固守して降らなかつた。存勗が諸將に云ふには朱溫の憚るところのものは先王ばかりである。想ふに彼れは予が新たに立つて童兒だと云ふのを以て必ず驕怠の心があるであらう。此の機を逸せず精兵を選んで

後梁は存勗の爲めに破られ遂に晉に降る

急に彼れの不意を襲うたならば之れを破ること必然である。覇業を定むることは此の一舉にあると。由つて師を率ゐて晉陽を發し大霧に乘じて梁兵を襲つた。果して敵は大に潰ゐて南走したので潞州の圍みは解けた。

是れより晉は頻りに梁軍に勝つた。梁の太祖が嘆じて云ふには子を生まば當さに李亞兒の如くなるべし。我が兒の如きは豚犬のみと。亞兒は存勗の幼名である。梁の太祖の歿して後其の子の末帝は遂に存勗に降つた。是れは我が紀元千五百八十三年である。

李存勗後唐の莊宗となる

李存勗は後梁に代つて洛陽に卽位した。之れを後唐の莊宗となす。初め晉王の臣に張承業と云ふものがあつた。元は唐の宦官であつたが晉の志が唐の興復にあることゝ信じ晉王の爲めに政治經濟の任に當つて鞠躬盡力すること三十年、後晉王が自ら帝たらんことを望むのを知つて懼々として病を發した。さて後唐の莊宗は頻りに兵を出して黃河の南北及び關中四川の地を略し其の勢ひ盛大であつたが惜いことには慢心を發し頻りに宴樂に耽つて又軍事を事とせざるに至つたからして將士は遂に鄴都に

莊宗弑せられ李嗣源立つ

叛し王族の李嗣源を奉じて大梁に據つた。帝は之れを征伐せうとして却て道で殺された。そこで李嗣源は洛陽に卽位した。李嗣源が死んで其の子が嗣いだが養子の李從珂が叛して洛陽を陷れて自ら帝位に卽いた。時に石敬塘なるもの河東の節度使となつて晉陽に據つて居つたがもと李從珂と仲が惡かつたからして從珂は勅して石敬塘を天雄に移さうとした。然し石敬塘は勅に從はなかつた。そこで李從珂は兵を遣はして晉陽を圍ませたが容易に降すことが出來ない。石敬塘は遂に表を奉じ臣と稱し助けを契丹に求め勝つたならば地を獻ぜやうと約した。契丹主の德光は大いに喜んで騎兵五萬を率ゐて來援し大いに唐兵を破つた。石敬塘は洛陽を攻め李從珂は敗死した。そこで敬塘が帝位に卽いた。之れを後晉と云ふ。

李從珂自立す

石敬塘援を契丹に得て李從珂を殺す

石敬塘後晉に卽位し契丹に臣事す

石敬塘は契丹の恩を謝する爲めに山西、直隸兩省の北邊の十六州を割いて之れに與へ且つ年毎に金帛三十萬を贈り常に吉凶の際には使を遣はして其の歡心を買ふことを勉めた。此く石敬塘の在位中は常に讎んで契丹に

仕へたからして幸に事なきを得たが其の子の立つに及んでは前の如く契丹に向つて臣と稱せずして單に孫と稱して曰く先帝は北朝に立てられたから臣と稱したが予は中國の立てたところであるからして孫と稱して十分である。腹が立つならば來て戰へ孫には十萬の兵があるからして御相手をせうと。依つて契丹は大いに怒つて入寇したが幸にも當時後晉には劉智遠なる名將があつて二回までも契丹の兵を破つた。そこで後晉主は契丹を以て與みし易いものとなし頻りに奢侈を事として朝政が衰へた。

後晉主契丹を破つて驕る

間もなく契丹は又大舉して入寇したからして帝は杜重威を大將として之れを防がせたが彼れは戰はずして契丹に降つた。依つて契丹は長驅して大梁に入り後晉主及び太后、皇后を捕へて其の國に送つた。契丹の大梁を占領するや頻りに兵を放つて四方を略し財物を奪ひ老若男女を殺すこと無數であつたからして人民は大いに之れを怨んで群盜は四方に蜂起した。

契丹遂に後晉を亡ぼす

そこで契丹主が嘆息して我れは中國の治め難いことは此の樣であると思はなかつたと云つて遂に兵を率ゐて歸國した。

之れより先き後晉の臣、劉智遠は晉陽に居つて敢へて後晉の滅亡を救はなかつたが契丹の歸るに及んで大梁に入つて位に卽いた。之れが後漢である。劉智遠の死後其の子の隱帝は宿將を忌んで多く之れが怨みを買ふたからして諸將は兵を擧げて叛した。帝は將軍郭威に命じて之を討せさせたが幸にも皆平いだ。隱帝は之れより小人の言を信じて驕奢に陷り郭威等を殺さうとしたからして郭威は遂に部下を率ゐて叛し大梁に赴いて衆の爲めに推されて帝位に卽いた。之れが後周の太祖である。

劉智遠後漢主となる

太祖は頗る熱心に國勞を振起したが時に契丹は五萬の兵を率ゐて晉州を侵した。帝は將を遣はして之を走らせた。帝崩じて有名な世宗が位に卽いた。時に北漢の劉崇は契丹と聯合して(當時契丹は國名を改めて遼と稱した)。共に後周を討つた。世宗は自ら大將となつて之れを防ぎ高平(山東省)に陣した。世宗は諸將を促して進ませたが接戰幾許ならずして右軍の大將が逃走し爲めに步兵千餘が北漢軍に降つた。そこで世宗は我が軍の危きを見て自ら矢石を犯して督戰した。宿衛の將趙匡胤曰く主公の危き

郭威後周となり後漢に代る

世宗、契丹と北漢との連合軍を破る

こと此くの如し、我等焉んぞ死を致さゞることを得んやと。趙永德と各兵二千人を率ゐて士卒と共に死戰し一、百に當らざるなしの勢ひであつた。そこで北漢軍は大敗した。世宗は戰ひ終つて先きに逃げたもの七十四人を捕へ之れを責めて云ふには汝が輩戰ふことが出來ないではない。然るに十分戰はないで逃げたのは將さに我れを以て奇貨とし敵に賣らうとしたのであると。一人も許さず之れを斬殺した。之れより唐末以來の驕將惰卒も初めて恐るゝところを知つた。世宗の臣に王朴なるものがあつたが天資英邁で世宗の知遇を受けて其の天才を發揚した。帝は之れに國政を委任したので王朴は內は文治を修め外は武力を延べて以て後周の業を盛んにした。又世宗は兵は少くとも精なるを貴ぶの主義に由つて趙匡胤等に命じて頗る鍛錬精選せしめたからして其の士卒の精鋭なことは向ふところ敵なき有樣であつた。そこで世宗は頻りに割據の諸將を討じ又我が紀元千六百十六年には自ら大將となつて北方の遼を討じた。當時遼は內訌が相次いで國勢が頗る衰へて居つたからして世宗は之れに乘じて悉

王朴、趙匡胤の輔佐

世宗又遼を討つ

く瓦橋關(直隸省)以南の地を奪つた。然も天此の英主に年を籍さないで在位僅かに六年で崩じたからして其の子七歲の幼兒が位に卽いた。偶北漢と遼とは聯合して後周を討たうとしたからして趙匡胤をして之れを防がせた。趙匡胤は陳橋驛(河南省)に陣して居つたが群臣等は主若く國危きことを名として先づ趙匡胤を立てゝ天子となし然る後北征せんと欲じ遂に將士共は趙匡胤の寢所に迫り及を露はし庭に列して曰く諸將主なし願くは大尉を策して皇帝となさんと。卽ち匡胤に被らしむるに黃袍を以てし羅拜して萬歲と呼び擁して馬に乘らしめて南行した。是れが卽ち宋の太祖である。是等の模樣によつて當時軍人の勢力が如何に强かつたかを知るに足るであらう。實に唐時代の藩鎭の其の威を恣にして以來朝廷は藩鎭の爲めに制せられ藩鎭の主帥は又軍士の爲めに制せられ五代に至つては政治は悉く軍人政治である。兵馬の權は悉く軍人にあつて君主將帥といへども如何ともすることが出來ないことは恰も雖馬の末のやうであつた。だから大將を選び天子を選ぶも悉く彼等軍人の自由で若し其の選ぶ

趙匡胤諸將に推されて宋の太祖となる

權力下移の模樣

ところに應じなかつたならば立ちどころに身首ところを異にするに至つたのである。

第十一章　宋

第一節　宋の一統

宋の太祖が即位のときには其の管轄するところは僅かに今日の直隸、山東、河南、湖南、陝西などに過ぎないで五代以來各地に割據して雄を爭つて居るものが尙七國ほどあつた。

前章の終りに於ても述べた如く藩鎭の跋扈以來軍士の勢力頗る强く殊に宿衞は人主を廢立すること殆んど奕棊の如きものであつた。宋の太祖はいたく其の弊を嘆じ其の謀臣趙普と天下の事を論じ發問して云ふには唐末以來僅かに數十年。然るに八世十二君を經て僭竊相踵ぎ兵革は連年止まない。朕は天下の兵を止めて長久の計を立てやうと思ふが其の方法は如何にすれば宜いかと。趙普對へて云ふには是れは方鎭が甚だ强いため

太祖趙普の計を用ひて藩鎭を抑ゆ

に君が弱く臣が却て强いからである。今之れを改めるには漸次に其の境を奪ひ其の錢穀を制し且つ其の精兵を收めるのに限ると。太祖は其の言に從ひ先づ殿前都指揮使石守信等の禁兵を司ることを止めて節度使となして各藩鎭に遣はし又節度使が死去したり隱居したりするものがあつた場合には文官を以て之れに代へ是れ迄節度使の配下であつた州郡は改めて朝廷に直隸せしめ朝廷からして文官通判なるものを遣り以て郡民の政を司らしめることゝした。又從來藩鎭は其の領地の租稅を獨占して朝廷へ奉ることは甚だ少なかつたが太祖は諸州に轉運使なるものを置き以て租稅のことを司らせて財政の權を朝廷に奪つた。斯くの如く一方に於て藩鎭の勢力を奪ふと同時に他方に於ては諸道の精兵を選んで京師に置き能く之れを訓練し以て其の數に於ても其の力量に於ても地方藩鎭の勢力の分計に當り得るものとなした。

太祖は既に內部を整頓したからして次いで將軍王全斌、潘美、曹彬などに命じて頻りに割據の諸國を討平し最後に北漢を討平せんとして中途で崩じ

太宗北漢を亡ぼす

太祖降服者を任用す

武備消極的となる

歴代中最も外交に苦しむ

た。依つて弟の太宗は太祖に嗣いで立ち遂に北漢を亡ぼして支那を一統した。實に我が紀元千六百三十九年で卽ち我が圓融帝の時代である。

太祖の諸國を討平するや其の君長等の降參したものは之れを殺戮せないで却つて禮遇し其の一族徒黨のものも皆相當の秩祿を與へて餘命を終らせた。斯くの如く太祖は支那人の最も陷ゐり易き殘忍酷薄を避けて偏に仁政を施したからして宋の文物制度は燦然として備はつた。されど一利は一害を伴ふもので太祖が唐末五代以來の戰鬪に懲りて偏に力を文治に用ひたことは一方に於て宋の武備が消極的となることを免れなかつた。

既に武備が消極的となつた上に宋は其の時代を通じて最も外交に苦んだ。

然り、支那は大陸國であるからして何れの時代といへども外交に苦しまないことはないが中にも宋の時代に於ては塞外に強國が頻りに勃興し之れが爲めに宋は實に支那歴代中最も外交に惱まされた時代であることを免れなかつた。だから以下宋の歴史に述べるところは多くは外交に關係して居る。

太宗遼を攻めて却て耶律休哥に破らる

休哥能く燕を治む

第二節　初宋と遼及び西夏

契丹卽ち遼は其の主德光の死してより弑逆相踵ぎ外面上勢力が衰へたやうに見ゆたので宋の太宗は北漢を討滅した勢ひに乘じて幽州を圍んだが遼は有名なる耶律休哥を遣はし大いに宋軍を高梁河(今の北京の西)に破つた。休哥は遼の名臣で是れより以後屢宋の軍を破つたものである。彼れは智略絶倫敵を圖ること殆んど神の如く然も戰勝毎に其の功を諸將に讓つた。燕を鎭すること十七年頗る其の內政を整へたのみならず平時には戍兵を戒めて妄りに宋の境を侵させなかつた。偶々宋の方からして牛馬が逸走して來るやうなことがあつても悉く之れを返した。依つて軍士も人民も共に懷いて邊境大いに治まつた。宋の太宗が志を燕に得ないのは實に遼に休哥があつたからである。其の後遼の聖宗立つて母の蕭氏が專政するに及んで宋の群臣は此の機に乘じて燕の地を恢復せんことを勸めた。依つて太宗は曹彬、潘美に命じて遼を討つた。ところが耶律休哥又之れを逆擊し大いに宋兵を岐溝關(直隸省)に破つて深く支那の內地を掠めた。

休哥宋軍を岐溝關に破る

眞宗寇準の謀により遼を親征す

是れより宋と遼とは連年兵を交へたが宋の太宗崩じて眞宗が立つに及んで遼は益其の侵略を恣にした。寇準が宋の同平章事となつたとき契丹は又大擧して宋に入寇した。由つて帝は群臣に方略を問ふたところが或は其の鋭鋒を避けて江南又は蜀に幸せんことを請ふものもあつた。由つて帝は又寇準に問ふたら寇準が云ふには誰れが斯くの如き策を陛下に進めたのであるか？帝が云ふには卿は其誰れの策たるかを問はないで先づ其の可否を斷せよと。準が云ふには臣願くは此の策を盡したものを斬つて然る後に北伐せんことを請ふと。依つて遂に親征の議を定めた。時に契丹の兵は澶州(セン)(直隷省)を圍んだが城將は固守して下らない。帝の軍が進んで澶州に至るや寇準は帝に勸めて河を渡らしめ城門に上つて盛んに天子の旗幟を立てしめたから諸軍之れを見て萬歳を唱へた。そこで契丹の兵は其の氣を奪はれた。初め宋の臣の王繼忠は契丹に捕へられて居つたが此に至つて契丹主に媾和の利を說いた。依て契丹は使を遣はして和を求め周の世宗が取つたところの關南の地を得んことを求めた。帝が云ふ

宋、遼の講和

には土地は與へることが出來ない。金帛ならば與へやうと。寇準の意は此の行に於て契丹を全滅せんとするにあつたからして進言して云ふには斯くの如くしたならば永久の無事を圖ることは出來ない。數十歳の後に將は又來侵するであらうと。帝が云ふには數十歳の後には正さに之れを防ぐものも出るであらう。朕は重ねて人民を苦しむるに忍びないと。遂に和を講じて毎年絹十萬匹銀十萬兩を賜ることを約し宋朝を兄とし遼を弟とし各兵を釋き去つた。寇準の先見は能く當つて宋は又間もなく遼の爲めに苦しめられた。

朝鮮三分す

前に述べたことのある通り我が紀元千三百年代の初めには新羅は朝鮮の地を一統して居つたが其の勢力の漸く鈍るに從つて甄萱は定山(全羅道)に據つて後の百濟國を立て王建は松岳(京畿道)に據つて高麗國を立てた。そこで朝鮮は又新羅高麗後の百濟の三國に分れたが我が紀元千五百九十六年に至つて高麗は新羅の降を納れて後百濟國を亡ぼし以て朝鮮を一統した。

高麗朝鮮を一統す

高麗の太宗の孫成宗は宋と通じたので遼の聖宗は之れを怒つて高麗

高麗遼に降る

遼回紇を征す

遼大に振ふ

宋の内訌

慶曆の黨議

を討つた。そこで高麗は助けを宋に乞うたけれども宋が應せなかつたので遂に我が紀元千六百五十三年を以て遼に降つた。遼の聖宗は東、高麗を降し南、宋と和して東南の方面に力を用ふるの必要がなくなつたからして西に向つて河西の回紇を征し其の勢ひ隆々として旭日冲天の有樣であつた。當時遼の領地は西は天山の麓より東は日本海に至り南は支那本部の北部を包み北は外蒙古のクルロン河に至り國中に上京(臨潢)東京(遼陽)中京(内蒙古東陽の大定)南京(今の北京)及び西京(山西省の大同)の五京を立て高麗以下六十國の朝貢を受けた。實に遼は此の聖宗のときを以て最盛となす。』

斯くの如く遼の勢力は頗る盛大であるから宋は一生懸命に之れに當つてすら其の對抗の困難なのに況んや朋黨の爭が二十餘年の間續いて以て朝廷の統一を缺いだからして益其の勢威を落した。

仁宗は卽位の初め幼なかつたので太后劉氏が政治の任に當つた。そこで宋の代々の重忠たる黨爭の先驅たる慶曆の黨議が起つた。其のことは頗る複雜であるが要するに一方には呂夷簡黨あり、他方には韓琦、歐陽修など

四夏の興廢

拓跋思恭

李德明

の徒黨があつて互に排擠を事とし二十年間に内閣の交迭すること十七回の多きに及んだ。歐陽修が朋黨論を作つたのは實に此の憂ひを述べたのである。

斯くの如く内に朋黨の爭ひあり、外に遼の權勢を恣にするときに當つて宋には又新たなる一強敵を生じた。其れは卽ち西夏である。唐の末に當つて黨項族の拓跋思恭なるものが兵を起して唐兵を助け以て黃巢の賊を討じた。そこで其の功に由つて李氏の姓を賜ひ夏州(内蒙古のオルドスの南部)に居つた。然るに其の子孫は代々叛服常なく或は宋に服したり、或は遼に附いたりしたが李德明が其の主となるに及んで遼と宋と兩帝に臣事した。されど本國に於ては自ら帝と稱し其の子の元昊を立てゝ太子とした。

李元昊は勇氣大略のある人物であつたからして屢其の父が宋に臣たることを諫めた。李德明が云ふには我が一族が三十年間錦綺を着ることが出來たのは皆宋の恩である。だから叛くことは出來ないと。元昊が云ふには皮毛を着て牧畜を事とするのは我が國俗である。苟も英雄たるもの

李元昊

大夏皇帝

李元昊宋を侵す

ば正さに覇王たるべきで錦綺などは意とするに足らないと。我が紀元千六百九十二年を以て德明が死んだので元昊が嗣立した。依つて大いに文武の道を講じ回紇を討つて悉く河西の地を取り十八州を據有し(今の甘肅陝西の北部及び內蒙古の西南部)興慶(甘肅)を都とし黃河を帶び賀蘭山に據つて要害堅固に守つた。そして自ら大夏皇帝と稱し又宋に對して臣と稱せない。そこで宋の仁宗は怒つて其の官爵を削り互市を絕つた。依つて元昊は支那の延州に寇した。偶々大いに雪が降つたので一時元昊の軍は圍みを釋いて去つたが之れより陝西の地は長く兵馬の衝となつた。帝は夏竦(カキョク)を陝西の經路按撫使となし韓琦と范仲淹とを副使となし大いに州兵を訓練した。間もなく元昊は精兵十萬を率ゐて入寇したので韓琦は之れを防いで大敗し關右の地は大いに震動した。元昊は勢ひに乘じて諸州に寇したので宋の群臣中には河外を棄てやうと乞ふものあるに至つた。然も范仲淹が大兵を率ゐて出で防ぐに及んで元昊は遂に軍を歸へした。當時宋の將軍中で韓琦と范仲淹とが最も功勞が多かつたので此の二人があ

遼宋に割地を求む

呂章簡反對

富弼の富弼を遼に遣る

つた爲めに元昊も其の慾を恣にすることが出來なかつた。由つて時人が歌つて云ふには軍中に一韓あり、西賊之れを聞いて心膽寒し、軍中に一范あり西賊之れに驚いて膽を破ると。

宋が西夏と頻りに雌雄を爭ふに乘じて遼は再び關南の地を得んと欲し兵を燕に集めて南下の勢ひを示し使を遣はして割地を求めた。仁宗は到底此の二强敵に同時に當ることが出來ないから平和の主義であつたが然も土地を與ふることを欲しないので歲幣を增し結婚をして以て和さうとした。當時の相たる呂章簡は反對黨なる富弼を惡んで態と此の困難な外交使たらしめた。富弼は遂に至り熱心に論難して土地を割與することを拒んで且つ和戰の利害を說いた。そこで遼の心も之れに一致したからして富弼は一たび歸つて公然の條約の爲めに國書を持して再び遼に使した。其時に政府は別に口傳の辭を授けたが富弼は途で副使に云ふには我れ若し國書を見なくて口に云ふところと違ふことがあつたならば大いなる失敗を招くと。由つて國書を開いて見たところが果して口傳と違つて居た。

宋、西夏講和す

宋の外交は凡て失敗

そこで馳せ歸つて國書を改めて往つた。想へ、外、強敵と國家の大事に付て談判するに當つて依然として瑣々たる朋黨の感情に驅られ國家の大事を思はないで自國の公使を陷ゐれやうとするが如きは實に恐の極端ではないか。宋の勢が永く振はなかつたのは眞に之れに基くと云はねばならぬ。さて宋と遼とは歲幣の金銀各十萬兩を增して平和した。

時に西邊は久しく兵を用ひたので仁宗は頗る之れに倦いた。李元昊も亦例令軍には屢勝つたが死傷甚だ多く人は徵集に苦しみ財力も亦給せない。

國中のものは十不如の歌を作り之れを怨んだ。そこで元昊も亦後悔した。契丹は其の間に立つて媒介するところがあつて遂に宋と西夏とは互に使を遣はして平和條約を結び宋は元昊を夏國王に封じ銀二萬兩、絹二萬匹、茶三萬斤を歲幣として與へることゝした。

第三節　神宗の新法と用兵

宋は其の建國の初めよりして既に文に偏して武に弱かつたが之れが爲めに外交では常に消極の態度のみを採つて來た。否、曾に消極の態度を採つたばかりではない止むを得ずして戰つた場合も常に屈辱をのみ賞つた。

宋の財政困難

神宗外交の刷新と財政の豐富に熱中す

王安石拔擢せらる

卽ち太宗は先づ交趾に失敗し眞宗は契丹に失敗し仁宗も亦西夏などに失敗した。加之宋は建國以來功臣を優待し美衣美食を以て唐宋より權力の强大なりし武臣の志を他に轉じた手段は外交失敗と相待つて頗る宋の財政を困難ならしめた。されば神宗が年少氣銳を以て宋の君となるや一方には外敵に對して祖宗の屈辱を雪ぎ一方には財政の豐富を計らんと熱中したのは誠に無理ならぬことである。然り、當時滿朝の大臣等は何れも守舊尙古の碌々たる人物のみで此の大任を托するに足るものがなかつた。そこで從來議論高奇で一般の學者から毛嫌ひされて居つたところの王安石が特に拔擢された。熙寧元年帝は王安石を招いて政治のことを尋ねた。

安石が答へて云ふには術を選ぶを先きとなすと。彼は堯舜の道の至簡至要至易なることを述べ後世の學者が堯舜の道は高遠にして及ぶ可からずとなすものは彼等が能く其の道に通曉せない爲めであるとなした。依つて帝は安石の議を容れて制置三司條例司なる役所を設置し安石、呂惠卿

蘇轍などを以て其の職員に任じた。中にも呂惠卿は深く安石の信用を得て萬事相談相手となつた。安石は先づ富國の策として均輸、青苗、募役、市易、公田、均稅などの新法を立てた。第一の均輸法と云ふのは甲の土地の安い品を年貢として乙の土地に輸せしめ乙の地に安いものを甲の地に輸せしめて以て所謂貿易なるものゝ一種の利益を計ることとした。青苗法と云ふのは春、種蒔をなすときに百姓に金を貸して秋、穀物が熟したときに二歩の利足を副へて朝廷に納めさす法である。其の貸した金を青苗錢と云ふ。第三の募役法と云ふのは人民の貧富を五等に分ち兵役免除の税を出さしめ政府は其金を以て他に兵士を募集した。第四の市易法と云ふのは京師に市易務と云ふ官を置いて貨物が市場で賣れない場合には政府に買ひ上げて其れが必要な場合に賣り出す。斯くして物價の平準を計るところの法である。公田均稅法と云ふのは四方各一千歩の廣さを以て一方となし其の土地の肥瘠を五等に分ち課稅するところの法である。此の外强兵の策として保甲法と保馬法とを立てた。保甲法と云ふのは十家を保とし五

安石富國の策を立つ

均輸法

青苗法

募役法

市易法

公田均稅法

保甲法

十家を大保とし十大保を部保となし各長を置いて戰陣の法を練習せしめた。卽ち一種の民兵法である。次ぎに保馬法と云ふのは百姓に馬を貸し與へて以て武藝の練習に用ひしめ毎年一回其の馬を檢査して死したり病んだりした場合には其の借用人に補償せしめる法である。是等の新法を實行する爲めに諸路に提舉官なるものを置いた。

何事に付ても述べて作らず主義の支那人のことであるからして安石の創めた新法にも頗る强固な反對論が未だ其の法の實際に行はれないさきから起つて來た。否、安石が政府に入るや否や早く既に熱心な反對論者があつたのである。初め安石が政府に這入つたときに多くの士太夫は適當な人を得たと云つて喜んで居つた。時に呂誨と云ふもの司馬光と同行したことがあつたが呂誨が光に云ふには安石は偏見を執り人の己れに諂ふことを喜ぶ人物であるからして彼れの如きものが政府に這入つたならば天下は必ず其の弊を受けるであらうと。呂誨は又上奏して云ふには大姦は忠に似たり、大詐は眞に似たり、安石、外、朴野を示し內巧詐を藏す。驕塞上を

保馬法

呂誨新法に反對して容れられず

新法竝ひに其反對論の批評

慢り陰賊物を害すと。安石を信任せる神宗は素より斯かる言を容れる筈がない。そこで呂誨は辭職した。

熟ら當時宋朝の狀態を觀察するに外には强敵頻りに起り內には財政の困難が甚だしい。加ふるに年々歲々名こそ歲幣であるが其の實は不面目な償金を澤山に自分の侮つて居る夷狄に與ふるの止むを得ざる狀態であるからして必ずや不世出の人傑があつて國家を救濟せねばならぬことは最も明かなことである。安石が果して此の大任に適する人物であるかないかは吾人も疑ひなきを得ないが然し彼の反對論者が彼れの謂はゆる新法なるものを惡法の甚だしきものであるが如く云つたのには同意することが出來ない。元來國家が非常な場合には又非常な手段を採らねばならない。しかるに非常な場合に非常な策謂はゆる一時の權道を採ることを常に反對するのは支那人の中謂はゆる學者なるもの丶常態である。支那の通常學者と稱するところのものは堯舜孔孟の敎へを頗る狹意に偏屈に保守的に解釋して一意之れに違はざらんことを努め毫も謂はゆる變通なる

ものが利かない。だから安石が新法を立てたのを見て其の反對者の言議は凡べて古先王の法でないと云ふことのみであつて眞に新法の利害を理論的實際的に研究した結果に出でたものは一も見ない。無論彼等反對論者が其の國家を思ふの動機は甚だ嘉みすべきであるが然かも彼等は生きたる政治經濟を托するには餘りに無益な人物のみであつた。安石の新法の中で最も害毒を流すとが甚だしいとされた所のものは靑苗法であつたが此の法の施されんとするや蘇轍は之を評して曰く錢を以て民に貸したならば吏は緣つて姦を爲すであらう。又錢が民の手に入つたならば良民と雖ども妄用することを免れない。そして返納の期に及んでは富民といへども期限に違ふことを免れない。期限に遲つたからと云つて直ちに鞭韃を用ひたならば州縣は實に其の煩に堪へないであらうと。然し余輩を以て之れを考へると靑苗法は或る意味に於て今日最も奬勵して居る農工銀行の仕事に其の根本上の類似がある。何れの世にも百姓と云ふものは貧乏で五圓の肥料をすれば拾圓の增收があるに定つて居ても肥料代がな

い爲めに米が十俵取れる田地に五俵や六俵しか能く作らないと云ふのは吾々の常に見る事實である。だから彼等に肥料代を貸してそして肥料代以上の增收を計らせたならば例令年二歩の利子が附くにしても人民は尙多少の利益がある筈である。今日の農工銀行が無資本である農民に肥料代を貸し與へるのは詰り其の根本的觀念からいへばこゝにあるのであらう。そして安石の靑苗法も大體に於てはそこに主意があつたのであらう。

卽ち徒らに人民に金を貸して政府が其の利子を取ることばかりを目的にしたものではないであらう。農作物の增收を計つて官民共に利益するの考へであつたであらう。然らば其の方法にして宜しきを得んか二十世紀の今日經濟學者が奬勵するところのものを千年前に不完全ながらも斯かる經濟策を講じたのは一種の卓見と云はねばならない。然るに朝廷の役人等が古法にないからと云ふ一本鎗で以て無暗に之れを排斥したのは實に宋朝に取つて不幸なことであつたと云はねばならぬ。若し夫れ蘇轍の反對論の如きは恐も亦苦だしいものである。彼れは錢が人民の手に入つたならば妄用するを免れないと云ふが然し徒らに妄用するものは恐らく少數のものに過ぎなからう。之れを以て凡べての人民が然るが如く云ふのは間違つて居る。此の時代の人民が妄用すると云ふならば今日の農民も妄用するから貸せない話である。況んや期限に返さなければならないと云ふことが分つて居る以上は之れを利用して農作物の增收を計るの策に出づることは普通のことであらう。又政府も共に其の利用の道を講じて遣るのが當然である。又錢を民に貸せば役人が因緣して姦を爲すと云ふが支那の役人は古來から左樣な惡習慣があるからして蘇轍が云つたのであらうが然し其れは又相當の取締り法があるべき筈で其の取締りが全く出來ないならば政府の役人も經濟上のことは全く托することが出來ないことゝなる。要するに新法に付いて一々之を批評すれば、幾多の非難もあるが兎に角國家非常の場合に當つて非常の策を講せねばならぬとすれば惡い點は惡いとして飽くまで之れを改正し極力新しい法を考へて國家の經濟を處すべきである。然るに何時の世にも免れない學者の偏狹な

安石の人物評

猜忌心を以て一も二もなく新法を押し潰して仕舞はうとしたのは決して國家を思ふの忠臣とは言へない。無論安石の人物が剛愎であつたことは彼れが釣魚の宴に當つて誤つて釣餌を食ひ中頃悟つたが改めないで遂に之れを食ひ盡したことに由つても明かであるが然し彼れが姦邪の人物にあらざることは新法の反對黨の首領たる司馬光の言に由つても明かである。帝が曾て司馬光に向つて安石の人物を尋ねた。其時の司馬光の答へに人は安石を姦邪な人物だと云ふけれども是れは餘りに誹り過ぎた言葉である。唯彼れは事を曉らないで執拗なばかりであると。以て呂誨が前に安石を誹謗したことなどの事實でないことを知るに足るではないか？、安石は又一方から言へば支那人に珍らしい科學的の頭を持つて居つたらしい。由來漢民族は天地の現象と人事上の現象とを常に同一視し天變を恐れることが甚だしいもので孔子の如き大人物すら輙もすれば風雨雷電と政治道德の善惡との相應ずるものゝ如く云爲した。然るに安石は獨り云ふには災異は皆天數で人事の得失に關するものではないと。當時の人

神宗、安石の相を止む

物は此の言葉を以て天を慢し經に悖るとなした。然し事實に於て人事の得失と自然の得失とが一致すべきものではないことは明かな事で如何に聖人が政治をして居ても地震が起る年數に當つたならば地震を避けることは出來ない。自然の法則と人事上の法則とを混合視する支那人の非科學的頭腦こそ實に笑ふべきものである。要するに安石の新法が其の實行方法に於て幾多の不行屆があつたかは知らないが兎に角非常な場合を救治する策としては隨分價値があつたものであらう。然も彼れが政を執つて六年の間は祖宗の法に違ふと云ふ一點張りで四方八面から攻擊があつたのでさすがに安石を信用して居た神宗も漸くに安石を疑ひ出した。ところが偶々不幸にも大旱歲饑が起つて東北の流民が京城に流れ込むと云ふやうなことがあつた。そこで鄭俠と云ふ人物が其の流亡の民の悲慘なる狀態を畫に描いて帝に奉つた。帝は詔して直言を求めた。ところが新法を咎めるものが多かつたので安石は遂に位を去つて韓絳を薦めて己れに代へ呂惠卿を副とした。此の二人は安石黨であるからして安石が去つ

ても其の法を守つて失はない。ところが此の新法黨の間にも權勢の爭ひが起つて益反對黨に新法を非難するの餘地を與へた。

神宗は富國の策を講ずると同時に外國に對しても亦勢威を張らうと計つたが大事を委托するに足る良將軍がなかつた爲めに是れも亦失敗した。

神宗、遼と境界を定む

當時遼は宋が熙河路を置き又保民、保馬の法を始めたことを聞いて其の幽燕の地を恢復せうとする志のあることを知り使を遣はして境界を確定せんことを求め以て窃かに宋朝の內情を窺つた。依つて神宗も亦使を遣はして遼の使と境界のことを評議させたが互に固守して相讓らないからして永く評議が纏らなかつた。時に王安石は將さに大いに取らんと欲せば暫らく彼れが云ふまゝに與ふるに若かないと云つて遂に東西七百里の土地を失つた。

神宗、大越と交涉を開く

神宗は又支那南部に勢威を張らんと欲し大越との交涉を開いて是れも亦十分の效がなかつた。大越は我が紀元千六百七十年に元の交趾郡王の宿將李公蘊が主家を奪つて立てた國で子孫相繼いで頻りに國運を盛んにし

神宗と同時に大越王たるものは卽ち乾德と云ふ王であつた。當時神宗は大越が占城との交戰に勞れて居るのを好機とし之れを討たうとしたので乾德は大いに怒り我が紀元千七百三十五年に大擧して宋の南境を侵し宋の國の爲めに新法の害を除くことを口實とした。宋は郭逵を遣はし占城(今の交趾支那)眞臘(カンボヂヤ)の二國と聯合して大越を夾擊した。大越は破れて和を乞ふたが宋軍も南方瘴癘の氣に遭うて死亡するものが過半で遂に十分の功をなすことが出來なかつた。

神宗、西夏と交涉を開く

西夏は神宗の時代よりして屢宋に入寇した。時に王韶なるもの平戎策を奉つて曰く西夏を取らうと思へば先づ河湟を復するに限る(河湟とは黃河と湟水の間を云ふのである。武威(今の甘肅省にあり)の南部はもとは皆漢の郡であつたが今は諸羌が住んで居る。然し彼れは幸に分裂して統一がない。だから朝廷は甘く之を併有して夏人をして聯絡するところなからしめたら善いと。王安石は之れを奇謀となし河湟の役を開いた。間もなく西夏の臣民が其の王を幽閉したからして其の內亂に乘じ宋は李憲を

大將として西夏を討じたが破れて歸つた。時に宋の別將徐禧が永樂に築いて之れを守つて居たが西夏の爲めに陷ゐれられ徐禧及び將校の死者數百人軍卒の戰死したものは二十餘萬人に及んだ。

右に述べた如く神宗は鋭意熱心に富國强兵を圖りながら其の富國の策は朝臣の一致せないが爲めに破れ强兵の策も亦目的を達せないで終つた。

第四節　新舊兩黨の爭

前に述べた慶曆の黨議は宋の黨爭の始めであるが神宗の代に王安石が新法を出し其れに對して反對黨が舊法を主張した黨爭は宋朝の一名物である黨爭中では最も烈しく最も永く續いたので實に宋の社稷を危くしたものと云つて宜からう。今其の黨爭の顚末を左に述べやう。

神宗が崩して哲宗が立つたが年僅かに十歲であつたからして皇太后の高氏攝政し司馬光を任用して新法の害を除くことを努めた。司馬光は前に王安石と合はないで洛陽に退去すること、十五年であつた。光の人物は支那人流の理想に合ひ學者的溫厚篤實であつたからして洛陽の人民は皆司

舊法黨司馬光相となる

馬光こそ眞の宰相の器であるとなし光を呼ぶに司馬相公の名を以てした。

此に至つて朝廷の招きに應じて入朝するや至るところの民は路を遮つて集まり人馬が往けないほどであつた。そして皆云ふには公は宜しく留まつて天下の宰相となれ然らば百姓は復活せんと。以て彼れの民望の厚かつたことが分る。遼も亦其の邊吏を戒めて云ふには宋は司馬光を宰相となしたからして輕々しく事を生じて邊隙を開くなと。以て司馬光の名が外國にまで謙いたことが分るが然し支那人の記事であるからして果して眞に然るや否やは保證の限りではない。さて司馬光は王安石の創めた一切の新法を除いて仕舞つて古來普通の政治をなした。此の時の年號が元祐であつたからして此の改革を元祐の更化と稱するのである。然も司馬光は相たること僅かに八ケ月で死んだ。天下の人民は親を失つた如くに悲んで畫像を作つて祭つたと云ふことである。想ふに司馬光が溫厚篤實守成に適する人物であつたことは明かであるが然し國家の大難を靖定する的の人物ではない。彼れは新法を除いて仕舞つたがさりとて之れに代

元祐の更化

へて大いに富國强兵を計る良策を立てたこともない。卽ち彼れ及び舊法黨のなすところのものは何れも消極的の安寧秩序を保つに過ぎない。國家が外敵に對して生存競爭をするには如何なる大策を立つべきやに至つては一つとして見るべきものがない。加ふるに溫公の死んだ後は舊法黨は洛黨、蜀黨、朔黨の三黨に分れ以て新法黨に對して乘ずべきの機を與へた。

舊法黨の分裂

元來舊法黨は今日の謂はゆる漢學者流で以て成立して居るものであつたが學者と云ふものは我執の强いものであるから統一がし難い。況んや首領の司馬光がなくなつたものであるから其の分裂は止むを得ない。間もなく女中の堯舜と稱せられた皇太后の高氏も崩じた。

新法黨章惇呂惠卿政を執る

太后崩じて帝が政を自らするに及びさすがに年少氣鋭なること神宗に讓らなかつたからして碌々として保守偏屈な陳說をのみ唱へて居る舊法黨に同情することが出來ないで再び章惇、呂惠卿などの新法黨を用ひ舊法黨は漸く退けられ蔡京、蔡卞の用ひらるゝに及んで司馬光等の塚を發き屍を曝さうとするほどの極端な議論も出たが併し結局は其の碑を倒し官職を

追奪することゝなつた。此の局面一變を指して紹聖（哲宗の年號）の紹述と稱す。

紹聖の紹述

哲宗崩じて徽宗が立つて太后向氏が政を聽いた。太后は元祐紹聖は共に極端に走つて居るからして宜しく公平な方針を立て以て朋黨の爭ひを解かんと欲し年號を改めて建中靖國と稱した。然し向氏が崩じて徽宗が政を親しくするに及んで新法黨の章惇等の勢漸く强く遂に新法紹述の說が盛んになつて舊法黨は又々退けられた。元來徽宗は暗愚の君であつたからして外に强敵あり、內に朋黨の爭ひがあつて朝廷の危急頗る甚だしきに拘はらず奢侈を好んで土木を起し道敎を信じて宮觀を立て頻りに方士を招いた。そこで費用が足らないからして佞臣蔡京等を用ひ新法を復して收斂を計つた。斯くの如くするもの殆んど二十年蔡京の子の蔡攸も亦其の權勢父と均しく滿朝の重要な位置は殆んど其の徒黨を以て充さるゝに至つた。蔡京は曾に國政を恣にするのみならず大膽にも邊功を立てゝ以て其の勢威を張らんと欲し雲貴諸地方の諸蠻族を招致し又徒らに大言す

蔡京政を執る

るのみで眞の膽略なき靈貫等を遣はして地を西に開かんと欲した。靈貫は吐蕃を討つて河湟の地を復し又西夏を圖つた。そこで西夏の王は吐蕃と兵を合せて宋軍を防いで互に勝敗があつた。是れより後關中隴西の地方は兵馬の絶間がなかつた。

女眞の盛衰

靺鞨の二大部

熟女眞

生女眞

第五節　女眞の勃興と遼の滅亡

東胡の別種に女眞族と云ふのがあつて其の住地は遼の東邊卽ち南は高麗に接し東は日本海に瀕して居た。漢魏の際には此の民を挹婁（ユーロー）と稱し三韓隋唐は之れを靺鞨と稱した。唐の初めには黑水部と粟末部との二大部があつたが次第に粟末部の方が强盛となつて勃海國を建立した。そして黑水靺鞨は之れに役屬した。此の靺鞨の人民中で混同江卽ち今の松花江の西南に居るものは熟女眞と稱して籍を遼に置いて居つた。又其の東に居るものは生女眞と稱して遼に戶籍を有せない。女眞は後に遼の天子の諱を避けて眞を改めて直となした。中にも生女直は風俗頗る粗野で戰爭を以て第一の長技となして居る。其の生女直の中に完顏（ワンヤン）部なるものがあつて世々松花江の一支流の源に居つたがウクナイなるものが酋長となるに及んで遼の叛將を捕へた功によつて初めて節度使となつた。其の子孫は能く同心戮力したので兵勢が漸く强くなつて遂に有名な阿骨打（アグダ）と云ふ酋長を出した。阿骨打は其の性質剛毅で大志を懷いて居つた。時に遼は漸く衰微して又昔日の聖宗時代の俤はなかつたが阿骨打の女直に酋長たるときに當つて淫虐暴戾なる天祚が遼の君となつた。天祚は每年使を遣はして名鷹の海東靑を女直に求めた。ところが女直は此の鷹を得る爲めには隣國に兵を發して之れを得ねばならぬので頗る其の煩に堪へなかつた。のみならず其の使が來るたびに女直の人民に誅求することが甚だしかつたので阿骨打は遂に兵を擧げて遼に叛き容易に混同江附近の諸部を降して遼軍を迎へ擊つて大いに之れを破つた。由つて我が紀元千七百七十五年阿骨打は遂に帝を稱し國を大金と稱した。そこで遼の天祚は大軍を率ゐて親征して混同江に至つたが其の部將が上京に叛したので天祚は一旦兵を引いて歸つた。阿骨打は追擊して大いに之れを破り熟女眞を降し

阿骨打

女眞と遼と

阿骨打金帝となる

て遼の東京を陷ゐれた。こゝに於て遼は和を講せうとしたが成らないで阿骨打は益兵を進めて遼の上京に迫つた。

宋、金と遼を挾擊す

初め宋の童貫は河湟の地を復して以來心頗る驕り北邊も容易に圖ることが出來ると考へて使を遼に遣はして其の國情を探り趙良嗣なるものを率ゐて歸つた。趙良嗣は女直と共に遼を挾擊するの策を立てた。そこで徽宗は馬政を遣はして海を渡つて金に使し金と好みを通じた。其の後互の使者が往來して遂に遼を挾擊するの約が成立した。其の約によると金は北からして遼の中京を略し宋は南よりして遼の南京を攻めること。成功のときには後晋のときに契丹に與へた支那本部の地卽ち燕雲は宋の所有となし爾餘の土地は悉く金の所有とすること。又宋は從來遼に與へて居つた歲幣を金に贈ること。之れが條約の大要である。此の約が成つて後金は直ちに兵を進めて遼の上京、中京を陷ゐれ天祚を逐うて又遼の西京を陷ゐれた。宋も亦條約に從つて童貫蔡攸などをして遼の南京を攻めさせたが遼の大將の耶律大石及び蕭幹などは能く防いで屢宋の軍を破つた。

金、遼を陷る

そこで宋軍は約束に從つて南京を取ることが出來ない。之れを見た金軍は宋に先きだつて南京に攻め入つて遂に之れを陷ゐれた。斯くの如く遼を挾擊することを約したものゝ其の成功は悉く金にあつたからして金は宋に對して前約を履むことを拒んだ。由つて宋は前に約束した歲幣の失ふ所あつて得る所なし

宋は失ふ所あつて得る所なし

毎年錢百萬緡を金に贈り且つ南京を陷ゐれた慰勞として兵糧二十萬石を金に與へることゝして僅かに南京と其の附近の六州とを得た。是れは實に我が紀元千七百八十二年である。此の戰に於て宋は失ふところ頗る多きに拘はらず其の得たところの南京などは財物悉く金軍の爲めに奪ひ去られ單に空虛の都を得たのに過ぎない。其の翌年金の太祖阿骨打は死んで弟の太宗が位に卽いた。當時遼の天祚は既に金の爲めに五京を失つて根據地がなくなつたので西夏に奔つた。金は西夏に陰山以南の土地を與ふることを約して己れの味方とならせたからして天祚は又止むなく黨項に行かうとして遂に金軍の爲めに捕へられた。時に我が紀元千七百八十五年で遼は凡そ二百卅年で亡びた。併し前に宋軍を防いで功のあつた遼

遼亡ぶ

耶律大石、四遼を建つ

の大將の耶律大石は遼の餘衆を率ゐて今のウルムチの地に至り回紇などの諸部を招いて勢を張り中央亞細亞に入つてサマルカンドを取り以て西遼國を立てた。西遼は一に黑契丹とも號し熱心に昔日の遼朝の勢を興復せうと圖つたが耶律大石は遂に其の志を遂げないで死んだ。併し其の子孫は相踵いで葱嶺の東西に君臨し一時中央亞細亞の一强國たることを失はなかつた。

金、宋を侵す

第六節　宋と金との攻戰

金は前に宋と遼を挾擊して宋軍の頗る爲すなきを看破したから何か機會を作つて宋に當らうと願つて居つたが偶々金の降將を宋が納れたからして其れを名として兵を起し有名なる粘沒喝、斡離不の二將をして道を分つて宋に入寇せしめた。童貫は之れを聞いて逸早く大原から逃げ歸つた。時に大原の帥張孝純が嘆じて云ふには平時には童大師多少の威重をなし軍に臨んで畏怖することかくの如し。身大師となつて國の爲めに死することを能はず、何の面目あつてか天下の士を見んと。帝は金人の來り侵すを

徽宗、欽宗に讓位して和を請ふ

見て俄かに諸々の土木を止め天下勤王の士を募り位を太子に讓つた。之れを欽宗となす。上皇は使を金に遣つて禪位のことを告げ且つ和を請うた。

然し金將斡離不は退くことを欲せず。遂に河を渡つて進んだ。そこで上皇は都を出奔したが帝は李綱のことに由つて漸く固守の議を定めた。間もなく斡離不の軍が京師に迫つたが宰相の李邦彥は和議を主張し李綱は戰爭を主張した。由つて帝は邦彥の言に從ひ使を遣つて和を求めた。斡離不が云ふには和議を欲するならば金五百萬兩、銀五千萬兩、牛馬萬頭、衆端百萬匹を贈り中山(直隸省にあり)太原(山西省にあり)河間(直隸省にあり)の三鎭を割き親王、宰相各一人を人質とせよと。李邦彥等の講和論者は頻りに帝に勸めて其の要求に從はしめ京師の金銀を送へて僅かに金二十萬兩と銀四百萬兩とを得た。時に种師道等は兵を率ゐて入援し帝に謁見して李綱等と共に頻りに主戰論を主張した。爲めに和戰の論は再び花が咲いたが一夜宋軍は金の陣營を攻めて大敗したので帝は大に恐れて遂に和議に確定した。金軍は京城を圍むこと三十三日にして割地の詔を得。金幣の

て遼の東京を陷ゐれた。こゝに於て遼は和を講せうとしたが成らないで阿骨打は益兵を進めて遼の上京に迫つた。

宋、金と遼を挾擊す

初め宋の童貫は河湟の地を復して以來心頗る驕り北邊も容易に圖ることが出來ると考へて使を遼に遣はして其の國情を探り趙良嗣なるものを率ゐて歸つた。趙良嗣は女直と共に遼を挾擊するの策を立てた。そこで僖宗は馬政を遣はして海を渡つて金に使し金と好みを通じた。其の後互の使者が往來して遂に遼を挾擊するの約が成立した。其の約によると金は北からして遼の中京を略し宋は南よりして遼の南京を攻めること。成功のときには後晋のときに契丹に與へた支那本部の地卽ち燕雲は宋の所有となし爾餘の土地は悉く金の所有とすること。又宋は從來遼に與へて居つた歳幣を金に贈ること。之れが條約の大要である。此の約が成つて後金は直ちに兵を進めて遼の上京、中京を陷ゐれ天祚を逐うて又遼の西京を陷ゐれた。宋も亦條約に從つて童貫蔡攸などをして遼の南京を攻めさせたが遼の大將の耶律大石及び蕭幹などは能く防いで屢宋の軍を破つた。

金、遼を陷る

そこで宋軍は約束に從つて南京を取ることが出來ない。之れを見た金軍は宋に先きだつて南京に攻め入つて遂に之れを陷ゐれた。斯くの如く遼を挾擊することを約したものゝ其の成功は悉く金にあつたからして金は宋に對して前約を履むことを拒んだ。由つて宋は前に約束した歳幣の失

宋は失ふ所あつて得る所なし

毎年錢百萬緡を金に贈り且つ南京と其の附近の六州とを得た。是れは實に我が紀元千七百八十二年である。此の戰に於て宋は失ふところ頗る多きに拘はらず其の得たところの南京などは財物悉く金軍の爲めに奪ひ去られ單に空虛の都を得たのに過ぎない。其の翌年金の太祖阿骨打は死んで弟の太宗が位に卽いた。當時遼の天祚は旣に金の爲めに五京を失つて根據地がなくなつたので西夏に奔つた。金は西夏に陰山以南の土地を與ふることを約して己れの味方とならせたからして天祚は又止むなく黨項に行かうとして遂に金軍の爲めに捕へられた。時に我が紀元千七百八十五年で遼は凡そ二百十年で亡びた。併し前に宋軍を防いで功のあつた遼

遼亡ぶ

耶律大石、西遼を建つ

の大將の耶律大石は遼の餘衆を率ゐて今のウルムチの地に至り回紇などの諸部を招いて勢を張り中央亞細亞に入つてサマルカンドを取り以て西遼國を立てた。西遼は一に黑契丹とも號し熱心に昔日の遼朝の勢を興復せうと圖つたが耶律大石は遂に其の志を遂げないで死んだ。併し其の子孫は相踵いで葱嶺の東西に君臨し一時中央亞細亞の一强國たることを失はなかつた。

金、宋を侵す

第六節　宋と金との攻戰

金は前に宋と遼を挾擊して宋軍の頗る爲すなきを看破したから何か機會を作つて宋に當らうと願つて居つたが偶々金の降將を宋が納れたからして其れを名として兵を起し有名なる粘沒喝、斡離不の二將をして道を分つて宋に入寇せしめた。童貫は之れを聞いて逸早く大原から逃げ歸つた。時に大原の帥張孝純が嘆じて云ふには平時には童大師多少の威重をなし軍に臨んで畏怖することかくの如し。身大師となつて國の爲めに死することを能はず、何の面目あつてか天下の士を見んと。帝は金人の來り侵すを

啓宗、欽宗に讓位して和を請ふ

見て俄かに諸々の土木を止め天下勤王の士を募り位を太子に讓つた。之れを欽宗となす。上皇は使を金に遣つて禪位のことを告げ且つ和を請うた。

然し金將斡離不は退くことを欲せず。遂に河を渡つて進んだ。そこで上皇は都を出奔したが帝は李綱のことに由つて漸く固守の議を定めた。間もなく斡離不の軍が京師に迫つたが宰相の李邦彥は和議を主張し李綱は戰爭を主張した。由つて帝は邦彥の言に從ひ使を遣つて和を求めた。斡離不が云ふには和議を欲するならば金五百萬兩、銀五千萬兩、牛馬萬頭、表緞百萬匹を贈り中山(直隸省にあり)太原(山西省にあり)河間(直隸省にあり)の三鎭を割き親王、宰相各一人を人質とせよと。李邦彥等の講和論者は頻りに帝に勸めて其の要求に從はしめ京師の金銀を送へて僅かに金二十萬兩と銀四百萬兩とを得た。時に种師道(チンシドー)等は兵を率ゐて入援し帝に謁見して李綱等と共に頻りに主戰論を主張した。爲めに和戰の論は再び花が咲いたが一夜宋軍は金の陣營を攻めて大敗したので帝は大に恐れて遂に和議に確定した。金軍は京城を圍むこと三十三日にして割地の詔を得。金幣の

金は償金及三鎮を得て歸る

數が不足して居るのを打ち乘てゝ軍を退けた。种師道や李綱等は河に臨んで金軍を要擊せうとしたが是れも亦容れられなかつた。金軍の退くや上皇も京師に歸り窃かに三鎮に勅して固守して金に附かざらしめ又遼の舊臣の金に居るものを誘招し且つ金の使者を捕へた。金の太宗は大いに怒つて又々大擧して南侵した。幹離不は東路より粘沒喝は西路より共に京師に至り之れを圍むこと四十日で遂に城を陷ぬれた。そこで金軍は帝及び上皇、太子、親王、皇族三十人を捕へ城中の子女金帛其の他一物をも殘さず悉く之れを掠めて國に歸つた。此大難は欽宗の靖康の年に起つたからして世に之れを靖康の難と云ふのである。かくの如き甚だしき屈辱は古來殆んど其の類例を見ないのである。そして斯くの如き甚だしき屈辱を招ぐに至つた所以のものは畢竟宋朝の一大弊害たる黨爭の結果で國家の大事が眼前にあるに關らず常に議論區々に岐れ謂はゆる小田原評議の中に敵をして其の慾を恣にせしめたのである。若し宋朝が和戰何れかに其の國是を定めて同心協力したならば斯くの如き屈辱を見ることはなかつたであらう。

靖康の難

宋の此の屈辱は黨爭の結果である

實に徽、欽二帝は講和するのであるかと見れば一方には敵の感觸を害するやうな行動を敢へてして以て屢戰を招き戰ふかと思へば敵軍を見ると直ぐに恐れて講和する。其の擧動實に兒戲に類して居る。さて此の難の爲めに河東河北の地は悉く金の所有に歸した。實に我が紀元千七百八十七年である。

第十二章　南宋

第一節　宋の南渡

高宗、南宋に即位す

徽、欽二帝の金に捕へ去らるゝや徽宗の子康王構は群臣に南京に擁立せられた。是れが南宗の高宗である。即ち從來は汴京が都であつたから之れを北宋と稱し以後を南宋と稱するので實に我が紀元千七百八十七年である。宋は徽、欽二帝が金に捕へられたから元來が慷慨の情に富んだ時代であるからして金人を怨むこと謂はゆる骨髓に徹し如何にかして之れに報ゆるところあらんと欲したが不幸にも當時金の勢は益盛んに士馬精銳君

南宋益衰ふ

臣輔睦少しも乘ずべきの隙がなかつたのみならず宋は之れと反對に代々の失敗で兵氣も衰へて居るし經濟も頗る困難であつたからして戰ふ毎に多くは大敗した。其れのみならず高宗は群臣を統御するの才なく之れが爲めに朝論は朝變暮改國是が少しも一定せないし勇將は大局に目を注がないで一部一局の勝利の爲めに勇戰し却つて以て敵の入寇を挑發し臆病なる宰相は徒らに名を和議に借つて苟安を計るのみである。だから領土は日に益縮少し敵の勢は却つて益盛んになつた。そこで高宗は屢人を募つて金に使せしめ哀れにも之れを祈請使と名付け金に對して臣と稱し以て其の入寇を緩め且つ二帝を返さんことを請うたが金人は顧みない。素より宋にも當時秦檜の臣とも稱すべきものがないではなく有名なる李綱の如きは屢國是を一定して金に當らんことを主張した。初め李綱の相となるや帝に勸め一たび京師に入つて宗廟を拜し以て都人の心を慰め又河北河東は國の藩屏であるから之れを善く治めてこそ中原は始めて保つことが出來るものであるから河北河東には適當な人物を派遣して以て

秦檜の臣李綱の重用ひられず

金南侵して目的を遂ぜず

州郡を恢復せうと請うたが元來帝は臆病な性質であつたのみならず當時既に黃潛善、汪伯彥等の如き軟派の人物が帝の氣に入つて居つたからして李綱が帝に說くに當時巡行すべきところは關中に幸するのが一番善く、襄陽は第二で建康に幸するのは最も惡い。だから縱し關中に幸せられないにしてもせめて襄陽に行かれたいと願つたが帝は遂に之れを用ひないで李綱は止められ帝は揚州(江蘇省)に行つた。時に金は大軍を起し三道に分れて南侵した。即ち金將婁室は西に向ひ潼關を破つて關中を降し兀朮は東に向つて山東の地を略し粘沒喝は中道を取つて河南に向つた。幸にも當時宋の名將宗澤は四方の義士を募つて汴京を固守して居たのでさすがの金軍も進むことが出來ないで一旦引き去つた。之れより先き宗澤は群盜を招き降して城下に集め又兵を募り糧を貯へて將さに日を期して河を渡らうとした。諸將は皆泣いて其の命を聞いた。由つて宗澤は上奏して帝に汴京に還幸せんことを請うもの前後殆んど二十餘回に及んだが常に軟派の大臣に抑留せられて其の目的を達せなかつた。宗澤は憂憤の餘り

宗澤の重用ひられず

金再南侵して高宗出奔す

病を發して死んだ。宗澤死して豪傑は失望し群盜は又散じて掠奪を恣にした。由つて金軍は再南侵し連戰連勝淮水を渡り楊州に迫つたので帝は倉皇鎭江に至り又杭州(浙江省)に奔つた。金軍は江東に入り頻りに建康などを陷ゐれ之が爲めに高宗は各所に逃れ殆んど金軍の爲めに捕へられんとしたが僥倖にも宋の名將韓世忠は金將兀朮を金山に扼し大に金軍を破つたからして再び江を渡つて進んで來ることをせなかつた。然しながら中原は群盜頻りに起り掠奪を恣にし殆んど盜賊の巢窟となつて仕舞つたからして有名なる誠忠の宋將岳飛等は之れが討平に多くの力を奮はれた。

金劉豫を齊帝となす

初め金人が二帝を奪ひ去るや張邦昌を立てゝ宋に代へて王となしたが人心が服せないで遂に誅せられたからして金は又更に劉豫を河南に擁立し汴京に都せしめて齊帝と稱せしめた。そこで劉豫は之れを德とし屢兵を遣はして宋を攻めたが岳飛の爲めに苦しめられた。由つて金は其の將婁室(ウウ)兀朮(ウウ)を遣はして齊を救はせた。是に於て高宗は張浚、岳飛、韓世忠等をして之れを防がせたからして金兵は又退き高宗は遂に臨安に都した。時に

高宗臨安に都す

和議論者秦檜を親任す

我が紀元千七百九十五年である。初め徽、欽二帝の金に捕へ去らるゝや秦檜なるもの二帝に隨つて金に居つたが金の宗族ダライと親密なので和議を主張するの約束で宋に歸つて來た。高宗は之れを親任して宰相となし之れより和議の論が次第に盛になつて主戰論を排斥し王倫を遣はして和議を圖らせた。金は當時其の鋒又昔日の如くならず屢南侵して目的を達せないからして遂に和議に應じ陝西、河南の地卽ち東西南の三京及び其の他の地を返さうとした。然し兀朮は地を返すことの甚だ不得策なることを主張し是れ畢竟ダライ等の陰謀でめらうと云つたのでダライ等は遂に叛して誅せられた。そこで金主は又盟に背いて入寇し頻りに岳飛、韓世忠等宋の諸將と勝敗を爭つた。此の勝敗を爭つて居る際に當つて秦檜は依然として和議を主張し高宗に勸めて岳飛、張浚等を拘監し遂に改めて平和條約を結んだ。其の結果宋と金との境は東は淮水西は山散關と定め宋より歲幣銀絹各二十五萬を金に贈ることゝなして臣を金に稱し以て僅に徽宗の梓宮及び高宗の母、韋太后を得た。時に我が紀元千八百一年である。

和議成らんとして破る

和議遂に成る

文字の獄

秦檜の行爲を以て姦惡に姦惡と見做す可からず

此の講和が宋の爲めに頗る屈辱的であつたことは事實である。そして其れが秦檜等の主張に由つて成つたもので之れに反對する侃々諤々の士が此の講和の前後に於て盛んに起つたことも事實である。そして秦檜は己れの平和の主張を永久にする爲めに巧みに帝の耳目を蔽ひ又文字の獄なるものを起して苟も秦檜等平和主義の主張者の行爲に對して非難するものゝ如きは悉く獄に投じて以て人口を箝制した。是れより以後宋朝に於ては前の如き主戰論を主張するものは皆無となつた。想ふに何れの世に於ても主戰論と平和論とが竝び起つた場合には常に平和論者の方は主戰論者の方よりも愛國心の乏しいもの、意氣地のないもの、やうに言はれることは常であるが殊に宋朝の如く學者が氣節を貴び慷慨を以て自ら高しとする時代に於ては平和論なるものが其の國家の形勢如何に拘はらず頗る屈辱的のものであるとせられることは當然である。されば後世の歴史家が秦檜等平和論者を評して非常に惡しざまに云ふのは必ずしも其れが眞理であるや否やは俄かに判斷することは出來ない。一面から見れば秦檜の如き平和論者が常に勢力を得て侃々諤々の士が殆んど排斥せられて仕舞つたことは當時宋の形勢が既に事實上に於ては屈辱を忍ばざる可からざる形勢に立ち至つて居つたからであると考へることも出來る。されば余輩は徒らに秦檜等に同情するものではないが然し一も二もなく秦檜等の行爲を以て姦惡の徒のなすところと考へるが如きは少しく事情に迂なるものと言はねばならない。然り、秦檜が其の勢力を得たる所以のものを高宗の懦弱なる性質に投じたからだとせば幾分の說明にはなるが然しながら若し朝廷の輿論、否、國民の輿論が確かに實力の上に於て有望のものであつたならば如何に高宗なり秦檜なりが平和主義であつても到底多數の勢力に勝つことは出來まい。當時の皇帝なるものは決して眞正の君主獨裁的勢力を持つたものではない。だから如何に高宗が秦檜等の言に聞いたにしても多數の人士が侃々諤々の士であつて謂はゆる最後の一人まで戰鬪する覺悟であつたならば如何ぞ平和主義が勝利を占めることがあらうか？、されば秦檜等の平和論が勝利を占めた所以のものは一つには秦

平和論は常に必ずしも主戰論より惡しきものにあらず

檜其の人が例令姦惡なる性質にせよ爽に角萬人に優れた或る魔力を持つて居たからだとも考へられるが然しかゝる大事を如何なる時代に於ても只一人で決するなどは到底能はないことで之れを決せしむるものは少くとも當時廟堂に於て外交の大任に當つて居るものゝ多數が之れが後援とならねばならない。されば右の屈辱的平和を以て秦檜一人の罪であるかの如くに主張する從來の歷史家の說に全然同意することは出來ない。豈啻に宋金の平和條約に於てのみならず凡そ如何なる國、如何なるところに於ても名の上には常に主戰論は平和論に勝つて居るものゝ如く見ゆるのは古今の歷史に照して明かなことであるが能く々々一時の感情を支配して國家永久の得失の上から打算したならば必ずしも平和論は常に主戰論よりも惡いと云ふことは言へない。要するに主戰論者が國家を思ふの衷情があると同じく平和論者にも眞に國家を思ふものゝ多數にあることを忘れてはならない。但し秦檜が全く國家を思ふの念からして屈辱を忍び金と平和條約を結んだのであるかないかは無論考へものである。論者或は彼れが文字の獄を起したのを以て全く彼れの我が儘から出たのであるとなすが然し是れは一考すべきことで此の獄は若し秦檜が其の平和論を貫徹する手段として止むを得ず起したものとするならば必ずしも非難することは出來まい。少し事柄に異なるところはあるが我が井伊直弼が其の開國論を貫徹する爲めに安政の獄を起して多くの志士を捕斬したのと其の間幾分の類似がありはずまいか？井伊直弼の安政の獄を起したのも普通の歷史家は極力之れを惡しざまに云ふが然し能く當時の事情を考へたならば幕府が其の開港の主義を貫徹する爲めに止むなくして政略上から採つたところの一種の手段と考へられないこともなからう。

金亦内訌に苦しむ

第二節　秦檜の講和後に於ける宋金

の狀態

秦檜の起した文字の獄以後宋朝に主戰論を唱へるものがなくなつたときに際して金も亦内訌の爲めに昔日の勢威を失つた。金の熙宗は晚年に至

つて或は皇弟を殺し或は皇后を殺すなどの行動があつて大に朝臣の心を失つたからして遂に其の弟亮の爲めに弑せられた。此の金主亮は實に古今稀れなる淫虐なる天子であつた。彼れは卽位の初め多くの宗室大臣などの己れの意に協はないものを殺し且つ都を燕に遷して衣冠禮節悉く之れを宋の汴京の標準に倣つた。そこで燕京を中都となし汴京を南京となし從來上京と云つた名を削り單に之れを會寧府と稱し又中京大定府を北京となし東京遼陽府と西京大同府とは元の通りの名を存して置いた。是れが卽ち金の五京である。亮は又南渡の志があつたからして畫工に命じて南宋の都なる臨安湖山を描し是れに己れが馬を吳山の絕頂に立てゝ居るところを圖し其の上に題詩して立馬吳山第一峰と書いた。其れより盛んに軍備を整へ遂に我が紀元千八百二十一年都を汴に遷し六十萬の大軍を發して道を分つて宋を侵した。金軍は渦口(安徽省)に於て淮水を渡り悉く其の近傍を陷れ又舟師を發して宋石安徽省)に進つた。ところが宋の大將虞允文が能く之を防いで金軍は敗績した。金主亮は之れを怒つて其

金主亮南侵して敗し身も亦弑せらる

の戰に敗れたもの等を打ち殺した。偶々飛報があつて云ふには金の烏祿が位に東京に卽いたと。そこで亮は大に驚いて馬を北に向けたが將士の爲めに弑するところとなつた。烏祿は卽ち有名なる金の世宗である。其の翌年に宋の高宗は臨安に歸り位を太子に讓つた。是れが賢主の名のあつた孝宗である。

金世宗立つ

孝宗は張浚、李顯忠等を任用し鋭意恢復を計り宋金の國際法を變じた。是れよりさきに宋金兩國が國書を贈るときには君臣の禮を用ひ金は勅を下すと云ひ宋は表を奉ずと云ひ大宋の大の字を去り皇帝の皇の字を去り金の使が宋に來たならば宋の天子は起立して金帝の起居を問ひ座を下つて勅を受ける。そして百官は皆金使を拜する。之れに反して宋の使が金に至つたならば其の取扱は陪臣と同じである。そこで孝宗は三たび使を遣はして頻りに談判し初めて金宋は叔姪の國となり皇帝と稱することを得詔表を改めて國書となし歲貢を改めて歲幣となし且つ銀絹各五萬を減じ地界は元の通りである。然しながら其の他の外交禮は遂に悉く改めるこ

宋孝宗立て金宋の國際法を改む

平和の續く三十年

宋に學者輩出す

四夏と高麗とは金を德とす

とが出來なかつた。孝宗は金に對して屢詔を受けるときの儀式を改め且つ河南の地を返さんことを請うたけれども世宗は斷乎として許さなかつた。然し當時南北共に明君を出したので平和の風は穏かに吹き三十年餘は生民の肩を休めることが出來た。此の孝宗の時代こそ有名なる朱熹、陸九淵の如き學者が輩出して謂はゆる南宋學術の盛を極めたときである。

想ふに學者と政治家とを混同視せる支那人は孝宗の時代に是等の大學者を出して居るところからして非常に光榮ある時代となしたのであらう。然しながら事實上に於ては學者と政治家とは人物が違ふので學者必ずしも實際の政治に當つて甘く道るものではない。孝宗の時代には學者はあつたが國家の大宰相と云ふべきものは一人もなかつた。されば歴史家が賞揚するほど此の時代が積極的に光榮ある時代であつたか否かは疑問である。

孝宗に對して金の世宗も北方の小堯舜と稱せられ頗る賢明の聞わがあつた。世宗のとき西夏王の仁孝の國が亂れて姦臣が其の威を逞しくしたが世宗は仁孝を助けて之れを誅戮した。又高麗の明宗の邊將も叛いて金に降つたが世宗は之れを容れないで却て高麗に力を貸して誅滅させた。そこで高麗と西夏の二國は深く金の恩を感じ爾後八十餘年の間遂に金に叛かなかつた。當時金の領土は東は日本海より西は蒙古の西端に至り南は漢淮二水より北は臚朐水(ケルレン河)に亘つて居つた。然かも此の南北の二名君は共に我が紀元千八百〇九年を以て死んだ。

韓侂胄の僞學の禁

宋は孝宗に次いで光宗が立つたが馬鹿であつたので太后の女弟の韓侂胄は太后と圖つて憲宗を立てた。そこで韓侂胄は擁立の功を挾んで其の女を納れて皇后となし漸く不遜の志を懷いたからして當時の侍讀たりし朱熹は進講の際韓侂胄を惡しく言つた。そこで侂胄は大に怒つて帝に勸めて朱熹を止めた。のみならず再び朱熹の如きものが出て己れのことを帝に告げんことを恐れ遂に有名なる僞學の禁なるものを發した。僞學の禁と云ふのは朱熹其の他謂はゆる道學の門にあるものをば一切官府に仕へることを禁じたことである。かくの如く宋は韓侂胄の專權によつて多くの忠良を害して國勢は次第に衰へたが金も亦姦臣の跋扈などがあつて內部

の統一が緩んだのみならず空前絶後の強敵蒙古人が北方に興つて金の危きこと正さに風前の燈の如きものであつたからして韓侂胄は何か非常な功を立てゝ自己の地位を鞏くせんと欲し宋金四十年の平和を破つて我が紀元千八百六十六年に金を討つた。衰へたりといへども尚當時の金軍は宋軍に破られるには餘りに強かつた。そこで宋は又使を遣はして降參を願つたが金は宋の首謀者たるものゝ首を得て然る後に和議を結ばうと求めた。そこで皇后の楊氏は史彌遠と計つて韓侂胄を誅し以て和議を結んだ。其の條件は靖康の故事によつて宋金は伯姪の關係となり歲幣を增して三十萬となし別に償金三百萬兩を納め韓侂胄の首を函送して以て淮陝の侵地に代へた。

韓侂胄金を討つて敗す

宋は經學を以て優る

第三節　宋の學術と宗教

本章の初めに於て述べた如く宋は其の建國の初めからして盛んに文治主義を採用し頗る學者を尊敬したから他の諸朝に比すると學者の輩出することが甚だ多かつた。然り支那に於て最も學問の盛んであつたのは宋と相

對して唐である。此の唐の學と宋の學とを比較して見るに唐の方は文學を以て支那古今獨歩の地位を占めて居るし宋は經學を以て古今に絶して居る。前者は具象的の發表に巧みに後者は抽象的の探明に妙を得た。勿論宋代といへども其の文學が決して盛大でないとは云はない。然しながら宋に盛大であつたところの文學は唐とは相異なつて居つて唐が詩を以て鳴つたのに對して宋は散文殊に策論を以て鳴つた。唐に詩が盛んであつたのは官吏を採用するに多く詩の成蹟に由つたからである。之れと同じく宋朝は重もに策論を以て官吏を採つたからして其の身を立て志を天下に行はんと欲する經世家も單に利祿名譽を希ふ俗學者も共に日夜に鍛錬するところのものは試驗準備の策論であつた。だから其の文學の特徴は直ちに散文の上に表はれて此方面に多くの名手を出した。そして其の尊崇したところの流派は曾つて司馬遷などの唱へたところの古文辭である。無論古文辭復古の主唱者は之れを唐代の韓愈柳宋元に歸せなければならぬけれども然も之れをば熟練の極に達したところのものは宋の歐陽

宋は散文を以て鳴る

修及び蘇軾兄弟となさねばならない。彼の所謂唐宋八大家文の中で唐代の學者に屬するものは僅かに韓柳二家で其の他は多く宋代の學者の作である。かくの如く散文に於ては宋代は頗る唐代に勝るところがあるが然し詩に於ては遙かに其の後にあると言はねばならない。無論宋朝にも蘇東坡を始めとし歐陽修、黄山谷、陸游などの如き名手なきにあらずといへども然も是れ等の諸家を以て唐代の李、杜に比したならば其の間大なる逕庭があるのである。元來宋時代の學問には佛教談理の影響が甚だ多かつたからして學者の推理力はいやが上にも發達したが想像力に至つては之れが爲めに大に妨げられざるを得なかつた。是れ其の散文に長じて詩の發達の害せられた第一の原因と言はねばならない。

詩の發達せざりし理由

宋代の學者は獨特の學說をなす

一、經學　漢、唐以後の經學は所謂訓詁章句の間に跼蹐して戰々兢々として師傳を失はざらんことを努めたが宋儒に至つては之れと大に其の趣を異にし學者各自家の說を以て儒敎を解釋することを努め古人の註釋は採るに足らずとなし獨見獨想を以て眞理を得たりと心得た。だから宋代

諸家の學說は寧ろ之れを從來の儒家者流と同一に見ないで西洋哲學者が師授に關係せず各獨特の學說を發表したのと比するのが適當であらう。無論支那人の尙古主義は其の國民性と稱するも可なるものであるからして宋代の學者といへども努めて自家の學說をば堯舜禹湯文武周公孔子の道統を得たものと稱したが然しながら細かに宋儒の說いたところを研究して見ると必ずしも其れは孔孟の說いたところと一致して居る譯ではない。否、之れを純粹に學問として考へる時には宋儒の所說が孔孟の說くところより精微高遠に達して居ることは明かなことで後の學者が宋儒の學說が孔孟の學說に合不合の論をなして之れによつて宋儒の學說の價値を定めんとするが如きは頗る迂愚の甚だしいものと言はねばならない。學者の目的とするところは唯眞理にあるのである。其の說くところが孔孟の學說に合ふや否やは毫も顧みるに及ばない。若し宋儒の說くところが精微高尙で孔孟の學說よりも眞理を含むことが多かつたならば其れが孔孟の學說と合はないでも其の尊敬を拂ふべきは勿論である。しかし支那

宋儒も孔孟の說に附會せんとす

宋儒の學說は佛敎の影響を受くること大なり

人の尙古主義はさすがに其の學說の精微高尙を致したにも拘らず宋儒をして他くまで自家の說を以て孔孟の主旨に合するものとなさんが爲めに種々の牽强附會を敢へてさしたことは吾々局外者から見ると殆んど抱腹絕倒に堪へないことゝ言はねばならない。

宋の文學が之れを前代に比して精微高尙を致した所以のものは佛敎の影響が最も重もなるものであることは動かす可からざる事實である。佛敎は古來の哲學中其の精微高尙なることに於て歐洲の近世哲學と比較するに足るほどであるからして之れを研究するものは皆高尙なる推理力を發達した。無論六朝以來唐時代に及んで佛敎は盛んに支那本部に行はれ其の高尙精微なる學說は社會の上流に歡迎せられ輪廻轉生の說敎は下等社會の信仰の本尊となつた。有名なる韓退之の如きは其の身の流謫の難に遇ふのも顧みないで盛んに佛敎を排擊したが然し彼れの如き大家を以てすら其の排擊の文を讀むと實に抱腹絕倒の淺薄な考へを持つて居たとが分る。だから彼れ佛敎徒は韓退之等の排擊には殆ど一顧の價なしとした。

支那では道德以外の諸學には獨立の價値を認めない

然るに降つて宋代に至つては支那人の佛敎研究は頗る其の高遠の度に達し宋儒の多數は先づ深く佛門に入つて其の敎の根本を研究し飜つて之れを儒敎の解說上に用ひたのであるからして其の說くところが精微高尙を致したのみならず佛敎者に採つても一大勁敵たりしは明かなことで決して韓退之輩の敵對と同一の論ではなかつた。然し宋儒の說くところが高遠となるに從つて佛敎的臭味を帶ぶることが甚だしくなつたことは動かす可からざる事實である。

宋の經學は特に性理の學若くは略して理學と稱するのである。元來支那の學問は古より道德の一本槍で政治も經濟も將た歷史も一切の學問は皆此の道德から割り出して居る。無論道德は人生の目的と竝びに之れを遂する手段とを與ふるものであるからして其れが人間萬般の事に關係することは勿論である。されば西洋の學問に於ても道德が各種の科學と關係のあることを認むることは支那と同じであるが然しながら之れと同時に各科學には各其の研究の範圍と對象とがあつて獨立の價値あるものと認

めて居る。之れに反して支那では道德を除く外の諸學には殆んど獨立の價値を認めない、彼の純粹文學として單に人間の美想の發表を目的とせる詩歌ですら支那に於ては道德的束縛を免れないのである。故に支那の學問は凡べて道德の爲めに起つたものと言つて差支がない。今論せんとするところの宋儒の性理の學なるものも又畢竟一種の倫理學たるに外ならない。唯宋儒が從來の儒者と其の趣を異にするところのものは單に從來の儒者の如く實踐道德の方面のみに着眼せないで其の實踐道德の理論的基礎を研究した點にあるのである。無論實踐道德は其の之れを實踐する人性の如何に由つて大に其の敎を異にすべきものであるからして自然の勢、孔子以來の學者は其の實踐道德の基礎として性說の研究に多少の力を注がないものはなかつた。然かも宋儒以前の性說たるや何れも現象界にのみ着眼して未だ本體界に着眼するものはなかつた。宋儒に至つて高遠なる佛敎の影響はやがて性說をば本體界にまで波及せしめ、こゝに其の研究を頗る深遠高尙なるものとなさしめた。卽ち宋儒は實踐道德の基礎

宋儒の特色は實踐道德の理論的基礎を研究した點にある

たる性說の研究からして今日の哲學上に所謂人生問題及び宇宙問題にまで力を注いだ。否、宋儒の特色は殆んど其の宇宙問題の方面にあると云つても可いと云ふほどである。無論宋儒以前といへども支那の學者が宇宙問題に接觸したことはあるが然しながら概して之れを言ふと宋儒以前の學者の所說は殆んど空想的である。之れを宋儒の兎も角も論理の正徑を履み推理に推理を重ねて論明せうとしたところのものに比べると其の間大なる差異を認めざるを得ない。

宋儒の宇宙論卽太極說

宋儒の宇宙論は特に之れを稱して太極說と云つて可いのである。卽ち太極を以て宇宙論の解釋の關鍵となしたのである。此の太極說の盛んに研究せられたのは北宋の末から南宋にかけてゞあつて其の最も重もなる學派は濂洛關閩の四大派である。所謂濂洛關閩の四大派と云ふのは濂溪の周敦頤、洛陽の程顥、程頤、關中の張載、閩中の朱熹の唱へた學說を指すのである。然り、此の太極說の萌芽は早く旣に唐末に萌したのである、卽ち唐末より宋初にかけて生存して居つた華山の隱士陳摶と云ふものが初めて太

陳摶

極圖を作つた。此の陳摶の學派を承け傳へたものは卽ち河南の邵雍である。

邵雍

邵雍は世に康節先生と稱し皇極註說書を著はした。之に次いで太極說に最も功績を有するものは濂溪の周敦頤である。

周敦頤

周敦頤は太極圖、太極圖說及び通書の著述をなした人で太極圖說は天理の根源を探明し通書は太極の蘊奧を論じたものである。卽ち是れ等の書は畢竟宇宙の本體を以て太極となし此の太極に固有せる動靜二力を認め以て太極からして陰陽の二氣を生ずとなし其の陰陽二氣が互に消長變化して宇宙萬物を發生するとなしたもので此の考を基礎として道德の立論をなすのである。卽ち人間精神の本體を誠となし此の誠を本として凡べての道德を割り出すので其の邊は子思の中庸と關係して居るのである。

張載

周敦頤と同時に張載卽ち橫渠先生が出た。彼れは禮を貴び性を成し氣質を變化し聖人となることを以て諸生に勸めた。其の著述に正蒙、西銘、及び易說などの書がある。

程顥と程頤

程顥と程頤は周敦頤の弟子で二人は深く佛敎の研究をなして然る後に儒學の研究を初めたからして其の說くところは頗る深遠である。程顥は世に明道先生と稱し定性書を著はした。此の書は周敦頤の太極圖說と相表裏して宋の宇宙論を探明するに最も力あるものと云つて善い。程頤は程顥の弟で其の學は誠を以て本となし頗る究理を重んじた。彼れの著述は易傳、春秋傳及孟子解などである。初め唐の學者韓退之は初めて孟子を以て他の諸子と同一視すべきものではない。孔子に亞げる聖人であるとなしたが今や二程の學も此の孟子の研究に頗る重きを置いたので、こゝに至つて後世のものが孟子をば殊に孔子と並稱して孔孟と云ふやうになつたのである。然かも宋儒の性理の學なるものを集大成したものは朱熹である。

朱熹

朱熹は二程の後、數十年にして南宋に出でた宋朝第一の學者で其の學は程氏の傳統を承けて居る。彼れの學は要するに格物致知正心誠意實踐躬行にあるので其の著述は頗る多い。中にも易本義、詩集傳、四書集註、小學、近思錄、通鑑綱目などは後世を益するとの最も大なるものであつた。然しながら朱子の最も高遠なる學說は寧ろ彼れの語類、語錄などにあるとして善い。朱熹と同時に有名なる一學者があつた。其れは陸九淵である。九

陸九淵

淵は世に象山先生と云はれた人で其の兄陸九齡と共に性理の學を研究し努めて本源を究め頓悟を以て宗となしたからして其の說は禪宗に近いものとなつた。呂祖謙なるもの曾て當時の二大學者と云ふべき朱熹と陸象山とを介して共に江西の鵝湖寺に會合して學理の論辯をなさしめた。然かも其の論は合はないことが多かつたと云ふことである。元來朱熹は格物致知を以て初めとなし正心誠意をば之れに次ぐとする持論で彼れの言に前後を以て論ずれば知は前にして行は後なり。輕重を以て論ずれば行は重くして知は輕しと云つたことは正に彼れの學說を表明するものと言つて宜からう。然るに陸象山は正心誠意を以て初めとなし然る後に格物致知をなすべしとなしたものであるからして其の說の合はないのは當然のことである。要言すれば朱熹は客觀的の究理からして主觀の修養に及び陸象山は主觀の修養を先として客觀的の究理に及ぼす可きものとなしたものである。此二人の差異はやがて宋以後に二大學派の起る原因となつた。鵝湖寺の會合の後陸象山は又朱熹を訪ひ共に廬山五老峰下の白鹿洞書院に至り陸象山は朱熹の弟子に對して論語の講義をなしたが聞いて居るものは涙を流したさうである。此の時及び其の後も常に此の二大學者は互に書を贈つて論難研究をなしたが然し終生其の學說は合はなかつたさうである。

歐陽修

二、文學　さすがに盛大であつた唐朝の文學も五代より宋の初めにかけては頗る衰へた。然るに歐陽修出づるに及んで宋の文學は大に其の面目を一新した。彼れも初めは徒らに典麗なのみで實のない所の排偶文を作つて居つたが後、韓退之の文章を得てからは頗る之れを愛し寢食を忘れて古文の研究に耽つた。彼れの文章が如何に有力なものであるかは蘇軾の評語を見て知ることが出來る。蘇軾曰く歌陽子、道を論ずるは韓愈に似、事を論ずるは陸贄に似、事を記するは司馬遷に似、詩賦を以て李白に似たりと。彼れの作、止范司諫書、並びに五代史伶官傳叙論などは後世に有名なものである。歐陽修と並稱するに足る宋朝の文豪は三蘇である。三蘇と云ふのは蘇洵、蘇軾及び蘇轍を云ふのである。蘇洵は蘇老泉とも稱し其の文

章は頗る比喩に巧みで孟子に似たところが多い。老泉の長子を蘇軾卽ち蘇東坡となす。東坡は實に宋代第一の文豪である。否、支那古今最大の文豪である。彼れは其の品格に於て頗る尊敬を拂ふべき人物であつたのみならず博學宏才加ふるに諸藝に達し殆んど善くせないことはないと云つても善いほどである。中にも其の文章に至つては全く天禀で一たび紙面に對するときは滾々として毫も澁滯するところなく言として名句にならざるはなしと云つても過言ではない。彼れ曾つて自ら其の文を評して云ふには我が文は萬石の源泉の如く地を選ばずして皆出づべく、平地にあつては滔々汩々一日千里と雖ども難なし。其の山石と曲折するに及べば物に從つて形を附し然も見る可からざるなり。見るべきところのものは常に當さに往くべきところに往き常に當さに止まらざる可からざるところに止まる。斯くの如きのみ。其の他工といへども我又知らざるなりと。此の事は決して彼れの自負ではなく能く其文才を穿つて居るのである。彼れの作中最も有名なものは赤壁の賦、范增論、表忠觀碑など殆んど枚擧に

暇がない、其れのみならず詩に於ても變幻出沒殆んど鬼神も端倪す可からざる才を有し實に宋朝第一である。蘇軾の弟は卽ち蘇轍で兄の豪放宏才に對して弟は寡默恬淡の質を具へて居た。從つて其の文章も兄のは一瀉千里の勢を以て勝つて居るが弟のは法整練句を以て勝つて居る。彼れの作中有名なものは唐論、三國論、六國論などである。要するに三蘇中第一に數ふべきは大蘇卽ち蘇老泉と小蘇卽ち蘇轍とは之れに一歩を讓らなければならぬ。然しながら三蘇共に宋朝の特色たる論策を以て勝つて居ることは同一である。否、論策が宋朝の特色となつたのは三蘇の如き名手を出したからだと云つても可からう。此の他曾鞏及び王安石などは共に一代の巨匠たるを失はない。司馬光、朱熹、文天祥なども宋代の文學家として有名なことは人の知るところである。

前にも述べた通り宋朝は詩に於ては到底唐朝には及ばないのであるが然し其の中で最も名高いのは歐陽修、蘇東坡、陸游、天文祥などである。歐陽修の春日西湖の如き蘇東坡の石鼓歌の如き陸游の舟中對月の如き天文祥の

正氣歌の如き何れも人口に膾炙するところである。

三、史學　宋代に至つて支那の歴史は各種の形式を遺憾なく具備した。

紀傳體
新舊唐書

即ち紀傳體のみならず編年體の如き記事本末體の如き皆此のときに起つた。紀傳體で名高いものは唐書及び五代史である。唐書には新舊二つあつて舊唐書は五代のときに晉の劉昫等が之れを編修したが宋朝に至つて其の脱漏の多いのを見て又歐陽修が改めて編纂した。之れが即ち新唐書である。五代史にも新舊二つあつて舊五代史は薛居正等が編したところであるが其の後歐陽修も私かに五代史を撰した。之れが即ち新五代史である。

新舊五代史

新五代史は文章に於ては歐陽修の手に成つたものであるから舊五代史に勝つて居るが然し志類を缺いで居るから事實の點に於ては舊五代史ほど詳細なものではない、此の他紀傳體の歴史には宋史、遼史、金史などがあるが何れも名作とは言へない。次に編年體は司馬光の資治通鑑を以て唱首となす。眞宗の朝に司馬光が勅を奉じて拮据十九年、漸にして成つたもので、事實の正確なること、文章の壯麗嚴正なることは共に本書をして後世まで頗る重んぜられしめた。朱熹も亦道德を標準として孔子の春秋に似せて通鑑綱目を作つた、資治通鑑とは體裁を異にして居るけれども是れ亦後世の漢學者に喜ばれた書である。

編年體
資治通鑑

通鑑綱目

次ぎに紀事本末體は宋の袁樞の通鑑紀事本末が唱首である。其の體裁は一題目の下に其の題目に關する本末を悉く蒐錄したものであるからして前後を翻閲したりする煩勞を要せないので頗る讀史家に便利を與へた。此の書の外に紀事本末體の歴史には章冲の左傳事類始末、徐夢等の三朝國盟會編などがある。右に述べたところの各種の歴史は何れも政治や人物傳が重もで今日の歴史家が所謂文明史の材料たるべきものは現はされて居ないのである。即ち文物、制度、典章、禮樂、風土、民俗など社會の內面に關する部分のことは餘り記されて居ない。是れ等のことを主として集めたものは唐のときに杜佑の通典が出來たし宋に至つては有名な馬貴與の文獻通考が出來た。又鄭樵は通志を撰し王應麟は玉海を撰した。是れ等の書は何れも考證該博頗る史學に必要な書である。中にも通典、文獻通考、通志の三書は世に三通と稱し頗る重

紀事本末體
通鑑紀事本末

三通

太祖佛教を復活す

太宗も亦尊信す

眞宗之れを擴張す

名僧の出出

んせられる。

四宗教　佛教は五代の末に後周の世宗の惡むところとなり一大打擊を受けたからして一時衰へかけたが然し間もなく宋の太祖の尊信するところとなつて復活した。太祖は曾に寺を建て佛像を造ることを許したのみならず僧の行勤等百餘人を印度に遣はして佛教の研究をなさしめ又有名なる大藏經を印刷させた。其の子の太宗も亦佛教の尊敬厚く前後十七萬人の僧侶を度し譯經傳法院を建て天竺の僧をして盛んに經論を譯させたからして支那人の佛教研究には頗る多くの書籍を得た。眞宗も亦益其の業を擴張し翻譯四百十餘卷に及んだ。當時僧尼の數は四十六萬人を越わ就中禪宗は最も勢力を有して居たからして其の僧に懷璉、祖印などの如き有名な輩を出した。眞宗哲宗の世に至つては名僧の出づること益多く淨源は華嚴宗中興の祖となり慧龍は禪宗黃龍派の祖となつた。かくの如く名僧知識輩出したのみならず漢譯の經文が澤山出來たからして學者縉紳も好んで佛教を研究し僧徒と交ることを名譽としたことは我が平安朝

徽宗のときに一頓挫す

南宋の佛教

陳摶

のときのやうで之れを唐朝の學者が頻りに僧徒を排擊したのとは雲泥の差である。然るに徽宗のときに至つて道教を尊崇すること甚だしく寺院を改めて宮觀となし佛を稱して大覺金仙となし僧を稱して德士となし尼を女德士となすなど佛教に對して馬鹿氣たる干涉をなしたが間もなくして舊に復した。南宋のときに至つては國用が頗る困難であつたからして僧尼といへども一般人民と同じく丁錢を納めしめ又は僧牒を賣つて軍費となすなどのことがあつたからして僧徒の待遇が北宋のときより惡くなつたことは明かであるが然しながら佛教が一般人民に次第に弘布しつゝあつたことは動かす可からざることであらう。

道教は宋の太宗が華山の道士陳摶を尊崇したのに始まると稱せられて居る。然しながら陳摶は寧ろ太極說の元祖と稱すべきもので道教の祖となすことは如何と思はれる。無論彼れが玄默して脩養を努めたことは幾分か道教に似て居るが然しながら彼の言ふことは普通の儒學者と相異はない。曾つて宗玘等の問に答へて云ふには摶は山野の人、時に於て用なし。

又神仙黄白のこと、吐納養生の理を知らず。方術傳ふべきあるにあらず。假令白日上昇せしむるも又何ぞ世に益あらん。今聖上龍顔秀異天日の表あり。博く古今に達し深く治亂を極む。眞に有道仁聖の王なり。正に協心同德、化を興し治を致すの秋、勤行修錬此に出づるなしと。是れ等の言によつて見れば彼れが普通の道士と頗る其の撰を異にして居ることは明かで太宗は此の言に由り陳摶を重んずること益厚く希夷先生の號を與へた。

眞宗仁宗道敎を重んず

然るに其の後眞宗のときに及んで頗る道敎を重んじ尊號を老子に加へて玉清昭應宮を築いた。此の宮は頗る佳麗を極めたものである。帝のときに又張正隨に眞靜先生の號を賜はつた。之れより後道士に號を與へることが大に流行して英明を以て名高い仁宗ですら張乾曜に澄素先生の號を與へた。暗愚なる徽宗に至つては此のこと益甚だしく多くの道士に何れも先生の號を與へ玉清和陽宮を作つて老子の像を安置し道士の爲めに位階官職を置き後林靈素を尊信して之れに通眞達靈先生の號を與へ道士學を立てゝ道學博士を置き道史を修しなどして頗る道敎を奬勵して佛敎

徽宗道敎を擴張す

を抑へた。然し間もなく林靈素罪があつて退けられ徽宗が金の虜とせられるに及んで道敎の勢は次第に衰へ南宗に至つては少しも振はなかつた。

回敎

マホメット敎は回々人種が之れを奉じたからして支那に於ては之れを回敎と稱した。此の敎が支那に這入つたのは唐朝で彼のアラビヤ人の廣東地方に來往したときにあるであらうが然し未だ盛んに行はれるには至らなかつた。宋の初に至つてカシユガルの酋長布喀拉と云ふものが始めて之れを信じ其の部下も共に之れに倣ふたが後布喀拉がターキスタンを征して回々人種を虜にして歸つてより回敎は大に西域諸國に流布した。然し宋を終るまでは未だ支那本部には盛んにならなかつた。

第三編　近世史

第一章　元

第一節　太祖の蒙古諸部及び金との交戰

蒙古の發祥地

蒙古は唐時代に謂はゆる韋室の一部で女眞の北卽ちオーノン、ゲルレン二河の水源地なるブルハン山附近の地こそ實に蒙古族の發祥地である。其の初めに當つては代々遼及び金に支配されて居つたがカブルクが酋長となるに及んで兵を擧げて金に抗した。そこで金將兀朮は之れを征したが勝たなかつたので和を講じ我が紀元千八百〇七年を以てカブルクを蒙古國王となした。其の孫の也速該(イスケイ)に至つて勢俄かに强大となり頻りに近傍の諸部を略して居たが殊にタタール部と怨みが重なつたので遂に其の爲めに殺された。有名なる鐵木眞(テムジン)は實に也速該の長子である。也速

金との交渉

鐵木眞立つ

該の死んだときに鐵木眞の年は僅かに十三であつたからして蒙古の諸部落は共

十三翼の戰

鐵木眞金のチャウトクリとなる

に事を謀るに足らずとして大概離散したが鐵木眞の母が賢明な人であつたからして其の盡力で次第に諸部落を歸納せしめ次いで鐵木眞は一萬三千の手兵を率ゐて未だ從はない所の十三部三萬の兵とバルヂウナ平原に戰つて大に之れを破つた。是れが鐵木眞の勇名を表はす第一着の戰で此の戰をば十三翼の戰といつた。此の戰爭後鐵木眞の勢力は次第に土耳古、蒙古、タタール間に扶植せられゴビ沙漠以北クルレン河及びセレンガ河の間に於て南は沙漠北はインゴダ河畔に至るまで大に其の領域を廣めた。偶々タタール部が金に叛いたので鐵木眞は金と聯合してタタールの酋長を亡ぼした。そこで金は大いに喜んで鐵木眞をチャウトクリとなした。チャウトクリと云ふのは招討使のことである。當時鐵木眞の年は三十二であつた。此の時に當つて蒙古の近隣には乃滿部(アルタイ山麓一帶の地に割據せるもの)を最大として其の外に多數の部落があつて各一方に割據して居た。鐵木眞の世界征服の大業は實に此の諸部落を追討することに始つたので彼れは其の弱さうなところから次第に征服して遂に我紀元千

內外蒙古鐵木眞の手に入る

鐵木眞成吉思汗と稱す

アルタイ附近蒙古の有となる

西夏降る

八百六十四年を以て乃滿王を抗海(杭愛)山に逆擊して之れを斃した。之れより後內外蒙古の地は殆んど全く鐵木眞の領土となつたからして我が紀元千八百六十六年(土御門帝の時代將軍は實朝、執權は義時)諸部の酋長をオーノン河の源に會合して大汗の位に卽き成吉思汗と號した。時に年四十四。

乃滿部の敗るゝや其の王大陽罕の子クチユルクは餘衆を率ゐてイルチシユ河上に奔り勢ひが再び强くなつたが成吉思汗は亦之れを打ち破つたので餘衆の一部は遠くアラル海の方面に奔り一部はクチユルクと共に逃げて當時西方亞細亞の强國たる西遼に依つた。そこで亞爾泰山附近の一帶の地は悉く蒙古のものとなつた。次いで成吉思汗の鋒は西夏に向つた。西夏は當時內亂があつたので蒙古の軍に全力を注ぐことが出來ない。由つて其の王李安全は我が紀元千八百六十九年を以て降を請うた。之れが爲め蒙古の領地は天山附近よりイリー河の流域一帶に廣がつた。そこで成吉思汗は當時亞細亞の最大强國たる金に向つて我が紀元千八百七十一

年より全力を注いだ。

成吉思汗、金を侵す

時に金は永濟が位に卽いて使を遣はして成吉思汗に北の卽位を報じた。成吉思汗は永濟は惰弱で將士の信服を得ず、金の國勢は大に衰へて居ることを知つて居つたからして態ざと其の使節を辱かしめ永濟を罵つて以て戰を挑んだ。我が紀元千八百七十一年成吉思汗は其の子朮赤(ヂウチカ)・察合臺(チヤガタイ)・窩濶臺(オゴタイ)・拖雷(トルイ)を從へ道を分つて兵を進め先づ西京を拔き臨潢より遼河を過ぎ頻りに諸部を降して遂に居庸關に入り其の守將を走らせて中都(今の北京)に迫り河北河東の諸部を取つた。

金の領地は直隸山東の一部となる

恰も善し當時遼東の契丹は其の主に叛いて蒙古に降り又黨項は西方より金の境界を侵したからして金の諸將は爭つて成吉思汗に降り爲めに金の領地は直隸山東の一部になつて仕舞つた。

和議成る

そこで金は我が紀元千八百七十四年を以て和を蒙古に請ひ永濟の女及び童男女五百騎三千金銀綵帛各萬匹を贈つた。依て成吉思汗は一旦兵を退けて居庸關の北に出で悉く其の擒を返へした。かくの如く平和は成つたものゝ金は財政も困難だし兵も頗る弱くなつたからして蒙古に近いところの中都を守ることは困難であるとして遂に都を汴(當時の南京)に遷した。成吉思汗は之れを聞いて怒つて云ふには既に平和條約を結びながら都を遷すなどは是れ彼れに疑心があつて怨みを解かないからであると。由つて再び南侵を圖り破竹の勢を以て中都を陷ゐれ別軍の將木華黎(ムカリ)は金の遼西地方を降し北京以下を攻め取り又他の一將サムハは直ちに進んで汴京附近を侵略した。金は頻りに和を請うたが許さない。成吉思汗は木華黎を留めて征金都督となして太行の北は我れ自ら計略せう。太行の南は卿之れを計略せよと云つて北に歸つた。是れより木華黎は連年金の諸州郡を掠め我が紀元千八百八十二年彼れの死に至るまで少しも手を緩めなかつた。此に於て黃河以北一帶の地は蒙古の所有となり金は僅かに東黃河を阻て西潼關を扼して以て僅かに自衛するに止まるに至つた。

成吉思汗金を再征す

黃河以北蒙古領となる

第二節　太祖の征西及び西夏の滅亡

西遼の建宗

太祖征西のときに當つて西方に二大强國があつた。それは西遼と花剌子

金に報復せんとして果さず

模とである。前にも述べた通り契丹の滅亡した場合に天祚帝の一族であるところの耶律大石は餘衆を率ゐて陝西省の北西地方に入つたが此の土地は元來遼の版圖であつたからして其の人民は喜んで之れを迎へて共に土耳古方面に向つた。こゝに於てウイグル、ホラズムの諸國を從へゴビ砂漠と西蔵、西比利亞の間に國を立て居をベラサグンに定め佛教を以て國教となし大に國家の豐富を計り將さに金に向つて報復の軍を起さうとして間もなく歿した。是れが西遼の德宗である。孫の天禧帝が親政の時代に彼の乃滿國の最後の君の子クチユルクは西遼に投じたのである。當時西遼は其の勢力が振はなかつたときであるからクチユルクが乃滿やメルキの餘衆を連れて來たのを大に喜びクチユルクに妻はすに公主を以てした。

クチユルクは西遼を亡ぼす

然しクチユルクの勢力が強大となるに及んで彼れは西遼の國を奪はうと欲しホラズムの君である所のモハメツトと謀を通じ遂に西遼を挾擊して之れを亡ぼした。西遼は建國よりこゝに至るまで僅かに四世八十八年である。時に我が紀元千八百七十二年。

セルジヤツク、トルコ帝國の興廢

クチユルクと西遼を挾擊したホラズムは其の初め西遼に臣服して居たが然し當時に於ては最早西方亞細亞の最大强國となり其の領土は頗る廣大なものであつた。元來ホラズムは元セルジヤツク、トルコ帝國の敗軍の地に興つたものであるからしてこゝにホラズムに付いて述べる前に一言セルジヤツク土耳古のことを述べねばならぬ。セルジヤツク、トルコ家の始祖をセルジヤツクと云ふので其の種族は突厥に屬しブハラ附近に居を占めて居た。中央亞細亞の一時騷擾したときに乘じて漸く其の領土を廣めセルジヤツクの孫トグルルのときに至りホラサンの地を占領し都をニシヤプルに定めた。ときは我が紀元千六百九十七年である。其れより彼れは兵を西に出しアラビヤ帝國の一首府バグダツドに至り其のハリフア（教首）に命せられてマホメツト教保護者の稱號を得た。其の子アルスランに至つて益領土を西に廣め小亞細亞に追つて東羅馬帝國のロマヌス王と交戰し大に之れを擊破して多額の償金を得た。此のアルスラン及び其の子のメリクシヤの治世は實にセルジヤツクトルコ家の最盛時代で其の領地

メシユチギンホラズムの主となる

モハメットクチコルクと共に西遼を亡ぼす

クチユルク回教を禁じて國民叛き遂に蒙古軍に殺さる

は東は葱嶺を越ゑ西はアラビヤに至つて居つた。然し紀元千七百五十二年にメリクシヤの死後領土が大に分割せられたので國運漸く振はざるに至つた。當時セルジヤックトルコ家の兵馬指揮官であつたヌシユテギンは此の領土分割に際してホラズムの地方を得た。ヌシユテギンは突厥種族より出たものであるが其の後勢の強大となるに及んで次第に獨立を圖つた。其の子孫のテキシユに至つて遂にセルジヤックトルコ家を亡ぼしてペルシヤを一統し西方亞細亞に號令した。我が紀元千八百六十年テキシユの子モハメットがホラズム王となるに及で深く歳幣を西遼に納めることを恥ぢさてこそ前に述べたやうにクチユルクと東西相應じて西遼を亡ぼしたのである。其の結果モハメットはシールダリヤ河以南の地を奪ひ其の以外の西遼の領地は悉くクチユルクの手に落ちた。

クチユルクは既に西遼の國を奪つたからして其の勢に乘じて蒙古を討ち以て前敗の怨みを報ひやうと欲したが彼れは元來景教信者であつたからして己れの領地に盛大であるところの回教を嚴禁した。そこで國民が服

成吉思汗の領土西遼の故土に及ぶ

ホラズムハ中央亞細亞全體を領す

せないで內部の統一が缺けた。だから哲別の軍が來て回教禁止の令を解くや國人は悉く蒙古軍に降りクチユルクはバタクシヤンに逃げたが遂に殺された。ときは我が紀元千八百七十八年である。是に於て成吉思汗の領土は西遼の故土にまで及びカシユガル、ヤールカンドなどの人民は元來が實業的人民であるからして回教の信仰を許されてより農工商の業に勉勵し蒙古地方の產物を以て支那、印度などの產物と交換し頗る繁榮を致した。而して當時成吉思汗の領土は西の方直ちに境土をホラズムのサルタン、モハメットの國に接したからしてこゝに蒙古とホラズムとの交涉は勢ひ避けることが出來なかつた。當時のホラズムの領地は東北はシルダリヤ河より東南はインダス河に至り北はアラル海及びカスピアン海より西北はアヂエルバイヂアンに至り西隣はバグダッドで南は印度洋に瀕して居た。だから中央亞細亞の殆んど全體はホラズムの領地であつたのである。そこでモハメットは其の國勢の盛んなるに乘じてバグダッドの都を攻めやうとしたが蒙古が我れに向つて進軍して來るのを聞いて之れを中

モハメット蒙古の使を殺す

成吉思汗の征西

止した。初めモハメットのブハラにあるや成吉思汗の使者が來て云ふには今より我れ汝を以て最愛の子となさうと。當時の外交上より云へば父子の關係と云ふのは卽ち君臣の關係と云ふ意味であるからモハメットは喜ばない。時に恰も蒙古の隊商が數百人ホラズムに這入つて來たからモハメットは之れを以て蒙古の間諜となし悉く殺した。此の報を得たる成吉思汗は大に怒り山上に昇つて祈禱すること三晝夜、神明の助けを借つて以て仇をホラズムに報せやうと誓つた。然し當時はクチユルクがまだ亡て居なかつたからして成吉思汗は先づ使を遣はしてモハメットの罪を詰問した。モハメットは此使者をも殺して堂々兵備を張つて蒙古軍の來るのを待ち受けた。間もなくクチユルクは死し又征金のとはムハリに委托したからして我が紀元千八百七十八年成吉思汗は大に諸子諸將を集めてクリルタイを開き以て征西の軍議を凝らし金山以西の險路を開拓して新たに軍用道路を作り十分の準備を整へて翌年西域に向つて親征した。六十萬の大軍は先づイルチシユ河源の地を發し金山を越へ砂漠を渡つて陰

蒙古軍を四分す

モハメット逐ひ殺さる

成吉思汗ヂエラルエッヂンを奴隸王朝に逐ひ凱旋す

山に攀ぢ上り遂にイリー河に達し其れより其の附近の諸城を拔きてヲトラル城に達した。由つて軍を分つて四となし第一軍はチャガタイ、オグタイの二將之れを指揮してヲトラル城に向ひ第二軍は右翼であつてヂユチ之れに將としてヂエンドに向ひ第三軍は左翼であつてツルイ等將となりベナントに向ひ第四軍は中軍で成吉思汗自ら之れを指揮し直ちにブハラ(卽ちホラズムの首府)に向ひモハメットをして外援なからしめんと謀つた。

是等諸軍の向ふところ敵なくブハラ、サマルカンド相次いで陷ありチニベ、スプタイの二將はモハメットを逐うてカスピアン海に至り遂に其れをして湖中の一小島に窮死せしめた。然しモハメットの長子ヂエラルエッヂンは逃れてガズニに退いた。此間にヂユチはホラズムの各地を平定しルツイはメルプ、ニシャプル、ツラツトの各地を陷ゐれ以てホラサン地方を平げヂユチを除くの外他の諸將の兵は成吉思汗に合した。そこで成吉思汗は更に行軍してヂエラルエッヂンを逐ひヒンヅークシユ山脈を越て印度に入りインダス河畔に至つてヂエラルエッヂンに迫つたからヂエラル

チエベ等露西亞を討つて歸る

太祖又西夏を滅ぼす

エッヂンは單騎デーリに走つて奴隷王朝に投じた。そこで成吉思汗は凱旋の途に上つたが恰も善しブハラに於てチエベ、スブタイの二將が深く露西亞に進軍して南方露西亞を討平して凱旋するのに出逢つた。蓋し二將はさきにモハメットを討滅して亞細亞に於ける目的は達したが更に遠征して波斯の各地を平定し猶も進んで當時南方露西亞に割據して居つた各國の連合軍を破つてクリム地方に入り我が紀元千八百八十三年には露西亞の東北ブルガルを侵し轉じてカスピアンの北岸に現はれキリギス高原を過ぎて歸つて來たのである。此の征西に於て蒙古の領地は內外蒙古より滿洲、支那の北半部、天山南北路、中央亞細亞、及び西北亞細亞の一部竝びに歐洲の幾分までをも其の版圖となした。

蒙古の太祖は既に其の西征より凱旋したが此の時に當つて西夏の民は此の方面に當つて居つた蒙古の大將ムハリが死んだ後幾分か不穩の狀態を呈したから太祖は自ら之れに向つて遂に西夏を討滅した。時に我が紀元千八百八十七年である。李元昊が西夏の國を建てゝよりこゝに至るまで

西藏恢柔の困難

百七十年餘りである。かくの如く西夏の討滅は頗る容易なものであつたが然し西藏を中心とせる西夏の國は當時既に佛敎を以て國敎となし其れが爲めに人民の信仰力は非常に堅固なものであつたからして之れを懷けると云ふことは大變困難であつたらしい。即ち現今といへども西藏は殆んど世界の一不思議國であるが其の狀態は成吉思汗の征討の當時より既に存在したのである。

太祖崩ず

太祖は既に西征の目的を達し今又西夏を亡ぼしたからして是れより勢を專らにして先づ金を侵し然る後に宋を亡ぼさうと志した。然るに太祖の軍が金を侵さんとて六盤山(甘肅省)に至つたときに太祖は病に罹つて六十六年を一期として世界征服の目的を有したる大英雄は憐れ一杯の土と化した。實に我が紀元千八百八十七年のことで恰も我が國では後堀河帝の時代執權は泰時であつた。太祖崩じて蒙古の親族及び諸將はクリルタイを開き其の結果として第三子のオグタイが位に卽いた。之れが蒙古の太宗である。之れと同時に蒙古の廣大なる領地は大凡そ四部に分割せられ

領地四分す

た。即ち太宗はイミル河流域地方の豐饒の國を得、長子のヂユチ、はアラル湖北一帶の地イルチシユ河の上流などの地を得第二子のチヤガタイはカイヤリク、ウヰグールの故都よりヂフン河の岸に至るまでの地を得、第四子ツルイは蒙古發祥の地即ちハラホリム山とオナン河源との間の地を得た。

蒙古内部統一は耶律楚材の功である

太祖及び太宗の時代に當つてかくの如き廣大の地の内治の責任を帶びて其の功を着々奏したところのものは即ち有名なる耶律楚材である。楚材は元遼の遺族で太祖がムハリをして金の諸郡を攻め降させたときに來附したものである。元來蒙古は其の目的が世界の征服にあつたからして常に軍事にのみ專らにして進取を是れ事とし諸國を征略して其の降して得たところの國々は皆之れを其の功勞ある將士に與へて以て將士の勇氣を皷舞したからして一部一社の人民は各直接に其の主人とするところのものを異にし恰も封建諸國の幾多に分割せられて居るやうな狀態で全體の統一を圖る上に付いては頗る不便であつた。だから折角領土を擴張しながらも其の領土相互の間の關係は割合に薄弱なものであつた。其れを

ば兎も角も統括して一定の賦稅を徵收するの策を立てたのは實に楚材である。又諸道の官符の如きも其の初め將校は各自ら符印を造り爲めに諸將の僭越を來たしたが楚材は又式によつて一定のものを鑄造し以て之れを防いだ。此の他或は交鈔を發して貨物の流通に便するなど殆んど楚材一人の手に成つた。

蒙古軍の强盛なる原因

一、蒙古の男子、戰鬪を好みしこと

古來國を建つるもの其の數少なからずといへども蒙古の如く破竹の勢を以て其の領土を擴張したものは恐らく他にないであらう。蒙古の軍が何故にかくの如く强盛であつたかは無論種々の原因があらうが其の第一に數ふべきものは蒙古人は婦人をして全く家政料理に當らしめ男子は少しも内顧の憂ひなく其の主とするところのものは狩獵と騎射とのみである。即ち蒙古の男子は悉く戰鬪準備に其の生涯を供したもので其れが今日の如くに法律を以て强制するのではない。悉く自ら好んで此の戰鬪準備に走つたのである。換言すれば彼等は狩獵や騎射を以て唯一の娯樂となしたのである。されば戰爭は彼等に取つて最も快樂の一事で決して止む

なくして出づるものではない。太祖が曾て群臣に對して人生に於て何が一番樂しいであらうかと尋ねたら或るものは曰く名鷹を肱にし駿馬を控し華服を御し暮春の天出でゝ野に狩りす。之れが一番樂しいと。或るものは曰く鷹鶻の空より飛禽を拇擊するや打ち落さなければ止まない。之れを凡に倚つて見るのが人生の最も愉快であると。或るものは曰く圍檻の中に乘獸驚突の狀を見るのが最も愉快であると。成吉思汗は曰く然ら ず人生の樂しみは仇敵を殲滅するとこ樹の根を拔くが如く其の駿馬に乘じ其の妻女を納れて以て後宮に充てる是れが最も愉快であると。是等諸將の云ふところ各多少の相異はあるもの、彼等が征戰を以て最も愉快とな すの點に於ては相一致して居る。即ち支那本部の人民が文章を喜び軟弱なる遊樂に人生の快樂を感ずるとは全く反對である。此の外蒙古の軍は號令頗る嚴峻で隊列運動に適して居つて或る團隊の下には各長があり。其の長の命令は絶對的のもので之れに違背することは出來ない。かくの如きわけからして其の軍が頗る强かつたので加ふるに騎射に長じて居る

二、號令嚴峻隊列運動に適したこと

三、騎射に長したこと

蒙古軍は戰爭の際には皆一人數馬を從へ一馬勞れる時は他の馬に乘り換へると云ふ風であるから其の進擊の速きこと實に疾風の如く且つナポレオン第一世と同じく蒙古軍は專ら敵國の糧に依るの主義を採り爲めに懸軍萬里の場合にも少しも兵食運轉の爲めに不便を感ずることはないのみならず年々戰鬪にのみ從事しても本國の財政困難を來たすことはなかつた。以て蒙古軍の强盛であつたことを證するに足るであらう。又蒙古に獨特の大集會がある。之れを稱してクリルタイと云ふので此のクリルタイは王族諸將は素より各部の酋長などを召集して開くので此のクリルタイの選擧にあらざれば蒙古の大汗となることは出來ない。太祖が崩じて長子次子を捨てゝ第三子の太宗が位に卽いたのは卽ち此のクリルタイの結果に由るのである。此のクリルタイは曾に大汗の推戴をなすばかりではなく國家の大事も之れを議したのである。

四、糧は敵に依つたこと

五、合議制を採つたこと

第三節　太宗の南征と拔都の西征

太宗、金を征す

太宗は太祖の遺志を奉じツルイ以下宗室諸將に將として征金の途に上つ

た。太宗の軍は陝西に入り次いで潼關を降し長驅して汴京に向つたが城兵が堅守して降らなかつたから使を遣はして金に降參を勸めた。そこで金も人質を送つて之れに應じ蒙古軍は一旦退却したが金の軍兵が蒙古の使者三十餘人を殺したに拘はらず金帝が其の罪を糾さなかつたからして和議は又絶ゑた。此の時に當つて汴京は糧食は盡きたし兵士は弱つて居つたからして止むなく金帝は汴を捨てゝ河北に走つた。初め蒙古の太祖の將さに死なんとするや遺言して云ふには金の精兵は潼關にあり南は連山に依り北は大河に限られて居る。だから俄かに之れを破ることは困難であらう。そこで我れは直ちに太梁を突くのがよい。然る時は金は必ず急に兵を潼關より召すであらう。然し數萬の軍士を以て千里の遠きに趣き救ふと云ふことは徒らに人馬の疲弊を來たすのみであるからして我れは之れを破ることは容易であると。此の遺言に因んで太宗は使を宋の方に遣つて金を挾擊せうと議した。そこで宋の朝臣は皆蒙古に與みして復讎の戰爭をすることに贊成したが獨り趙范は之れに反對して云ふには宜

太宗、宋と金を挾擊せんとす

金、宋に連合を求む

宋遂に元と連合して金を亡ぼす

和海上の誓ひ(宣和は徽宗の年號で徽宗のとき金と約して遼を挾擊したことを指すのである)は其の初め甚だ固かつたが遂に却つて禍を招いた。だから今回も大に之れを鑑みねばならないと。然し理宗は從はないで使を以て挾攻のことを諾し蒙古の事成つたならば河南の地を宋に與へることを以てした。そこで宋は其の將の孟珙(モウキョウ)を遣つて蒙古と挾擊の實を表はした。依て金帝は蔡州(河南省)に逃れ兵勢は一時又稍振つた。時に金主は使を宋に遣つて兵食を借らうとして云ふには蒙古は既に國を亡ぼすこと四十。さきに西夏を亡ぼして次いで兵を我れに向けた。我れが亡びたならば其の次ぎは必ず兵を宋に加へるであらう。唇亡びて齒の寒きは自然の道理であるから此のところを能く考へて蒙古との連合を解き我れと連和したならば是れ却つて宋の爲めになるであらうと。然も宋は之れを許さないで蒙古と連合して金を圍んだので金は遂に亡びた。是は我紀元千八百九十四年である。金はアグダが帝となつてから九世百二十年で亡びた。」さて太宗は金を亡ぼして凱旋の途次支那の技術家を携へ歸つて大に新都

太宗チルツハリクに都す

高麗元に降る

を營んだ。之れをオルツハリクと名付けたが然し世間にはハラホリム(和林)の舊名が能く知られて居る。

太宗は既に金を亡ぼしたからして力を專らにして大に西征の師を發せやうとしたが此の時に當つて東方に高麗が離叛したので先づ之れを平げることにした。高麗は之れよりさき叛服常なく屢蒙古の意に悖つたからしてこゝに於て太宗はクリルタイの決議によりフチウンを大將とし蒙古と支那との連合軍を作つて高麗に攻め入らしめ遂に京城を陷ゐれた。高麗の高宗は江華島に逃れたが我が紀元千九百〇一年遂に降參して入貢を約した。

太宗、バツに歐洲を征せしむ

バツの遠征に先立つこと四年。前に述べたゼラルウツヂンは各所に漂泊した結果遂に志を得ずして敗死しホラズム國の王統はこゝに絶滅し西方亞細亞は全く蒙古の領土となり又東方に於ては強大なる金も既に滅亡したので蒙古の太宗は今や大軍を率ゐて自ら歐洲を征服せうとしたが衆の諫めるところとなつてヂユチの次子バツを以て己れに代つて征西軍の總督となしスブタイを監軍とし總軍五十萬を以て我が紀元千八百九十六年遠征の途に上つた。其の翌年はブルガルの國都を燒夷し次いでリアザンを陷ゐれ露西亞のモスコー城を取り(モスコー城は當時建立後僅に百年未だ今日の如き大都會ではなく頗る小都會で守備の道具も亦備はつて居なかつた)次いで當時北露西亞の大都會であつたところのウラジミールを陷ゐれ之れに近接せる大都邑十四ヶ所を下し更にシタの戰に於て露西亞の勇將を斃しノブゴロツドに進んだが此の邊は沼澤が多く猛獸が澤山で行軍に頗る不便を感じたから突然東南に退きボルガ河岸に達してキプチアツクの酋長を攻め殺し以て其の軍士を降し各所に轉戰の後有名なるキエフを圍み謂はゆる矢は天を蓋ひて暗く鎗は相接して折ると云ふが如き歐亞兩國民の大激戰をなし遂に其の守將のドミトリーを擒にした。當時のキエフは實に南露西亞の大都會で其の美觀は決して今日のキエフの比でなかつたとのことである。かくの如くして蒙古軍は露西亞の大部分を征服したからして進んでポーランドに這入つた。當時のポーランドは國勢頗

キエフの戰

ワールスタットに歐洲連合軍を破る

る振はなかつたからして蒙古軍は頻りに進んでクラカウを陷れ國民は皆ハンガリー或は獨逸地方に逃れた。そこで蒙古兵はシレジヤに入りオーゼル河を渡りリーグニッツの西南ワールスタットに於て歐羅巴の連合軍と激戰し大に之れを破つた。此の連合軍にはゼルマン軍ポーランド軍シレジヤ軍が含まれて居たので頗る鞏固なるものであつたが蒙古軍の鋭鋒に適することが出來なかつた。實に我が紀元千九百〇一年である。其れより蒙古軍はモーヒヤを扼しボヘミヤ、オースタリヤに至つた。又別に將を發してルーマニヤ、トランシルバニヤを平定し再び相會合して全軍ハンガリーに入りマジヤルンの王ベラ第四世とブダペスト附近のサヨー河畔に戰つて之れを擊破し遂にダニューブ河を渡つてストリゴニュームを攻めた。此の城が未だ陷ゐらないときに太宗が死んだと云ふ知らせが來たので蒙古軍は師を返へした。若しも此の時太宗の訃が來なかつたならば想ふに今日の歐羅巴全洲は蒙古軍の馬蹄に全然蹂躙されたであらう。

サヨー河畔の戰

太宗の訃により師を返す

第四節　忽必烈の南征と旭烈兀の西征

憲宗立つ

蒙古の太宗は我が紀元千九百〇一年を以て死し子の定宗が次いだが僅かに數年で又崩じ其れから後千九百十一年憲宗が卽位するに至るまでは蒙古の王室に王位繼承の紛擾を生じ之れが爲めに宗室離叛の萠しを生じた。

さて憲宗は卽位の初め弟の忽必烈に命じて漠南を統治せしめ府を金蓮川(直隸省)に開いた。依つて忽必烈は隱士の姚樞を召して顧問とした。姚樞は數千言の書を奉り初めに帝王の道と治國平天下の大法とを述べ次いで修身、力學、尊賢、親親、畏天、愛民、好善、遠佞、の八目を立てゝ細かに論じ且つ時弊を救ふの法三十を以てした。忽必烈は其のイを奇とし重く之れを用ひた。姚樞が又云ふには今土地、人民、財賦の權を悉く王が之れを有せられたならば天子はなすことがない。然るときは後に至つて必ず之れを問するものがあるであらう。だから王は只兵權のみを持し他のことは有司に任せられるのが宜からうと。忽必烈又之れに從つた。忽必烈は姚樞の言に由つて經略司を汴に置き史天澤等を遣つて唐鄧などの州に屯田せしめ以て此邊一帶の實業と軍事とを合せて治めさせた。我が紀元千九百十三年

忽必烈姚樞を重用す

忽必烈、大理國王を擒にす

憲宗は忽必烈、ウリアンカタイを以て大將となし三道より進んで大理國を攻めさせた。大理は唐代の謂はゆる南詔である。二將は臨洮より進み山谷を往くこと二千餘里、楊子江の上流なる金沙江に至り進んで大理城に迫つて大に其の兵を破り王を擒にした。こゝに至つて大理國は亡びたからして忽必烈は其の近傍を略して進んで吐蕃に攻め入つた。吐蕃は早くからして佛教に歸依し唐の時代には其の威令四方に行はれ使を印度に遣はして其の高僧を招いたが蓮華生上師は多くの陀羅尼、秘密宗法を齎らして吐蕃に入り有名なる喇嘛（ラーマ）密教の一派を起した。喇嘛と云ふのは無上と云ふ意味である。此の教が流行するに從つて喇嘛の勢力は次第に增長して君主を凌駕するに至つた。吐蕃王の中には之れを抑壓せうとして弑せられたものすらある。蒙古が新たに起つた際には此の喇嘛の威命は殆んど吐蕃を蔽うて居つたが忽必烈の吐蕃に入るや至るところ降服せざるなく由つて忽必烈はウリアンカタイを留めて未だ降服せないものを攻めさせた。此のときからして喇嘛教は蒙古に入るの端を開いた。ウリアンカタイは吐蕃から進んで近傍の諸蕃を略し遂に西南夷を悉く降附し五城八府七縣と蠻部三十七とを得た。そこでウリアンカタイは尙も進んで交趾に入り使を遣つて之れを降さうとしたが皆捕へられた。由つて兵を進めて頻りに交趾人を破り其の王は海島に奔つた。が然し蒙古軍は暑熱の甚だしい爲めに僅かに止まること九日で師を班へした。時に我が紀元千九百十八年である。

交趾征伐

フラーグの西征

阿剌比亞の征服

憲宗はかくの如く一方に於ては忽必烈に命じて南征せしむると同時に他方に於ては次弟フラーグをして西征させた。フラーグの西征には二つの大きな目的があつた。其れはイスマイル教（マホメット教の一派である。）徒の誅滅とバクダッドの阿剌比亞政府を征服することである。當時蒙古の威勢に從はなかつたものは希臘帝國、埃及及びバクダッドの阿剌比亞政府ばかりであつた。そして波斯地方にはイスマイル教徒が跋扈して居つたからして憲宗は第一に之を平定せうとした。千九百十三年フラーグはハラホリムを出發しサマルカンドを經てアムーダリヤ河畔に出で波斯總督

のアルグン以下ホラサン諸侯の來謁を受け由つて彼等をしてムラヒダ征伐に助力せしめ遂にイスマイル教徒を平げてバグダッドの阿剌比亞政府に向つた。我が紀元千九百十七年フラーグは先づ使をバグダッドに遣はして降を諭したが彼れは内亂があつて危き時であつたにも拘らず之れを拒んだ。由つてフラーグは道を分つて兵を進めバグダッドを圍んだ。我が紀元千九百十八年城は遂に陷ぬつてハリフアは殺された。フラーグは其れよりシリヤの諸地方の征服に從事しアレポを圍んで居るときに憲宗崩御の報に接したので東歸の途に着いた。

忽必烈、頻りに賢臣を用ふ。

憲宗、宋を攻む

第五節　宋の滅亡と世祖の南征

忽必烈は吐蕃を討つて歸つてより姚樞、廉希憲、許衡などの賢臣を用ひて頻りに文治を敷き又劉秉忠を舉げて帷幄の臣となした。そこで忽必烈の權勢は隆々として揚つたので或る人が忽必烈を憲宗に讒した。之れが爲めに忽必烈の計畫は一時頓挫した。然るに我が紀元千九百十七年に憲宗が宋を討滅せんと謀るに及んで忽必烈は再び用ひられた。憲宗は弟のアリクブカをしてヒラホリムに留守をなさしめ自ら將として南侵を計つた。ウリアンカタイは南より湖南地方を侵し憲宗は四川省の合州を圍んだ。ところが守將の王堅が力戰して之れを防いだので蒙古軍は志を得なかつた。時に憲宗は軍陣の中に享年五十三で死した。當時忽必烈は其の兵を盡くして既に淮水を渡り湖北の鄂州を圍んで居つたが宋は賈似道を遣はして之れを救はせた。忽必烈は之れを攻めること頗る急であつたので賈似道は大に恐れて竊かに宋京を忽必烈の陣營に遣はし臣を稱して以て歳幣を納めやうと請うた。忽必烈は之れを許さなかつた。ところへ憲宗の死んだと云ふ報知が來た。そこで賈似道は再び宋京を遣はして和議を請うた。此のときに當つてハラホリムに留守をして居るところのアリクブカが諸將に擁立せられて憲宗に次いで帝となつたと云ふことを聞いたからして忽必烈は郝經の謀により腹背敵を受くるの非を悟り由つて宋の和議を許した。其の結果賈似道は宋が蒙古に對して臣を稱し江南の土地を割き歳貢銀絹各二十萬を納めることを約した。かくて蒙古の軍は退いた

宋の賈似道忽必烈により和を請ふ

アリクブカ擁立せらる

和議成る

忽必烈大汗となる

からして賈似道は此の屈辱的の平和を秘し上書して諸國の大捷を言上した。帝は之れを信じて大に賈似道の功を賞した。是れより賈似道の勢は朝廷に跋扈した。間もなく忽必烈は我が紀元千九百二十年を以て開平(カイピン)(内蒙古)に至り自ら大汗の位に上り郝經を遣はして宋に前約を實行することを迫つた。賈似道は謀が漏れることを恐れて郝經を捕へて歸國を許さなかつた。間もなく忽必烈アリクブカに勝ち都を燕京に遷して之れを大都となし開平を上都となして再び宋を討たんことを謀つた。時に宋は理宗既に崩じて度宗位に即き賈似道の專權益甚だしく國勢益振はなかつた。忽必烈は宋の降將の劉整の謀に從つて宋の猛將呂文德を欺きアヂウ等に命じて襄陽を計略せしめ次いで史天澤に兵を授けて益襄陽の攻圍軍を助けた。宋は張世傑、夏貴、范文虎などの諸將を遣つて襄陽を助けさせたが皆破れた。そこで其の弟の呂文煥は遂に蒙古に降つた。之れより先き我が紀元千九百三十一年蒙古は劉秉忠の請に由つて國號を元と稱し賈似道の盟約に背いたことゝ使を捕へたことを責め伯顏(バヤン)を大將として先鋒たらしめ別將のボラカンを淮西に出でさせ劉整を騎兵に將として進ませた。時に賈似道は罪を以て職を免せられ宋は勤王の士を召し文天祥や張世傑などを得たが千九百三十四年にはバヤンの軍は遂に建康に入り張世傑等は殊死して之れを防いだが防止することが出來なかつた。元軍は遂に江を渡り水陸竝び進んで臨安に會せやうとした。ときに文天祥等は尙主戰論を主張したが陳宜仲等の朝臣が從はないで元に降つたからして元の兵は悉く臨安に入り當時の宋帝恭宗及び理宗度宗の二皇后を捕へて北に歸つた。こゝに於て宋は事實上に於ては既に亡びたが然し陸秀夫、張世傑、文天祥などの忠臣は頻りに殘卒を率ゐて各地に轉戰し以て恢復を計つた。然かも厓山(廣東省)の役に遂に元の大將張弘範の爲めに根本的に打破されて陸秀夫は帝を負ひて海に投じて死し張世傑は占城に赴かうとして舟が覆つて死した。又文天祥は之れよりさき既に五坡嶺で捕へられた。宋は十八世三百二十年で亡びた。實に我が紀元千九百三十九年後宇多帝の弘安二年である。

事實上宋亡ぶ

宋の滅亡

日本を征して失敗す

世祖はかくの如く宋を亡ぼしたばかりではなく高麗をも全く其の外藩となし次いで之れを介して我が日本を從へやうとして失敗したことは我が國の歴史を見れば明かである。又之れより先き蒙古が大理國を降して雲南の地を得たときに其の隣國に緬國があつたが次第に勢を得遂國を略し世祖が朝貢を促したけれども應せなかつた。そこで元は兵を遣はして之れを討つたが暑氣甚だしき爲め一旦軍を返へした。我が紀元千九百四十三年サンクタルを遣はして再び緬國を征しイラワヂ河に沿うて緬國に入り遂に其の國都を陷ゐれた。そこで緬王は歳貢を約して降を請うた。世祖は又交趾の南の占城國に使を遣つて入貢せしめやうとしたが命を拒んだので我が紀元千九百四十二年に軍を發して之れを討じた。然し軍中疫病が起つたので元軍は大敗した。山つて世祖は大に怒つて紀元千九百四十七年を以てドカンを遣はして其の國都を陷ゐれたが暑氣甚だしいので歸途に着いた。世祖は曾に是等南部諸州を降したのみならず尙使を發して南洋の諸州をも招いた。我が紀元千九百四十二年以來マバール(南印度

緬國征伐

交趾征伐

南洋諸國降附

の東岸)ロホー(シヤムの南部)スマトラ以下の諸國も相踵いで入貢したが只ジヤバのみは命を拒んだので千九百五十三年に兵三萬を遣つて之れを擊破させた。

元の領土、を五大部に分つ

第六節　蒙古の極盛

元は太祖鐵木眞が兵を起してより僅かに數十年で古今未曾有の大帝國を形成した。卽ち世祖忽必烈のときに於ける元の領土は歐亞の二大陸に跨り亞細亞に於てはシベリヤの北部印度の南部及ひ日本を除くの外は悉く其の勢力範圍に歸し歐羅巴も東北部の地方は其の領土となつた。此の大領土は大凡そ五大部に分れた。

一、イル汗國

第一部はイル汗國と稱しフラグの子孫が之れに君臨しフラグが西征して得たところの地卽ちアムーダリヤ河以外の西北一帶の地を領有しウルミヤ湖東のマラグアを以て其の都とした。イルなる國名は波斯人が蒙古王朝を呼んだ名から起つたもので其の意味は君主と云ふほどのものである。

二、キプチャク汗國

第二部はキプチャク汗國と稱しヂウアの子バツの西征したときに其の馬

蹄の蹂躙したところの土地卽ち東はキルギス荒原より西はハンガリーの國境に至りダニユーブ河下流の地コーカサス以北の土地は凡べて其の版圖に這入つて居るのでバツの子孫が之れに君臨した。此のキプチャツプ國は又シールオルダ國と云ふこともある。其の國都はサライと稱し今のヴオルガ河の下流にある。

三、チャガタイ汗國

第三部はチャガタイ汗國でさきに太祖がチャガタイに與へたところのシールダリヤ河以外天山附近一帶の西遼の故土を含んで居るのでチャガタイの子孫が其の君となり其の都はアルマリクである。

四、オグタイ汗國

第四部はオグタイ汗國でさきに太祖がオグタイに與へたところの阿爾泰山附近の乃滿の地を領し都をイミル河上に立てた。

五、世祖の直轄地

第五部は世祖の直轄地で世祖は蒙古の大汗として滿洲、內外蒙古支那本部、青海、西藏及び中央亞細亞を領し且つ高麗及び交趾などを藩屬國とした。

直轄地の政治

世祖は自己の直轄地を治める爲めに一つの中書省と十二の行中書省とを設けた。其の中書省と云ふのは河北、山西、山東の地を統御し行中書省は此

四汗國の統御法

の中央なる中書省の出張所であつて各適當な地に置かれた。元政府は留に自己の直轄地を支配するのみならず名義上に於ては他の四汗國をも統御せねばならない。されば世祖は之れが爲めに阿母河行省を立て、葱嶺以西を總べ嶺北行省を置いて杭海(カンガイ)山以北を制し阿力麻里元帥府を立て、天山北路を支配し別失八里元帥府を設けて天山南路を支配し遼陽行省を置いて滿州及び朝鮮を支配させた。

滿屬國の交通

かくの如き歐亞に跨る大帝國が相合して一大帝國となつたのみならず蒙古は其の政治や或は軍事上の目的の爲めに官道も開いたし宿驛も設けたし或は守備隊も置いたからして從來の如く旅行の困難と云ふこともなくなつた。そこで商工の往來は頗る自由となり西方亞細亞及び歐洲の商人は或は中央亞細亞からして天山南路を經て亞細亞に來たるものもあるし或はシベリヤの南部から天山北路を經てハラホリムや燕京に貿易をなすものも陸續として絕えなかつた。のみならず波斯及印度と支那とに於ける海上の交通も盛んになつて江南の泉州や福州などは最も盛んなる貿易

マルコ、ポーロ

場となつた。そこで外國人が或は貿易や或は世界探險の目的で支那に來たるもの殆んで萬を以て數ふるに至り有名なる伊太利のマルコ、ポーロや亞米利加のイブンバツータなどが支那に遠征を試みたのも實に此時である。マルコ、ポーロは我が日本の名を始めて歐羅巴人に披露したものであるからして我々とは最も關係のある人物である。彼れはベニスの商人で其の父と共に亞細亞に來り怜悧敏捷を以て大に世祖の愛するところとなり彼れが歐亞の諸國語に通じて居るのが幸になつて世祖の爲めに四方に使し其の功に由つて次第に抜擢されて河南楊州の都督とまでなつた。居ること十七年で頻りに歸鄕の念を生じたが偶々世祖の女をフラグの孫に嫁することがあつたのでマルコ、ポーロは其の先導者となつて西行したが途中で道を失し一行は燕京に歸らうとしたがマルコ、ポーロは一路を發見し轉じて南疆に至り船によつて錫蘭から波斯に入り以て其の役命を果した。其後彼は直ちに西に向ひ陸路コンスタンチノープルを經て其鄕里に歸つた。マルコ、ポーロの一家は之が爲にベニスの士民の尊敬を受けた。

イブンバツータ

次いでマルコ、ポーロは軍艦の長としてゼノア軍と戰つて敗績し捕へられて獄に投ぜられたが數年にして免された。マルコ、ポーロの經歷談は頗る奇聞に富んで居るからして彼れは獄中にあるとき自ら其の紀行文を草し以て之を世に公にした。是れが抑も亞細亞のことを西洋に傳へた書籍の中で第一書とも云ふべきもので其の中には日本に關する傳說をも揭げた。其には秦の始皇等が方士をして求めさせた蓬萊山を以て日本を擬して居る。そして日本島をジーパング島と名付けて大に歐羅巴人の好奇心を引いた。有名なるコロンブスの亞米利加發見の動機は實はマルコ、ポーロの說に由つて此のジーパングを發見するにあつたことは西洋歷史の傳ふるところである。次ぎにイブンバツータは是れ又當時の大旅行家で三十年間に七萬五千哩の旅行をなし我が紀元二千二年卽ち後村上帝のときに支那に使し泉州に上陸して南部支那の各地を歷遊し遂に北京に達したとのことである。蒙古は又元來世界的大帝國を立てる目的であつたからして他の諸朝の如く人種の異同や國風の異同によつて別け隔てをすることは

四方文明の輸入

支那文明の輸出

宗教に對する態度

なく才能あるものは皆之れを拔擢した。されば蒙古の王朝には或はアラビヤや波斯地方の學者軍人などが使はれても居つたし或は伊太利や佛蘭西の美術家や職工が用ひられても居つた。そこで西洋の砲術、天文學、數學其の他各種の美術は盛んに支那に輸入せられ又支那人の發明せる羅針盤や活版術も西洋に輸出せられた。蒙古は又世界の各宗教に對して全く平等的自由を與へたからして耶蘇教も支那に入り此の宗教上の關係からして歐羅巴諸國の交渉もあつた。無論パツが西征したことに由つて歐羅巴は一時大驚慌を起したことは事實であるが然しながら當時の歐羅巴人は彼の十字軍に由つて盛んに回教徒と爭つて居つたからして寧ろ蒙古と同盟して回教徒を壓倒することを目的とし我が紀元千九百〇五年には羅馬法王のインノーセント第四世の如きはプラン、カルピンを蒙古に送り又千九百十三年には佛蘭西のルイ第九世はルブルクを遣はして蒙古の憲宗をハラホリムに訪問させた。又千九百五十四年にはモンテコルヴイノは羅馬法王の教書を持して海路から支那に來て世祖の許可を經て羅馬教會を

歐洲諸國との交通

燕京に立てた。かくの如くして耶蘇教は一時支那に盛んになつたが元が亡びて東西の交通が杜絶するに及んで耶蘇教も又衰へた。

蒙古の帝王となるにはクリルタイの決議を要す

第七節　海都の亂

蒙古の俗は末子相續法であつて此のことは成吉汗家にも行はれたのであるが然し成吉汗家の家督相續をなすと云ふことは是れは蒙古の帝王たることゝは別問題で蒙古の帝王たらんが爲めには前に述べた通りクリルタイの推戴を待たねばならない。此のクリルタイに於て壯嚴なる即位式を行つて衆に初めて蒙古の君主たることが出來るので此の時には此の大會に參集して居るところの宗族以下のものは皆汝の子孫一片の肉といへども牧場に投じて牛の食ふことを拒み得る間又之れを草間に捨てゝ犬が之れを取ることを防ぎ得る限り我等は皆つて他家の子孫をして王位に即かしめないと誓ふのである。元の太宗も亦其の子の定宗も皆此のクリルタイの承認を得て然る後大汗即ち皇帝の位に即いたのである。然るに定宗の夭死した後興望がツルイ家に歸して此の慣例が破られて宗族の重立つ

憲宗正式に擁らずして即位したので宗族分裂す

たものはアングを推戴して帝位に即かしめた。ところが太宗の子孫及太宗に心を寄せて居るものが舊例に違つて居ると云つてアング即ち憲宗の即位を承認せないでシラムン(太宗の孫)を推戴して之を爭つた。當時は太宗派が失敗したが然し之が爲めに宗族間の分裂を生じた。間もなく憲宗の崩じたときにフラグは波斯に居つたしヂウチ及びチャガタイの兩後王は遠隔の地に居つて急に憲宗の後を嗣ぐことが出來ない。さればとて國家の事情は一日も早く憲宗の後嗣を得ねばならない。そこで忽必烈は一部の宗族諸將の推戴に由つて正當なるクリルタイを經ずして王位に即いた。和林の留守のアリクブカは忽必烈に反對して諸將に擁立せられて忽必烈と對抗した。然し其の結果は忽必烈の將廉希憲の進征に由つて忽必烈の勝利に歸した。是で忽必烈の皇位は一時確定したやうなもの、元の國家は未だ靜謐には歸せなかつた。其れはアリクブカの亂後久しからずして有名なるハイヅの大亂を生じたからである。

忽必烈も亦正式に擁らず即位す

初め成吉汗の四子中でオグタイは最も重望があつて其の兄のヂウチが夭

成吉汗の後各一方に割據す

した爲めに父の後を繼いで大汗となつたが其の死後は兄弟子孫皆皇位を得ることが出來ないで大汗の位は前に述べたやうに成吉汗の小子ツルイの子孫に歸しツルイの子孫は東方では支那本部を占領して元室を有し西方ではイル汗國を有して最も强盛であつた。又ヂウチの子、バツの子孫はキプチャツク汗國を有し其の領土は歐亞の二大陸に跨り頗る廣大なものであつた。チャガタイの子孫も西遼の故土を占有して其の勢キプチャツクに匹敵するほどであつた。只成吉汗の後を繼いだオグタイ即ち太宗の後のみは餘り振はなかつたので父老故舊のものは大に之れを遺憾とし窃かに變に乘じて以て昔日の勢威を恢復せうと謀るものも少くなかつた。此に於てか遂にハイヅの大亂を惹き起した。ハイヅは實に太宗の孫である。前にアリクブカが忽必烈に對抗した場合にハイヅも之を助けたが其の敗亡の後ハイヅはエミルに退いて兵力を養ひ我が紀元千九百二十五年忽必烈が南方に於て宋と戰爭攻伐し忙はしいのを好機として遂に叛旗を擧げて自分こそ蒙古の大汗たるべき權利あるべきものだと主張した。ハ

ハイヅ遂に兵を擧ぐ

イヅの國卽ちオグタイ汗國の西隣はチャガタイ汗國でチャガタイの死後、孫のカラフラグが繼いだが蒙古の定宗は之を斥けて其の叔父イッスマングをチャガタイ汗となした。然し憲宗の大汗となるや又之を斥けてカラフラグの寡婦オルガナを以てチャガタイ汗國の主權者となした。然るにアリクブカの叛旗を擧げて忽必烈と大汗の位を爭ふや彼れはオルガナを斥けてカラフラグの從弟アルグを以てチャガタイ汗となし以て相共に忽必烈に對抗したがアリクブカの破れ次いでハイヅの叛するに及んで忽必烈はイッスマングの孫なるボラグを以てチャガタイ汗となし又ハヅの孫マングチムールをキプチャク汗となし互に相聯合してハイヅを抑壓せうとした。然るにボラグは却つてハイヅに與みしシルダリヤ、アムーダリヤ二河間の蒙古の大汗の直轄地を侵略した。茲に於てマングチムールは兵を出して其後を斷つたからしてハイヅは兵を歸して之れを防いだ。ボラグは之れを好機としハイヅに叛いて悉く其侵略地を占有した。ハイヅは大に怒つてキプチャック汗と和し其の援兵を得てボラグを破つたが世祖

忽必烈が其の釁隙に乘せんことを恐れて間もなく又ボラグと講和した。こゝに於てかキプチャック、オグタイ、チャガタイ三汗國の諸王はタラス河の邊にクリルタイを開いて新たにハイヅを推戴して蒙古大汗とした。實に我が紀元千九百二十九年である。されば元室を除き他の四汗國中三汗國は世祖忽必烈に敵對したもので只アムーダリヤの西にあるイル汗國のみは其始祖フラグが世祖の弟であるからしてハイヅに與みせないで忽必烈の方を助けた。そこでハイヅはボラグ等と兵を合せてイル汗國を侵しボラサン地方を劫略した。イル汗國は其の後相續上の內亂が起つて十分に外患を防ぐことが出來ない。そこでハイヅは後顧の憂なしとして專ら力を東方にのみ注ぐことゝなつた。世祖は之を防ぐ爲めにトクチムールは其の他の諸將を遣はしたがトクチムールは豫ねて世祖に信服して居らなかつたからして同行の大將を促して此の防禦軍の總督たる世祖の子ヌムガシ等を捕へてハイヅに降つた。世祖は大に怒つて當時南宋を征して居たところのバヤンを召し歸して之れを討せしめ大に敵をオルホン河畔に破

つた。其の後、年を閲すること十年ばかりにしてハイヅは遼東及び金の故土に覇を稱して居たナヤン其他の諸將を味方とし東西相呼應して世祖を挾擊せうと謀つた。ところが世祖はバヤンを遣はしてハイヅを和林に扼せしめ自ら遼東を征して之れを平定した。然しながら我が紀元千九百五十九年世祖の崩ずるまでにはハイヅの亂は未だ全く平定せなかつた。世祖崩じて成宗の繼ぐやハイヅは非常の大軍を率ゐて元に攻め入つた。ところが成宗の姪海山(ハイシン)はハイヅをハラホリムとクミルとの間に迎へて之れを擊破しハイヅをして遂に道中に斃れしめた。そこでハイヅの子のチャパルは父に次いでオグタイ家を襲いだが我が紀元千九百六十三年を以て元の成宗に入朝しこゝに三十年來の相續爭は一旦其の終りを告げた。然も其の平和は久しからずして翌年に又チャガタイ家とオグタイ家との爭鬪を生じ之れが爲めにトルキスタンの地は廢墟となつて仕舞つたが我が紀元千九百六十八年チャパルは勢窮つて時の元帝武宗に降りオグタイ汗國は遂に亡びて仕舞つた。そして其地の大半はチャガタイ汗國に合され

た。此の四十餘年間の長き爭亂は遂に東西交通の隔絶となり且つイル汗國とキプチャツク汗國との不和は永く續いて蒙古の大帝國は分裂を來し東方に位せる元室は孤立の勢となつた。是れ實に蒙古が再び漢族の爲めに中國を恢復せらるゝに至つた所以である。

蒙古衰滅の原因

第八節　元の衰頽

第六節に述べた通り蒙古は世祖のときに至り古今東西に未だ曾て見ないほどの大國となつたが此の大國も其の後僅か數十年で衰滅に歸して仕舞つた。何故にさしもの極盛な國が短日月に衰滅に歸したかは一見頗る奇異の感のあるやうであるが然も熟ら其の所謂其の大版圖なるものを致した所以を考へて見ると其の極盛が永く續かなかつたことは當然のことと言はねばならぬ。即ち蒙古が彼れの如き大版圖を開くことが出來たのは成吉汗及び世祖を始めとし一時英雄豪傑が出て其の軍隊を指揮したからである。要言すれば其の大版圖を開いた所以のものは主として人の力である。制度其の他の力ではない。顧つて考へて見ると蒙古は其の大版圖を

一、內部人心の一統がない

開いたとは云ふものゝ其れは只軍隊の力に依つて一時外から異國異境の人民を壓迫したに過ぎない。若し夫れ當時蒙古の版圖に歸した各地各國の狀態を見るに各歷史を異にし風俗習慣を異にし宗敎を異にし制度文物を異にして居る。是れ等內部人心を統一するところの要件が一つとして統一されて居ないのであるからして一朝其の外部の壓迫が緩んだならばさしもの大版圖も忽ちに土崩瓦解を免れないのは當然のことと言はねばならない。無論今日の世界の强國例へば英國の如きは右に述べた內部人心を統一するところの各種の事情が各相異なつて居るところの異國異人種を甘く永久的に維持して居るが然し是れは進步したる近世の文物制度に由つて僅かに之れを維持して居るので蒙古が只外部的壓迫に由つて其大版圖を維持したのとは大いに相異なるところがある。蒙古は旣に英雄豪傑の君があつて軍隊の力に由つて外部的壓迫を以て唯一の統御策となしたものゝ然も英明の君は常に世に出るものではない。旣に英傑の君が代代出ないとすれば偏へに此の君の力に依つてのみ其の版圖を維持せんと

二、王位相續法の不完全は原因とするに足らず

するところのことは到底永續す可からざることは明白なことであらう。曾に蒙古のみならず古今世界征服を以て目的とした英傑の仕事は何れも其の豪傑が死して墳墓の土が未だ乾かない中に皆土崩瓦解して仕舞つた。

アレキサンダーの事業と云ひナポレオンの覇業と云ひ何れも皆此の例に洩れない。是れに由りて之れを觀れば英雄豪傑の士が其の力に任せて他國を蹂躙して大版圖を開くと云ふことは只英雄其の人の力量を試むべき一種の遊戲に過ぎないのである。かゝる遊戲に由つて世界の國民が非常なる無益の壓迫苦痛を受けることは實に迷惑千萬の話で此の點よりすれば永續せない世界的征服を試みる英雄豪傑なるものは實に世界人類の大敵大魔王と言はねばならない。世の歷史家中には蒙古が短小の日月を以て土崩瓦解したことを云て其の王位繼承法の不完全であつたことに歸するものが多い。卽ち蒙古が父子相續法で採らないでクリルタイの結果に由つて其の繼嗣を定めたことはやがて內部の擾亂を來たし以て其の主崩瓦解を速めたものであると云ふので、此は頗る道理ある言のやうではあ

るが然しながら熟ら事相を考へて見ると蒙古が其の極盛を致した所以のものは賢明なると庸劣なるとを問はず徒らに父死して長子之れを繼ぐと云ふ普通一般の法に從はないでクリルタイの會議に由つて親族中の英傑を以て君主と仰いだことにあると言へるのであるからして此點より見れば必ずしも蒙古の早く瓦解したことを以て其の王位繼承法の不完全に歸することは出來ない。若し蒙古の王位繼承法が長子相續法に依つたとしても實際上に於て其の長子なるものが常に父と同一なる英雄であることは出來ない筈である。然らば只英主の外部的壓迫に由つてのみ僅かに統一されて居る大版圖が如何でか永續することが出來やう。要するに大なる版圖の統一は必ず內部統一的要素と外部統一の權力と相待たなければ到底永續することの出來ないもので而して一二の英雄豪傑の短小の日月に其の勢に任せて無闇に大なる版圖を開く場合には到底是れ等統一的諸要素を竝有することは出來ないからして其の英傑の死亡と共に其の版圖が擾亂を來たすことは必然の數と言はねばならない。されば英雄豪傑の

元室衰頽の原因

一、喇嘛僧の跋扈

事業も之れを歷史的に眺めると殆んど夢幻に過ぎないと云ふことは曾に詩人の寢言のみではない。

右に述べた通り余輩は蒙古の土崩瓦解を以て其の內部統一的要素の備はらなかつたことに歸するのであるが然し此の他に蒙古の衰頽殊に東方に於ける元室の衰頽の原因たるものは澤山あるのである。其の第一は喇嘛僧の跋扈である。前にも述べた通り喇嘛敎と云ふものは西藏に行はれた佛敎の一種で此の敎は唐の天寶年間に西藏の王の聘に應じて入國した印度の僧のパドマ、サンバワーなるものゝ始唱にかゝるのである。此の僧は當時西藏に行はれて居つたところの幽鬼崇拜と佛敎とを調和し以て頗る其の人民の尊信を得たところからして次第に喇嘛敎の勢力を增し佛敎の經典は盛んに西藏語に飜譯された。五代梁の世に於て西藏の王ランダルマなるものは當時の喇嘛敎の勢力が國王を凌駕して居ることを惡んで喇嘛敎の寺院を毀ち經典を燒きなどして一時大なる打擊を與へたが間もなく王は人の弑するところとなり其の後は誰れ一人喇嘛敎に敵對するものは

なく國王といへども深く喇嘛教を尊信したからして喇嘛の勢は益盛大となつた。蒙古の勃興するや巧みに喇嘛と和して以て西藏を征服し喇嘛の力に依賴して其の猖獗なる人民を撫御した。是より喇嘛の勢は次第に重くなり曾に西藏のみならず元の國に於ても喇嘛の勢力は次第に擴張し殊に世祖が喇嘛のパスパを以て大元帝師となして以來朝廷の政治に關しても喇嘛は有力なる顧問となり其の後歷代の帝王を始め皇族のものは皆喇嘛を尊信して是れが供養の費用は頗る漠大なるものであつた。かくの如く喇嘛の爲めに費用を要することが多い上に蒙古は連年外征の師を起したからして世祖のときに至つては第一に財政困難を感じた。そこで卽位の始めに王文統の議に由つて交鈔卽ち今日の所謂紙幣を發行して以て財政の困難を救濟せうとしたが猶不十分であつたので世祖はウイグール人のアーメドなるものを用ひて財政のことを司らせた。そこでアーメドは鐵冶を起し鹽稅を增し其の他種々の財源を起したが久しからずして彼れは臣民の怨府となり遂に王著の爲めに殺された。アーメドに次いで財政

二、財政困難

の局に當つたものは盧世榮である。彼れは世祖に說いて云ふには王文統が交鈔の議を立てゝ以來其の弊は中々久しいものである。宜しく銅錢を鑄、綾券を製して交鈔と交へ用ふれば宜からう。泉州杭州の二州には市舶轉運司を立て民に錢を給して諸蕃と商賣せしめ其の利益の幾分を官に納めることゝすれば宜からう。又從來各地に常平倉を設けてあるけれども名のみで實際貯へがない。由つて以後は權豪の恣にして居る鑄器鐵冶を取つて之れを鬻ぎ其の利息を以て粟を貯へることゝせう。酒の稅も甚だ輕いからして之れを增さう。又大いに牧畜を盛んにして以て一方に軍馬の供給を十分になし一方には殖產の上に資せやうと。世祖は之れを聞いて皆時宜に協つたものと思ひ我が紀元千九百四十五年に規措所を立てゝ以て盧世榮の財政策の實施所となした。然し其の劃策が豫定の通り進行せないと云ふので彼れも亦彈劾せられて其の徒黨と共に誅に服した。盧世榮等の爲したところが果して財政の眞理に協つて居るや否やは今日より俄かに斷ずることは出來ないが然も新しい法と云へば能く利害を講究

せないで徒らに排斥することばかりを善しとして居る支那のことであるからして從來の歴史家が非難する如くアーメドや盧世榮は惡るい人間であると定める譯には行かない。然し何れにしても元が其の財政困難の爲めに滅亡を早めたことは事實である。かくの如き原因のある上に漢族の不平は時の來るを待つて一時に爆發せうとした。今の清朝が漢族を征服して以來官府の長官は必ず滿州人を以て補して居ると同じく元朝も亦漢人を以て長官とはなさなかつた。然し之れを事實に徴すると漢族が蒙古族の爲めに征服せられたのは常に其の腕力の上からである。若し夫れ智識技能の點よりすれば漢族は蒙古族に優つて居ること數等。だから政治其の他の事業といへども實際に之れを處辨することの出來たのは重に漢人の力であつた。かゝる譯であるからして漢民族が蒙古族に信服せないで時機を得たならば其の天下を恢復せうとする心の止まなかつたことは當然と言はねばならない。是れ又前の諸原因と相待つて元室の衰滅を來たした所以である。

三、漢族の不平の爆發

元朝は世祖以後一人の英主をも出さなかつたからして帝位は常に權臣の左右するところとなり又如何ともすることが出來なかつた。世祖の死するや早く既に皇位相續の爭亂が起らうとしたが幸に當時は世祖の名將バヤンがあつたからして世祖の遺命を固守して皇孫の成宗を立てた。成宗のときに當つて緬國及び雲南に內亂があつたからして劉深等に命じて之れを討たせたが然も南方瘴癘の氣に苦んで征討の實を揚げることが出來なかつた。是れより元の威勢は先づ西南蕃に衰へた。我が紀元千九百六十七年成宗は嗣子なくして死んだからして皇后のブルガンが政を攝しアーナンダを擁立せうとした。時に成宗の從子海山は久しく北邊を鎭して名望があつたからして朝廷の大臣は皆之れを迎へて帝となさうとしたが其の任地が餘りに遠いので事實の遲延を恐れ取り敢へず海山の弟のアユールバリバトラを河南より招いて急に大都卽ち燕京に來らしめブルガンやアーナンダ等を殺して國を監せしめた。間もなく海山が大都に入つて卽位し武帝となつた。由つてバリバトラを皇太弟となした。是れが又他

元の威勢先づ西南夷に衰ふ

王位繼承の爭

日王位繼承の爭を起す原因となつた。と云ふのは武宗の次ぎにバリバトラが位に卽いて仁宗となつたが當時武宗の子のクシャラは旣に年が長じて居つたからして仁宗の相續者となるべき順序となつて居た。然るに宰相テムダルは仁宗の甘心を買はんが爲にクシャラを讒し遂に之れをば外に出して雲南王となし仁宗の長子シユーラバラを立てゝ皇太子となしたからして武宗の舊臣は怒つてクシャラを奉じて叛旗を擧げた。然し事が成らないで阿爾泰山の邊に逃れチャガタイ汗に依賴した。當時のチャガタイ汗イッセンブカは元の仁宗と不和であつたからして喜んでクシャラを迎へた。仁宗崩じて英宗立つに及びテムダルは擁立の功を恃んで頗る暴虐を恣にしたから帝は之れを疎んじ拜住を信任した。拜住は勵精治を圖りテムダルの徒黨を貶黜した。そこでテムダルの義子のラクチは亂を起して帝及び拜住を殺しイッセンチムールを迎立した。之れを泰定帝と稱した。然も其の帝位に卽くや悉くラクチ以下の叛徒を誅戮し間もなく自分も死んだので太子が上都に卽位した。之れが天順帝と云ふので時に

年僅かに九歲。始め泰定帝の上都に入るやエンチムールなるものをして大都の留守となした。ところが此のエンチムールは曾て武宗に恩を受けたからして泰定帝の死して天順帝の幼稚なるを好機とし武宗の長子クシャラ（さきにチャガタイ汗に投じたものゝ弟ツチムールを大都に迎へて君となし兵を遣つて天順帝を上都に攻めた。帝は出奔して其の終るところを知らない。そこでツチムールはエンチムールと圖つて兄のクシャラを迎へて帝位に卽かせた。是れが卽ち明宗である。然も明宗はチャガタイ汗國から上都に歸着するや否や人の弑するところとなつたのでツチムールは遂に位に卽いて文宗と稱した。エンチムールは擁立の大功があるところからして頗る帝の信任を得、文宗が死んで明宗の二子寧宗及び順宗の相次ぎて立つやエンチムールは其の女を納れて順帝の皇后となし以て天下の大權を專らにした。エンチムールが死んで後順帝はバヤンに信任しバヤンはエンチムールの徒黨を退けて獨り國政を專らにし竊かに不臣の志を懷いて居つたのでバヤンの義子のツクタは順帝と計つて之れを退け

自ら代つて國政を料理した。是れ實に我が紀元二千年である。

漢民族の蜂起

紅巾の賊

第九節　元の滅亡

順帝は卽位以後專ら淫樂に耽り頗る國民の信用を失つたからして交鈔の價値は全く無くなつて國家の財政は益亂れた。そこで豫ねて好機の至るを待ち構へて居つたところの漢民族は四方に蜂起して天下の恢復を謀つた。其の第一に起つたものは我が紀元二千八年臺州(浙江省)に起つた方國珍である。彼れは先づ海賊的に亂を起したが官兵之れを追討して功なく由つて方國珍は進んで温州を攻め勢轉た猖獗となつた。我が紀元二千十一年に至つて韓山童なるもの又亂を直隸の地に起した。韓山童の祖父は白蓮會の燒香を以て衆を迷はしたところからして流謫に遇ふたが韓山童に至つて天下大亂、彌勒佛下生を唱へた。河南及び江淮の愚民は爭つて之れを信じ潁州の人劉福通なども亦僞つて韓山童は宋の徽宗の八世の孫であるからして將さに元に代つて中國に王たるべき筈であると云つて白馬を刑して天地神明に誓ひ同じく兵を起して韓山童を助け其の徒は皆紅巾

を以て符となした。間もなく韓山童は捕へられたが劉福通は逃げて河南に入り韓山童の子の韓林兒を奉じて宋帝となした。山東、山西、陝西の土地は爭つて之に應じた。李二なるものも亦燒香を以て衆を集め徐州(江蘇省)を陷ゐれて之に據つた。此の他、徐壽輝も蘄水及び黃州路を陷ゐれて之に據つた。是れ等の賊は凡べて紅巾を着し燒香を以て其の徒を煽動したからして韓山童等と合せて紅軍又は香軍と稱する。然しながら是れ等の人物は何れも大成者ではなく元に代つて支那の一統をなしたものは朱元璋である。朱元璋は始め郭子興の部將となつた。郭子興は我が紀元二千十二年に兵を起し濠州(安徽省)を陷ゐれて之れに據つた。間もなく郭子興は其の己れの朱元璋に及ばないことを悟つて朱元璋を推して盟主となし自分は其の幕下となつた。由つて朱元璋は南下して金陵(江蘇省)に據つた。時に徐壽輝の部將に陳友諒なるものがあつて其の主を殺し代つて湖南、湖北及び江西の地を占領し更に江東の地を合せんと欲し江蘇の地に據つて居つた所の張士誠なるものと東西よりして朱元璋を挾擊せうと謀つた。

朱元璋起る

順帝上都に走す

朱元璋は先づ發して大に陳友諒を鄱陽湖に破つて之れを殺し悉く其の領土を幷せ更に軍を進めて張士誠を破り以て江淮の地を幷呑した。次いで朱元璋は南の方、方國珍を降したからして江の南北一帶の地は殆んど全く朱元璋の領土となつた。此の勢に乘じ朱元璋は胡廷瑞などを遣はして南の方、福建、兩廣の地を平定せしめ又徐達、常遇春等を遣はして北の方元を討たせた。徐達等は先づ兵を進めて山東を略し河南を取り潼關を陷ゐれて河北に渡り行く行く元軍を擊破して四面より大都に迫つた。當時元は內亂相踵いで少しも統一するところがなかつたからして徐達等の軍が大都卽ち燕京に進んだ時に元軍は少しも防戰する力なく止むを得ず順帝は上都卽ち開平府に走つた。顧みれば世祖が其の國號を元と稱してから爰に至るまで僅かに九十八年である。さて朱元璋は元に代つて帝位に卽き國を明と號し支那本部の地は亦漢人を戴くことゝなつた。時に我が紀元二千二十八年で卽ち足利義滿の將軍となつた年である。

第十節　帖木兒の雄圖

チヤガタイ汗國よ

東方に於ける蒙古族の將さに漢族の爲めに討滅されんとするときに當つて西方に於ては蒙古の疎族タメルラン卽ちチムールなるもの起つて其の祖成吉汗の雄圖を襲踏しやうとした。初めイツセンブカがチヤガタイ汗となるや屢元のために破られて東方の地を失つたからして我が紀元千九百七十五年コラサンの地方に侵入して將に地を西に開かうとしたが偶々元兵がクシャラを追擊して自國の東境に迫ると聞いたので倉卒に軍を班へした。時にイル汗たりしオルジャイツはイツセンブカの退軍を追擊して大に其の西南境を略奪した。之れがためにチヤガタイ汗國は衰へ其の後君となるものも多くは暴戾で政治上又は宗教上の爭亂相踵ぎこゝにチヤガタイ汗國は殆んど土崩瓦解の狀を呈しシールダリヤ河南に於ける各部の酋長は獨立の有樣となつたが我が紀元二千十九年チヤガタイの後裔なるトグルクなるものがチヤガタイ汗となるに及んで大に軍を起して中央亞細亞の叛者を征した。時に蒙古の疎族にタメルランなるものがあつて率先してトグルクの旗下に投じた。間もなくトグルクは本國に內亂

タメルラン自ら兵を舉げ中央亞細亞を征服す

が起つたので其の子のエリアスを中央亞細亞に止めてタメルランを之れが參謀となし以て自らは軍を班へした。然しタメルランはエリアスと協はないでホラズムに逃げて兵を擧げエリアスを討つた。偶々エリアスは父が死んだので東還したからタメルランは悉く中央亞細亞を占領しサマルカンドを都となした。時は我が紀元二千二十九年で卽ち元室滅亡の翌年である。元來タメルランは成吉汗の雄圖にならつて世界征服を夢みたものであるからして其の中央亞細亞を平定するや直ちに葱嶺を越ねて東に進みエリアスの弟カシユガル汗のキズルと婚を通じ以て悉くチヤガタイ汗の舊土を幷呑し且つ西の方ホラズムを討つた。元來ホラズムはキプチャック汗の版圖であつたがキプチャックの勢力の衰ふるや殆んど獨立の國となつた。然し今やタメルランの爲めに擊破せられた。タメルランは更にイル汗の衰頽に乘じてコラサン地方に侵入した。イル汗國はフラグより數傳してカザンに至り大に國勢を改良して羅馬法王ボニフエス第八世と同盟して十字軍に加はり埃及のサルタンを討伐してシリヤの土地

チヤガタイ、イル二汗國を征服す

キプチャック汗國の盛衰

を恢復した。其の後イル汗の國は衰へてコラサン、シリヤなどは皆獨立の姿をなした。然るにフラグの遠孫アウイスなるもの出でバクダッドに據つてコラサンの土地を恢復したがタメルランがコラサン地方を侵したときには恰も其の子のアーメッドなる暴君のときであつたからしてコラサンの住民は皆タメルランに從つた。由つてタメルランはコラサンより波斯の地に侵入し遂にイル汗の全領土を併呑した。是に於てタメルランはチャガタイ、イル汗の二國の大領地を合せキプチャック汗國と境を接するに至つた。特にタメルランはさきにキプチャックの舊領地なるホラズムを占領したからしてこゝにキプチャックとの衝突を免れざるに至つた。

キプチャックは其の始祖バツの子孫相繼いでキプチャック汗となり露西亞の諸侯を率ゐて屢パーランド及びハンガリーを侵略した。我が紀元千九百七十三年ウズベクのキプチャック汗となるや埃及のハリフアと婚を通じて屢イル汗國を討ち又東羅馬帝國や歐洲の諸國と交通して其の文化を盛んにした。彼の伊太利のゼノア人などはキプチャック汗國に來つて

盛んに商業を營み之れがためにアゾフ海濱は當時東西貿易の中心地となつた。時に露西亞の有力なるチユエル大公が叛を謀つたが同じくモスカウ公のイヴアン第一世之れを討じて功勞があつたので大にウズベクの信任を得、我が紀元千九百八十八年命に由つて露西亞の大公となりウズベクに代つて全國の租稅の徵收者となつた。此のモスカウ公イヴアン第一世こそ今日の露西亞帝國の基礎をなした人である。ウズベクの子ジヤニベクも能く父の遺業を繼いでハンガリー及びポーランドなどを侵し且つイル汗國を略して大にキプチヤツク汗の武威を耀かした。ウズベク、ジヤニベクの二代は實にキプチヤツク汗國の最も盛んなときであつたがジヤニベクの死後內亂相踵いでバツの後裔なる金黨汗の血統は斷絕するに至つた。初めバツがキプチヤツク汗となつたときに其の兄のオルダは白黨汗と稱し其の子孫はアラル海の東北キリギス荒原の土地を領し又弟のシバシの子孫はアラル海の西北に居りシバンの弟の子孫はアゾフ海の沿岸の地を占領して居つたが今や金黨汗の血統絕ゆるに及んで是れ等の諸汗は

各キプチヤツク汗たらんことを爭ひ爭援止むときがなかつた。此の內亂に乘じて露西亞の諸侯は獨立を計つた。元來露西亞の諸侯はキプチヤツク汗の爲めに租稅も納めなければならず兵役の義務にも服せなければならず其の他種々の束縛と苦痛とを受けて居つたからしてこゝにキプチヤツク汗の內亂に乘じて獨立を計るに至つたのである。然かもトクタミシユなるものがタメルランに依賴して遂にキプチヤツク汗國を統一するに及び我が紀元二千四十年を以て露西亞に侵入しモスカウを燒いて大に掠奪を恣にしたから露西亞の諸侯は再びキプチヤツク汗に臣服するの止むを得ざるに至つた。トクタミシユは勢に乘じてホラズムに侵入し以て其の領土を東南に開かうとしたがタメルランはトクタミシユの忘恩を怒り我が紀元二千五十年に大軍を率ゐてサマルカンドより進んでウラル河を渡つた。トクタミシユは之れをヴオル河畔に逆擊して大敗し露西亞に逃げて其の諸侯の助を借つたがタメルランは逐うて之れを破り大にモスカウを略奪した。こゝに至つてトクタミシユの勢は全く衰へた。タメルラン遂にキプチヤツク汗國を占領す

タメルランの印度侵略

ンは其れより兵を轉じて南の方印度に侵入せうとした。即ち彼れはカブールより印度に入り遂に我が紀元二千五十九年を以て有名なるデルハイを陷ゐれ頻りに掠奪を恣にしたが偶々オットマン帝國のバジャゼットが自國の虛を襲はんとするの報に接し急に軍を班へした。

オットマン帝國の勃興

オットマン帝國は又之れをオスマン帝國とも云ふ。其の民族は突厥種に屬するのである。成吉汗の世界征服を企つるや裏海の東岸に住んで居つた突厥は其の鋒を避けて小亞細亞地方に逃げた。我が紀元千九百六十年の頃オスマンなるもの突厥の部長となりイル汗國の衰微せるに乘じて小亞細亞の地を略しこゝにオスマン帝國なるものを建てた。是れ實に今の土耳古帝國である。オスマン帝國漸く盛なるに及び東羅馬帝國の領土中、亞細亞にあるものは悉く之れを奪ひ次いで其の根據を歐洲に固め漸次に東羅馬帝國の領土を蠶食し我が紀元二千〇二十一年(足利義詮の世)にはサルタン、ブラッドなるものはハドリャノープルを陷ゐれて其の首府となし漸く北に進んでセルビヤ、ブルガリヤなどを征略し基督教國より強壯なる

男子を貢せしめて鍛練せる軍隊を作り之れをジャニサリと稱した。此のブラッドの子こそ有名なるバジャゼットである。バジャゼットの帝位に上つたときにはオットマン帝國の國勢は益旺盛で東羅馬帝國や歐洲東南の諸國は將さに併呑せられやうとする有樣に瀕したからしてハンガリヤ王のシギスムンドはハンガリヤ、セルビヤ、フランスの騎士を聯合してバジャゼットの軍を迎へ大にダニユーブ河畔のニコポリスの野に會戰したが憐むべし歐洲聯合軍は土耳古軍のために寸斷せられ歐洲全土は之が爲めに頗る震愕した。實に我が紀元二千五十六年卽ち足利義持將軍の時である。當時バジャゼットの意氣頗る軒昂、有名なる羅馬のセントピートル寺院を以て其の厩となさうと傲語した。バジャゼットはニコポリスの戰に次いでコンスタンチノープルを圍み其の落城將さに旦夕に迫つたが耶蘇教の諸國はさきの大敗に懲りて一人として之れを救ふものがなかつた。そこでコンスタンチノープルの落城は免れない勢となつたがタメルランが土耳古の虛を突くに及んでバジャゼットは俄かにコンスタンチノープ

ルの圍みを解きボスフオラスの海峽を渡つて我が紀元二千六十二年大に蒙古軍とアレゴラの平野に會戰したが大敗してバジヤゼットは敵兵に捕へられた。之が爲めにコンスタンチノープルは尙五十年の間生存することが出來た。こゝで一寸附言して置くのはオットマンを擊破した蒙古のタメルランが死んで後オスマン人は再び獨立して更に東羅馬帝國の領土を征服し我が紀元二千百十三年卽ち足利義政のときに當つてオスマンのサルタンモハメット第二世は二十餘萬の大兵を率ゐてビザンチユームを圍んで之れを陷ゐれ東羅馬最後の帝王コンスタンチンパレオロガスは遂に劍戟の間に斃れこゝにコンスタンチノープル大帝の建設以來セントソフイヤの堂上に輝いで居つた十字架は取り去られて土耳古の新月旗は今に至るまで海風に飜つて居る。

さてオットマン帝國を擊破したタメルランは今や又支那の明帝と事を生ずるに至つた。始めタメルランがチヤガタイの故土を定めんとするや東顧の憂を除かんが爲めに好みを明に通じ明の太祖も之に應じて二國の間

バジヤゼットタメルランに捕へらる

タメルランと明との交渉

使者の往復が頻繁であつたが今や彼れは四方平定の勢に乘じて明をも亡ぼし以て遠祖成吉汗の目的とした世界一統の慾望を遂げやうとした。そこで彼れは蒙古大帝國の恢復とマホメット敎の傳播とを口實として大に東征の軍を起した。明の成祖は有名なる宋晟に命じて甘肅の方面を警戒させたが天は此の英傑に年を借さないでタメルランはオトラールに至つて病死した。實に我が紀元二千〇六十五年で明は幸に其の併呑を免れた。

其の後タメルランの國は內亂が踵いで昔日の勢威はなくなつた。

タメルラン死す

第二章　明

第一節　太祖の一統

明の太祖は二十五歲で兵を擧げ初めに金陵を定めて之れを都とし後十有五年にして殆んど支那本部を一統したが然も當時は尙元の遺孽が上都を根據として萬里の長城の附近に出沒し四川、貴州、雲南などの地方にも割據して居るものがあつた。そこで太祖は此の兩方面に向つて計略を施すの

必要があつた。當時元の大將のククチムールは太原を根據として大都を恢復せうとしたが有名なる明の功臣徐達、頻に之れを擊破した。元の順帝も亦明將常遇春の爲めに上都を追はれて內蒙古の應昌に逃れて其の地に死し太子のアユッエリダラは逃れてカラホルムに至つて大汗と稱しククチムールも敗兵を收めて之れに歸したので其の勢盛大となつた。依て將さに大軍を率ゐて南下せうとした。明の太祖は徐達を遣つて之れを征討させたが徐達はククチムールとツーラ河畔に戰つて勝つことが出來なかつた。其の後我が紀元二千〇四十七年に明將馮勝、藍王などは二十萬に將として蒙古の大將ナハチユを金山(奉天府の近傍)に破り翌年トクスチムールをブユール湖畔に斃つて其の皇子妃嬪を虜にした。トクスチムールは當時の蒙古大汗で前のアユッエリダラの弟である。彼れは此の戰に僅かに身を以つて逃れたがツーラ河畔に至つて其の長子の弑するところとなり之れより蒙古の諸部は凡べて土崩瓦解して漠南滿州の地は悉く明の版圖に歸した。之れと相前後して明の大將湯和等は我が紀元二千〇三十一

漠南滿州明に歸す

年を以て當時四川の成都に都して夏王と稱して居つた明玉珍の子明昇を攻めて之れを降した。明玉珍は陳友諒の爲めに殺された故の徐壽輝の部將であつた。彼れは其主の殺されたと同時に獨立して帝王と稱したのである。由つて湯和及び傅友德等は軍を進めて當時雲南に王となつて居つた元將バトサルアルミを討平し中にも傅友德は更に大理金齒など雲南西部諸蕃を討つて之れを降した。時に我紀元二千〇四十一年である。又明將鄧愈は吐蕃を討平しこゝに天下は殆んど一統に歸した。

雲南吐蕃明に歸す

既に外敵を討滅した明の太祖は是れより專ら意を內治に注ぎ有名なる大明律を制定し、位冠の制を唐の時代に復し、程朱の學說を敎育の本源となし天下に令して學校を起さしめ、科舉の法を再興した。又天下兵馬の權は悉く之を朝廷に收め地方には布政使と稱して主として政令を司るものと、按察使と稱して主として刑名を司るものとを置き唯邊要の地には行都指揮使司を置いて國防を嚴にした。國家の制度としては彼れは封建制度を採つて郡縣制度を棄てた。其れは宋元二代が郡縣制度を以て帝室孤立の弊

內治

封建制度を立つ

に陷ゐつたのに鑑みたからである。そこで帝は皇族二十四人を各地に分封し以て一つには邊を守り一つには皇室の藩屏とならしめたが然しながら實際の政治は之れを爲さしめないで又土地も給せないで祿を以て生活させた。だから多くの諸侯は名のみの諸侯で兵馬の權を有したものではない。但し北邊の諸王は帝都を去ることが頗る遠いからして之れに兵馬の權を與へて臨機の處置をなさしめた。之れが實に他日尼大振はざるの勢を釀成した所以で帝の第三子晉王棡の如き第四子燕王棣の如き頗る強大の兵を有して隱然朝廷に抗するの勢力を有して居つた。是れ實に太祖崩じて一杯の土未だ乾かざるに當つて早く既に帝位簒奪の內亂を來たした原因である。無論此の簒奪の因をなしたものは他にもあつたので其の重もなるものは實に太祖が其の宿將功臣を誅滅したことである。太祖は其の性頗る殘忍酷薄で實に支那人の本色を最も善く具へた帝王であつたからして子孫の時代に至り己れと事を共にした功臣が變を爲さんことを慮り有名なる胡藍の二大獄を起して殆んど功臣の全部を誅殺した。初め

太祖崩後內亂の原因

胡藍の獄

胡惟庸は宰相となつて賄賂を貪り權柄を弄し頗る帝の惡むところとなつて居つたからして或る人の謀叛を誣ゆるに及んで帝の爲めに多くの徒黨と共に誅殺せられた。藍玉は勇猛なる將軍として軍功が頗る多かつたからして後に稍驕慢に陷ゐつた。そこで事あれかしと待ち構へて居つた太祖は謀叛を名として之れを族誅し列侯以下坐死するもの實に一萬五千人の多きに及び是れにて明の功臣は殆んど全く芟除されて仕舞つた。

第二節　成祖

惠帝立つ

明の太祖は在位三十一年で崩じ皇太孫が位に卽いた、之れを惠帝と云ふ。惠帝は卽位の初め諸王が大兵を有して各地に雄視するのを憂ひて齊泰、黃子澄と謀つて漢が七國を削平したのに倣つて種々の口實の下に諸王の領地を奪つて之れを庶民となした。ところが豫ねてより己れ太祖に代つて帝たらんことを望んで居つたところの燕王棣は自分が太祖の子でありながら位に卽けなかつたのを不平に思ひ僧道衍を謀主となし齊泰、黃子澄を誅するを名として兵を擧げ其の軍を靖難軍と號した。時に惠帝の方には

燕王の擧兵